

郷ヶ平古墳群

2012年3月

(財)浜松市文化振興財団

郷ヶ平古墳群

GOUGAHIRA TUMULI
HAMAMATSU Cultural Foundation



2012



郷ヶ平3号墳 全景（西から）



1 郷ヶ平3号墳 馬形埴輪出土状態（北西から）



2 郷ヶ平3号墳 I地点出土状態①（北東から）



3 郷ヶ平3号墳 I地点出土状態②（南西から）



郷ヶ平3号墳 出土埴輪



1 郡ヶ平3号墳 出土馬形埴輪



2 郡ヶ平3号墳 出土須恵器

例　　言

- 1 本書は浜松市北区都田町字郷ヶ平16-2における郷ヶ平古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、特別養護老人ホーム・養護老人ホーム新築工事に先立つ発掘調査として、社会福祉法人慈惠庵の委託を受け、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）の指導のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。調査にかかる費用は全額委託者が負担した。
- 3 郷ヶ平古墳群の発掘調査は、4号墳についてのみ、1998年（1次調査）と2005年（2次調査）の2度にわたり実施された。これらの調査成果は、静岡県教育委員会2001『静岡県の前方後円墳一冊別報告編一』（1次調査）と（財）浜松市文化振興財団2006『郷ヶ平4号墳II』（2次調査）として刊行されている。よって、本書で報告する調査は、郷ヶ平古墳群の3次調査にあたる。
- 4 発掘調査にかかる期間は以下の通りである。

試掘調査	平成23年（2011）1月17日～平成23年1月28日
本発掘調査	平成23年（2011）9月6日～平成23年11月16日
（契約期間）	平成23年（2011）8月1日～平成24年3月16日
- 5 試掘調査は、鈴木一有、和田達也（浜松市文化財課）が担当し、原田和子（浜松市文化財課）が補佐した。
- 6 本発掘調査は影山重広、関根章義（浜松市文化財課）が担当し、鈴井けい子（浜松市文化財課）、吉田悠歩（浜松市文化振興財団）が補佐した。
- 7 本書の執筆・編集は、鈴木一有、関根章義、和田達也（浜松市文化財課）が分担して行った。写真撮影は全体写真および遺物写真を鈴木が担当し、それ以外を関根が担当した。執筆分担については文末に示す。
- 8 旧状の写真（PL.1）は、向坂鋼二氏より提供を受けた。
- 9 調査にかかる諸記録および出土遺物は浜松市文化財課が保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SK：土坑 SX：遺物集積
- 3 遺物番号は、遺物の種別にかかわりなく、古墳・遺構ごとに連番を付した。
- 4 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 5 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

[] 土師器・埴輪・土師質土器
[] 須恵器
[] 灰釉陶器・山茶碗
- 6 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

(財) 浜松市文化協会→浜文協
(財) 浜松市文化振興財団→浜文振
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
教育委員会→教委
- 7 本書の作成にあたり、以下の方々・機関の協力、ご教示を得た。

磐田市埋蔵文化財センター 安藤寛 嶋和彦 高橋克壽 竹内直文 富樫孝志 中川律子
中久保辰夫 中嶋郁夫 稔積裕昌 右島和夫 向坂鋼二 室内美香 森泰通 山崎克巳
山田光洋 渡邊武文

郷ヶ平古墳群

目 次

卷頭図版

例 言

凡 例

第1章 序 論 1

- | | | |
|-------------|----|----|
| 1 調査に至る経緯 | 関根 | 1 |
| 2 調査の方法と経過 | 関根 | 2 |
| 3 古墳群をめぐる環境 | 和田 | 4 |
| 4 古墳群の調査履歴 | 和田 | 10 |

第2章 調査成果 15

- | | | |
|---------------------|----------|----|
| 1 試掘調査 | 和田 | 15 |
| 2 検出遺構の概要 | 和田 | 23 |
| 3 古墳築造以前および以後の遺構と遺物 | 関根・鈴木 | 24 |
| 4 郷ヶ平1号墳 | 関根・鈴木 | 26 |
| 5 郷ヶ平3号墳 | 関根・鈴木・和田 | 30 |

第3章 後 論 71

- | | | |
|-------------------------|----|----|
| 1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義 | 鈴木 | 71 |
| 2 郷ヶ平古墳群の形成過程とその特質 | 鈴木 | 80 |

第4章 総 括 鈴木 85

出土遺物観察表 87

図 版

図 版 目 次

卷頭図版

- 1 郷ヶ平3号墳 全景（西から）
- 2 1 郷ヶ平3号墳 馬形埴輪出土状態（北西から）
 - 2 郷ヶ平3号墳 I 地点出土状態①（北東から）
 - 3 郷ヶ平3号墳 I 地点出土状態②（南西から）
- 3 郷ヶ平3号墳 出土埴輪
- 4 1 郷ヶ平3号墳 出土馬形埴輪
2 郷ヶ平3号墳 出土須恵器

図 版

- 1 1 郷ヶ平1号墳の旧状（1966年8月撮影、南東から）
 - 2 郷ヶ平3号墳の旧状（1966年8月撮影、北西から）
- 2 郷ヶ平1号墳 全景（北西から）
- 3 1 1号墳 完掘状況（南西から）
 - 2 1号墳 周溝南東側土層断面（南西から）
 - 3 1号墳 周溝北側土層断面（東から）
- 4 1 1号墳 西側周溝土層断面（北東から）
 - 2 1号墳 北東側周溝土層断面（南西から）
 - 3 1号墳 西側周溝 須恵器出土状態（北から）
 - 4 1号墳 西側周溝 須恵器出土状態（南から）
- 5 3号墳 南側周溝埴輪出土状態（東から）
- 6 1 3号墳 後円部南側周溝埴輪出土状態（東から）
 - 2 3号墳 F地区埴輪出土状態（東から）
 - 3 3号墳 F・G地区埴輪出土状態（東から）
- 7 3号墳 前方部南側周溝埴輪出土状態（西から）
- 8 1 3号墳 前方部埴輪出土状態（南西から）
 - 2 3号墳 E地区形象埴輪出土状態（東から）
 - 3 3号墳 D地区・I地点遺物出土状態（南東から）
- 9 1 3号墳 馬形埴輪出土状態①（北西から）
 - 2 3号墳 馬形埴輪出土状態②（東から）
 - 3 3号墳 馬形埴輪出土状態③（西から）
- 10 1 3号墳 前方部北側周溝埴輪出土状態（北から）

- 2 3号墳 A地区下層埴輪出土状態（東から）
 3 3号墳 C地区下層埴輪出土状態（北西から）
 1 1 1 3号墳 I地点 須恵器出土状態（北西から）
 2 3号墳 I地点 須恵器出土状態（北から）
 3 3号墳 V地点 須恵器出土状態（南から）
 4 3号墳 I地点 須恵器出土状態（南西から）
 1 2 3号墳 完掘状況（西から）
 1 3 3号墳 完掘状況（東から）
 1 4 1 郷ヶ平3号墳 出土須恵器
 2 郷ヶ平古墳群 出土須恵器（1）
 1 5 郷ヶ平古墳群 出土須恵器（2）
 1 6 郷ヶ平3号墳 出土円筒埴輪（1）
 1 7 3号墳 出土円筒埴輪（2）
 1 8 3号墳 出土馬形埴輪
 1 9 1 3号墳 出土馬形埴輪（左側面）
 2 3号墳 出土馬形埴輪 詳細（1）
 2 0 1 3号墳 出土馬形埴輪（右側面）
 2 3号墳 出土馬形埴輪 詳細（2）
 2 1 3号墳 出土形象埴輪（1）
 2 2 3号墳 出土形象埴輪（2）

挿図目次

Fig.1	郷ヶ平古墳群の位置	1	Fig.16	2011年実施試掘調査出土遺物（1）	19
Fig.2	馬形埴輪検出作業	2	Fig.17	2011年実施試掘調査出土遺物（2）	20
Fig.3	現地説明会風景	2	Fig.18	2012年実施試掘調査トレーンチ配置図	21
Fig.4	埴輪復元作業	3	Fig.19	2012年実施試掘調査詳細図	22
Fig.5	整理作業	3	Fig.20	調査区全体図	23
Fig.6	郷ヶ平古墳群周辺跡分布図	5	Fig.21	SK04実測図	24
Fig.7	都田川流域古墳分布図	7	Fig.22	石器実測図	25
Fig.8	西遠江における主要古墳測量図	8	Fig.23	古墳時代以後の遺物	25
Fig.9	郷ヶ平古墳群周辺地形図	9	Fig.24	1号墳測量図	26
Fig.10	郷ヶ平古墳群の調査状況	11	Fig.25	1号墳土層断面図	27
Fig.11	調査以前の3号墳採集遺物	12	Fig.26	1号墳周溝遺物出土状態図	28
Fig.12	4号墳出土遺物	13	Fig.27	1号墳出土遺物	29
Fig.13	6号墳採集遺物	14	Fig.28	3号墳の調査区設定	30
Fig.14	2011年実施試掘調査地区および土柱状図	17	Fig.29	3号墳測量図	31
Fig.15	2011年実施試掘調査詳細図	18	Fig.30	3号墳土層断面図	32

Fig.31	3号墳前方部西側（I地点）須恵器出土状態図	33	Fig.54	3号墳出土馬形埴輪（1）	58
Fig.32	3号墳後円部東側（V地点）須恵器出土状態図	34	Fig.55	3号墳出土馬形埴輪（2）	59
Fig.33	3号墳VI地点（SX01）須恵器出土状態図	35	Fig.56	馬形埴輪における刺突文	60
Fig.34	3号墳出土須恵器・土師器	37	Fig.57	3号墳出土馬形埴輪（3）	60
Fig.35	3号墳須恵器出土位置図	38	Fig.58	3号墳出土馬形埴輪（4）	61
Fig.36	3号墳埴輪出土状態図	40	Fig.59	3号墳出土動物埴輪	62
Fig.37	3号墳埴輪分布図	41	Fig.60	3号墳出土人物埴輪（1）	64
Fig.38	3号墳前方部北側（A～C地区）埴輪出土状態図	43	Fig.61	3号墳出土人物埴輪（2）	65
Fig.39	3号墳北側くびれ部（A地区）下層円筒埴輪出土状態図	44	Fig.62	琴名称模式図	66
Fig.40	3号墳後円部（F～G地区）埴輪出土状態図	45	Fig.63	3号墳出土弾琴人物埴輪の琴	66
Fig.41	3号墳前方部南側（D～F地区）埴輪出土状態図	46	Fig.64	3号墳出土家形埴輪	67
Fig.42	3号墳形象埴輪分布図	47	Fig.65	3号墳出土形象埴輪	68
Fig.43	3号墳前方部南側（E地区）形象埴輪出土状態図	48	Fig.66	SK01 詳細図	69
Fig.44	円筒埴輪部位名称模式図	49	Fig.67	SK01 出土遺物	69
Fig.45	円筒埴輪拓影	49	Fig.68	郷ヶ平3号墳墳丘復元図	70
Fig.46	円筒埴輪の口縁形態	50	Fig.69	淡輪系埴輪の分布	72
Fig.47	円筒埴輪の突帯形態	50	Fig.70	三遠地域における淡輪系埴輪の変遷	73
Fig.48	3号墳出土円筒埴輪（A地区）	51	Fig.71	三遠地域における古墳の変遷	74
Fig.49	3号墳出土円筒埴輪（A・B地区）	52	Fig.72	三遠地域の淡輪系形象埴輪にみる製作技法の特徴	75
Fig.50	3号墳出土円筒埴輪（C地区）	53	Fig.73	三遠地域における淡輪系人物埴輪の諸例	76
Fig.51	3号墳出土円筒埴輪（F地区）	54	Fig.74	三遠地域における淡輪系馬形埴輪の諸例	77
Fig.52	3号墳出土円筒埴輪（G・H地区）	55	Fig.75	淡輪系人物埴輪の分布	79
Fig.53	3号墳出土朝顔形埴輪	56	Fig.76	淡輪系埴輪を採用する前方後円墳と円墳の関係	81

挿 表 目 次

Tab.1	郷ヶ平古墳群一覧表	12	Tab.2	三遠地域における淡輪系埴輪出土地	72
-------	-----------	----	-------	------------------	----

第1章 序論

1 調査に至る経緯

遺跡の概要 郷ヶ平古墳群は、浜松市北区都田町に所在する古墳時代中期後葉から後期前半の群集墳である。古墳群は三方原台地の北縁部に造られ、発掘調査や分布調査、聞き取り調査から総数7基の古墳により構成される古墳群であったとされる。

現在、墳丘を残す古墳は市指定史跡となっている4号墳（前方後円墳）のみである。その他の古墳があったとされる地点の現状は、古墳群の南側が老人ホーム九重荘、北側がミカン畠であった。今回の調査対象地である北側のミカン畠においては、南側を中心に埴輪の破片を採集することができ、埴輪を保有する古墳の存在が推定できていた。

本発掘調査の実施 今回の調査地点は、1～3号墳の存在が想定されていたミカン畠の地点である。平成23年（2011）に社会福祉法人慈悲庵により特別養護老人ホーム・養護老人ホーム新築工事が計画されたため、試掘調査を同年1月17日から1月28日にかけて実施した。

その結果、1号墳と3号墳の2基の古墳が確認された。1基は、対象地の北西から周溝が検出され、1号墳と比定できる。直徑約13mの円墳と推定された。

もう1基は、対象地の南西で周溝が確認でき、3号墳の周溝と考えられた。一辺約10mの方墳もしくは東側に後円部をもつ前方後円墳とみられ、周溝内からは人物埴輪を含む多くの埴輪が出土した。また、攪乱が顕著であったため確かにないが、3号墳の西側には、2号墳の所在が想定されてきた。この地点からも多くの埴輪片が出土し、さらにもう1基古墳が存在している可能性が得られ、開発予定地内に最少で2基、最多で3基の古墳が所在することが確認された。

この試掘調査の結果を受け、社会福祉法人慈悲庵と協議を行い、開発予定地内のうち古墳の存在が確認された南側及び西側において本発掘調査を実施することになった。本発掘調査は平成23年（2011）9月6日から11月16日にかけて実施した。調査面積は834 m²である。（関根）

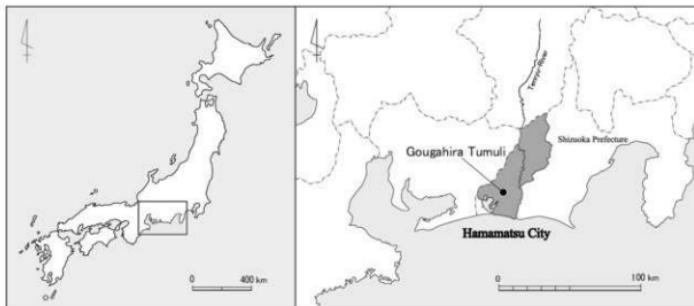


Fig.1 郷ヶ平古墳群の位置

2 調査の方法と経過

調査区設定 今回の調査区は、社会福祉法人慈悲庵による特別養護老人ホーム・養護老人ホーム新築工事範囲内であるが、調査は試掘調査の結果を受け、古墳の存在が想定される範囲 (834 m^2) を対象とした。

座標の設定 調査を開始するに当たり、調査区周辺に任意の基準点を4箇所設置し、世界測地系座標と標高値を求めた (Fig.10)。遺構等の測量はそれら4箇所の基準点を基に行った (T1、T2、4K1、4K2)。なお、4号墳の墳丘上に設置されていた基準点 (T1、T2) についても世界測地系座標を求め、今回の調査区と合成できるようにした。

表土掘削 調査区内の表土および耕作土はバックホーのバケットに平爪を装着し、遺構検出面の上面まで慎重に掘削し、掘削後に遺構検出を行った。

図面作成 遺構の平面図は、調査区内に設置した基準点を基に、トータルステーションを用いて作成した。土層断面図や出土状態図は任意の基準点を設定して作成し、併せてその基準点の世界測地系座標を求め、平面図に合成可能な状態にした。また、3号墳の周溝から出土した埴輪は、写真測量も実施した。

現地調査 現地調査は、9月1日までに現地事務所の設営および調査機材の搬入を行い、9月6日から調査を開始した。9月上旬に、調査対象地内の2号墳と3号墳が想定されていた箇所の表土掘削を行い、中旬から下旬にかけて遺構の検出及び掘削を行った。その結果、3号墳は前方後円墳である可能性が高まり、2号墳は3号墳の後円部を認めたものと考えられるに至った。また、9月下旬には、3号墳の前方部南側で形象埴輪が多数出土し、馬形埴輪が比較的良好な状態で遺存していることが明らかとなった。

10月上旬に3号墳後円部の検出を行った。後円部墳丘の大半は削平されていたが、周溝は南側半分が残っており、多数の埴輪が出土した。また、10月上旬には、検出した周溝を遺物を残した状態で掘削し、中旬には写真測量と遺物出土状態の全体写真を撮影した。この後、埴輪取り上げのために地区設定を行い、円筒埴輪を中心に取り上げを行った。この作業は10月下旬まで行った。



Fig.2 馬形埴輪検出作業



Fig.3 現地説明会風景

また、前方部西側で出土した須恵器についても出土状態図を作成し取り上げを行った。

並行して、1号墳が想定されていた調査区の表土掘削および遺構検出を行った。1号墳推定地において円形の周溝が検出され、円墳であることが判明した。さらに、10月下旬には形象埴輪が集中して出土していたE地区の平面図を新たに作成し、取り上げを行った。その過程で馬形埴輪の部品が、ほぼ全身残っていることがわかり、付随する馬曳き埴輪の存在も明らかとなつた。

10月下旬から11月上旬にかけて、1号墳および3号墳の周溝を完掘した。11月中旬には完掘状況の全体写真を撮影し、調査区の測量を行って、11月16日に現地調査を終了した。

写真撮影 今回の調査における写真撮影では、主に 6×7 判カメラを用い、モノクロとカラーリバーサルのフィルムを使用した。併せてデジタル一眼レフカメラでの撮影も行った。1号墳および3号墳の全体写真には 4×5 判カメラも用いて撮影した。高所からの撮影にはローリングタワーを使用した。

現地説明会 10月2日には現地説明会を開催した。235名の参加を得られ、郷ヶ平古墳群に対する注目の高さがうかがえた。

整理作業 出土した遺物の整理作業は、現地調査と並行して行い、現地調査が終了してからは、浜松市西区神原町の浜松市埋蔵文化財調査事務所に作業場を移した。出土遺物については洗浄・注記・接合・復元・実測・拓本・写真撮影を行った。劣化の著しい埴輪については、洗浄後に希釈した水溶性アクリル樹脂を浸含させ、原形の維持をはかった。接合には、可逆性を考慮し、セルロース系接着剤を用いた。復元には石膏を用い、水性アクリル塗料により着色を行った。遺物の写真撮影は、 6×7 判、 6×9 判、 4×5 判カメラを用いて撮影を行った。また、現場で作成した図面や写真といった記録類は、整理やトレースを行った。

これらの図面や写真をもとに、原稿の執筆と編集を行い、発掘調査報告書を作成した。発掘調査報告書は、2012年3月に刊行した。

(関根)

調査参加者

現地調査 池田典子、石岡幸、金原佳子、渕保代、山本留美子、岩田武道、大城光義、須部公夫、外波山泉、渡辺時次
整理作業 内山敦世、北野恵子、田口久子、中村玲子、林至美、峯野洋子、山本留美子



Fig.4 墓輪復元作業



Fig.5 整理作業

3 古墳群をめぐる環境

(1) 立地環境

郷ヶ平古墳群は、三方原台地の北縁にあたる、浜松市北区都田町に所在する。三方原台地の北側には、都田川が蛇行しながら西流し、浜名湖へと注いでいる。都田川の北岸には北部山地が迫り、都田川下流域の細江町から都田町にかけて、小規模な平地が形成される。この小規模な平地は、都田町の瀬戸付近で台地の北縁が北へ張り出しており、平地の狭窄部が存在する。この狭窄部を境に下流域の平野（中川平野）と、中流域の盆地（都田盆地）に区分できる。郷ヶ平古墳群は、都田盆地を北に臨む台地上に位置する。

(2) 郷ヶ平古墳群をめぐる歴史的環境

郷ヶ平古墳群が所在する都田町周辺は、旧石器時代から人々の生活痕跡が認められ、律令期以降には「京田郷」と呼ばれる。

旧石器・縄文時代 旧石器時代においては、少量ではあるがナイフ形石器や細石刃核の出土が知られ、人々の生活が営まれていたことが分かる。

縄文時代の代表的な遺跡として、中期の環状集落や黒曜石製石器の製作跡などが検出された前平遺跡や土壙墓が検出された川山遺跡が知られる。晩期では磨製石斧の未成品が大量に出土した川山遺跡が知られる。この他、郷ヶ平古墳群の西側には郷ヶ平遺跡が所在し、郷ヶ平古墳群内からも少量の縄文土器片や石器が出土する（2005年調査・本調査）。

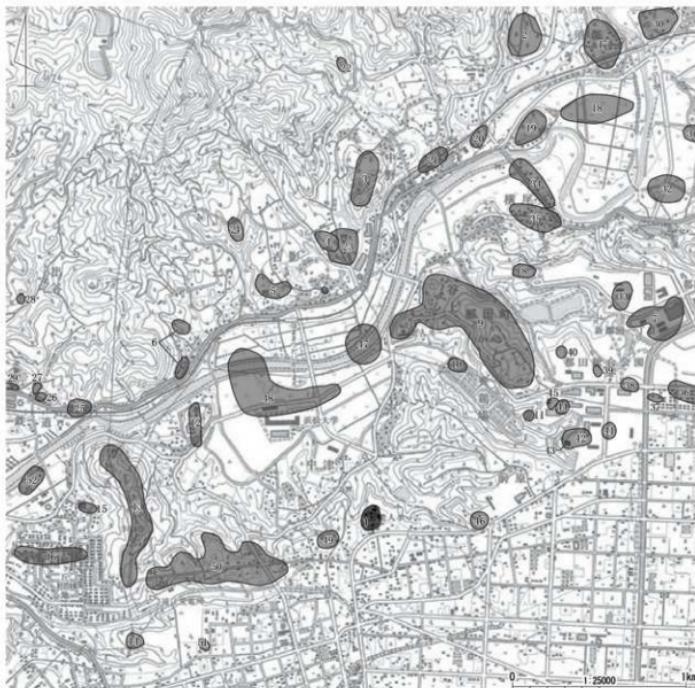
弥生時代 弥生時代の代表的な遺跡として、椿野遺跡や向山遺跡が挙げられる。椿野遺跡は沖積地に所在し、中期に成立して後期には最盛期を迎える。椿野遺跡をはじめとした弥生時代の遺跡は沖積地に造営されるが、向山遺跡は河岸段丘上に位置し、未成品の存在から有孔磨製石器の製作が行われていたとされる。椿野遺跡と対照的な立地条件であり、当時の土地利用や遺跡の性格を考える上で注目される。

また、細江町の滝峯の谷からは6点の銅鐸が出土し、「銅鐸の谷」と呼ばれている。都田盆地周辺の台地上でも、前原Ⅷ遺跡から1例の銅鐸が出土している。

古墳時代 古墳時代の代表的な集落遺跡として、前期の椿野遺跡や中期を中心とする集落が営まれる須部Ⅱ遺跡がある。須部Ⅱ遺跡からは、渡来系遺物である铸造鉄斧が出土し、集落造営集団の性格を考えるうえで注目される（浜文協 2000・鈴木一 2005）。古墳時代の集落については、大規模な集落造営は認められず、遺物の分布から小規模集落が複数展開すると想定されるが、不明な点が多い。

祭祀遺跡では、台地上に立地する中津坂上遺跡が知られる。中津坂上遺跡からは、人形や犬形、機織形といった土製品が出土し、古墳時代中期における大規模な儀礼が執行されたと考えられる。

次に、古墳についてふれておこう。ここでは都田盆地からやや範囲を広げ、都田川流域の古墳を中心に天竜川流域の古墳も交えて概観したい。都田川流域の前期古墳は、井伊谷盆地を臨む丘陵上に限られる。都田川流域における最古の古墳は、井伊谷盆地に所在する北岡大塚古墳である。北岡



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	郷ヶ平古墳群	2	須部B古墳群	3	中野古墳群	4	吉影A古墳群
5	吉影B古墳群	6	吉影C・D古墳群	7	前平古墳群	8	見徳古墳群
9	谷上古墳群	10	鶴ヶ谷古墳群	11	前原古墳群	12	一色古墳群
13	恩塚山古墳群	14	都田山古墳群	15	シダガヤ古墳群	16	神内平古墳群
17	須部I遺跡	18	須部II遺跡	19	尾高山遺跡	20	タマ平遺跡
21	熱田平遺跡	22	ブルカヤ遺跡	23	須倍神社西遺跡	24	吉影八幡神社遺跡
25	平石古窯跡	26	平尾敷古窯跡	27	瀬戸古窯跡	28	出ヶ谷古窯跡
29	宝林寺境内古窯跡	30	川山遺跡	31	新木遺跡	32	川の前遺跡
33	都田山十三I遺跡	34	貴見守東遺跡	35	都田町本村遺跡	36	前原IV遺跡
37	前原VII遺跡	38	前原II遺跡	39	前原III遺跡	40	前原I遺跡
41	前原IX遺跡	42	前原VII遺跡	43	前原御陣出土地	44	前原VI遺跡
45	前原V遺跡	46	前原X遺跡	47	安六遺跡	48	椿野遺跡
49	郷ヶ平遺跡	50	中津遺跡	51	坂上遺跡	52	青木遺跡

Fig.6 郷ヶ平古墳群周辺遺跡分布図

3 古墳群をめぐる環境

大塚古墳は、全長 49.5m を測る前期前半の前方後方墳で、井伊谷盆地北東部の丘陵上に築かれる。その後、井伊谷盆地東部の丘陵上に馬場平古墳が築かれる。馬場平古墳は、全長 47.5m を測る前期末葉の前方後円墳で、後円部の中心には粘土椁が遺存する。1934 年には、画文帶神獸鏡や銅鑑をはじめとした副葬品が採集された。また、馬場平古墳の南には同時期に築造されたとみられる馬場平 3 号墳がある。馬場平 3 号墳は、変形獸文鏡などが採集されている。墳形については円墳もしくは前方後円墳とみられるが、地形改变が顕著なため定かでない。

西遠江における前期古墳についてふれたい。天竜川流域には、北岡大塚古墳と並び、西遠江における最古の古墳とされる小銚子塚古墳（前方後方墳）がある。また、前期中葉には当該地域における最古の前方後円墳と位置付けられる赤門上古墳があり、前期後半には、当該地域において最大規模の前方後円墳である銚子塚古墳（全長 112m）が築かれる。前期の終焉とともに西遠江では、中期中葉の欠山 1 号墳まで前方後円墳の築造が停止し、その間には直径 40m 規模の円墳（造出しを有すものを含む）が主体を成す。

中期の古墳は、井伊谷盆地・織江平野・都田盆地を臨む丘陵上に展開する。中期中葉には、井伊谷盆地南東部の丘陵上に谷津古墳が築造される。谷津古墳は、直径 36m を測る造出しを有する円墳である。井伊谷盆地周辺における大型墳築造は谷津古墳をもって終焉を迎える。織江平野南部の丘陵上で最古の古墳は狐塚古墳である。狐塚古墳は 1 辻 22m を測る中期中葉の方墳で、長方板革縫短甲や大刀、鉄鐵などの副葬品が採集されている。また、都田川流域において埴輪が伴う最古の古墳である。立地や地域における墳形の特殊性、副葬品の組成などから、被葬者は武官的な立場の人物が想定される（鈴木一 2012）。その後、陣座ヶ谷古墳が織江平野南部の丘陵上に築かれる。陣座ヶ谷古墳は、全長 55m を測る中期後葉の前方後円墳で、墳丘には埴輪がめぐる。1915 年には主体部が調査され、大刀や鏡が出土した。都田川流域では、陣座ヶ谷古墳を最後に大型墳の築造は終焉を迎える。つづいて、神内平 1 号墳が築かれる。神内平 1 号墳は、全長 17m とされる中期末葉の帆立貝形古墳で、馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪や円筒埴輪が出土する（細江町教委 2005）。このほか、中期とみられる古墳として織江平野東部の丘陵上に位置する将軍塚古墳や都田山 1 号墳がある。将軍塚古墳は、直径 26m の円墳であることを除き、詳細は不明である。

都田盆地周辺の丘陵上における最古の古墳は、中期後葉の郷ヶ平 1・3 号墳である。郷ヶ平 1 号墳は直径 13.6m を測る円墳で埴輪を伴わないが、郷ヶ平 3 号墳は全長 22.3m を測る前方後円墳で馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪や円筒埴輪が出土する。

都田川流域における古墳時代前期から中期にみられる首長墓形態の変化や首長墓域の移動、埴輪の受容は、当時の地域社会・文化の変遷をうかがわせる事柄として注目される。

後期の古墳は、都田盆地・織江平野・井伊谷盆地で築かれる。前方後円墳は、古墳時代後期前半に都田盆地を臨む台地上に郷ヶ平 4 号墳の築造を最後にみられなくなる。前方後円墳が築かれなくなることと軌を同じくして、横穴式石室が都田盆地において受容される。都田川流域における最古の横穴式石室は古墳時代後期前半の吉影 D 3 号墳であり、埴輪を有する最終末の古墳でもある。吉影 D 3 号墳は、都田川流域で唯一、両袖式石室を内蔵する。この後、横穴式石室を内蔵する古墳が多数築造されるが、無袖式石室または、擬似両袖式石室のみであり、天竜川流域の様相とは異

なり、他地域との結びつきの差異を示す事例として注目される。このほか後期から終末期にかけて、都田川流域の山麓には横穴式石室を有する群集墳が形成される。

都田川流域における特定の形態に偏った横穴式石室の受容傾向は、都田川流域における社会構造の変遷や地域性を示す事象として注目される。

奈良・平安時代 律令体制下の都田川流域は、遠江国引佐郡と呼ばれ、「京田」・「刑部」・「渭伊」・「伊福」の4郷が知られる。各々、現在の都田地区・中川地区・井伊谷地区・氣賀地区に比定される。引佐郡の郡家は都田川と井伊谷川の合流地点に立地する井通遺跡とその周辺とみられ、同遺跡からは多くの墨書き器、硯をはじめとした官衙関連遺物が豊富に出土する。

都田盆地における奈良・平安時代の集落は、椿野遺跡や川の前遺跡などで遺物が散見されるが、集落の実態は不明である。11世紀後半には都田地区に「都田御厨」が置かれ、関連があるとされる鴨ヶ谷古窯が築窯される。

中世以降 貴見寺東遺跡や須頭II遺跡、椿野遺跡では、室町時代の遺物がみられ、尾高山遺跡では集石墓がみられるのみで、生活の様子をうかがい知るには資料的制限がある。遺構・遺物から当該期の様子をうかがい知ることはできないものの、文献史料により当時の地域社会の一端を知ることができる。15世紀中頃には、都田御厨が上下に分けられ、上御厨を池島氏、下御厨を堀江氏が管理し、16世紀初頭の今川氏による侵略で、堀江氏の滅亡や斯波氏の駆逐が達成される。今川氏の支配以降、徳川氏領、堀江氏領、幕府天領などを経て、旗本松平氏領となり、幕末を迎える。(和田)

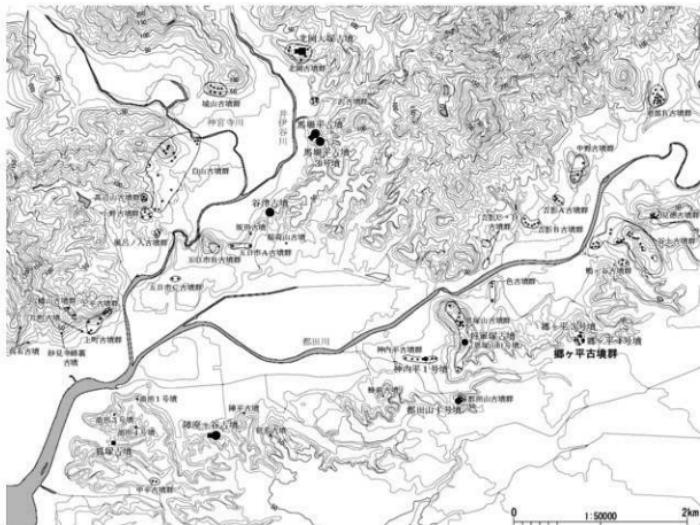


Fig.7 都田川流域古墳分布図

3 古墳群をめぐる環境

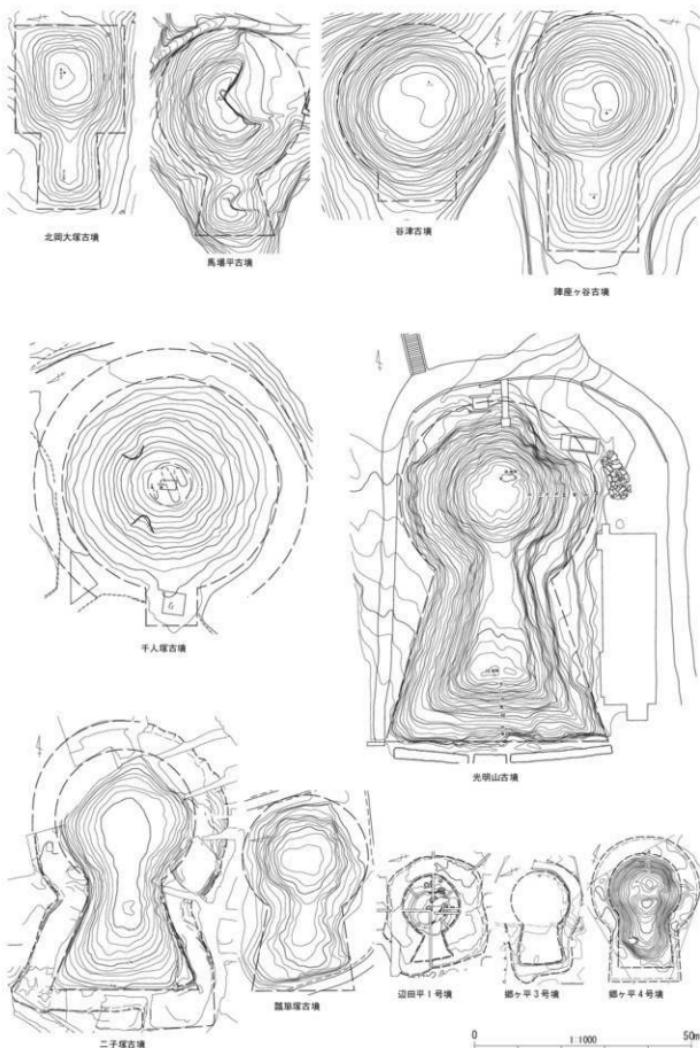


Fig.8 西遠江における主要古墳測量図



Fig.9 郡ヶ平古墳群周辺地形図

4 古墳群の調査履歴

郷ヶ平古墳群は、7基（従来、8基で構成されると考えられていたが、今回の発掘調査により2号墳と3号墳が同じ前方後円墳の後円部と前方部であることが判明した）の古墳で構成される古墳群である。郷ヶ平古墳群は、4号墳を除く全ての古墳が、調査されることなく1966年のミカン畑造成などにより墳丘を失った。旧状の写真はPL.1に示す。現状では、3号墳と6号墳の推定地に埴輪片や土器片が散布している状況から、過去に複数の古墳が存在したことをうかがい知られるのみである。

現存し、発掘調査が行われた4号墳や本発掘調査により周溝が確認された1号墳と3号墳の位置や墳形は、ほぼ確定的なものである。しかし、そのほかの古墳については、埴輪片の散布状況と地域住民への聞き取り調査によって復元的に示されているものである。今後の調査により、位置や墳形などが変更される可能性がある。郷ヶ平古墳群における発掘調査は、4号墳と今回報告する本発掘調査の地点、および九重莊の敷地内において実施されている。以下、3・4・6号墳出土遺物と1・3・4号墳の調査歴をまとめておきたい。

分布調査資料 3号墳と6号墳の推定地から遺物が採集されている。3号墳からは円筒埴輪や朝顔形埴輪が採集される。6号墳からは、須恵器の円筒埴輪や朝顔形埴輪、形象埴輪が採集されている。6号墳の形象埴輪の中には、毎の使用法の一端を示した毎を掛け持つ女子埴輪や馬形埴輪、小札甲を着用した武人が含まれる。

1次調査 4号墳にかかる墳丘測量を静岡県教育委員会が、また、同古墳の墳丘確認調査を浜松市博物館がそれぞれ実施した。墳丘確認調査は1998年に実施され、6世紀中葉の前方後円墳で、全長26.5m、墳丘主軸が真北から22度西へ振っていることが判明した。また、墳丘に葺石は施されないが、埴輪が樹立される。周溝は、いわゆる鍵穴形を呈し、幅約4mを測る。

出土遺物は、埴輪や須恵器、土師器があり、墳丘上や周溝内から出土している。埴輪は、周溝内に転落した状態での出土が多く、墳丘斜面上からも出土がみられる。墳丘における地山と盛土の境付近からは、樹立した円筒埴輪の基底部が原位置をとどめた状態で出土した。また、樹立された円筒埴輪よりも墳丘の上方から埴輪片が出土しており、墳丘上位にも埴輪が並んでいたことがうかがえる。このほか、武人埴輪片が出土しているが、近接する6号墳に由来する可能性を含んでいる。

2次調査 4号墳墳丘東側の市道（都田133号線）の改修が計画され、工事にともない破壊される可能性のある部分を中心に発掘調査が行われた。周溝が鍵穴形であることが追認され、周溝内を中心に埴輪や須恵器、土師器が出土した。墳丘東側のくびれ部付近からは、円筒埴輪や須恵器などとともに馬形埴輪が出土している。また、この地点からは、拳大の円錐が埴輪に伴って多数出土しており、くびれ部やその周辺において円錐を用いた何らかの施設が存在した可能性が指摘される。

試掘調査 本発掘調査の範囲及びその南側において2011年と2012年に試掘調査が実施されている。2011年の試掘調査が本発掘調査に先立つ試掘調査である。2度の試掘調査の成果は、第2章1において詳述する。

（和田）

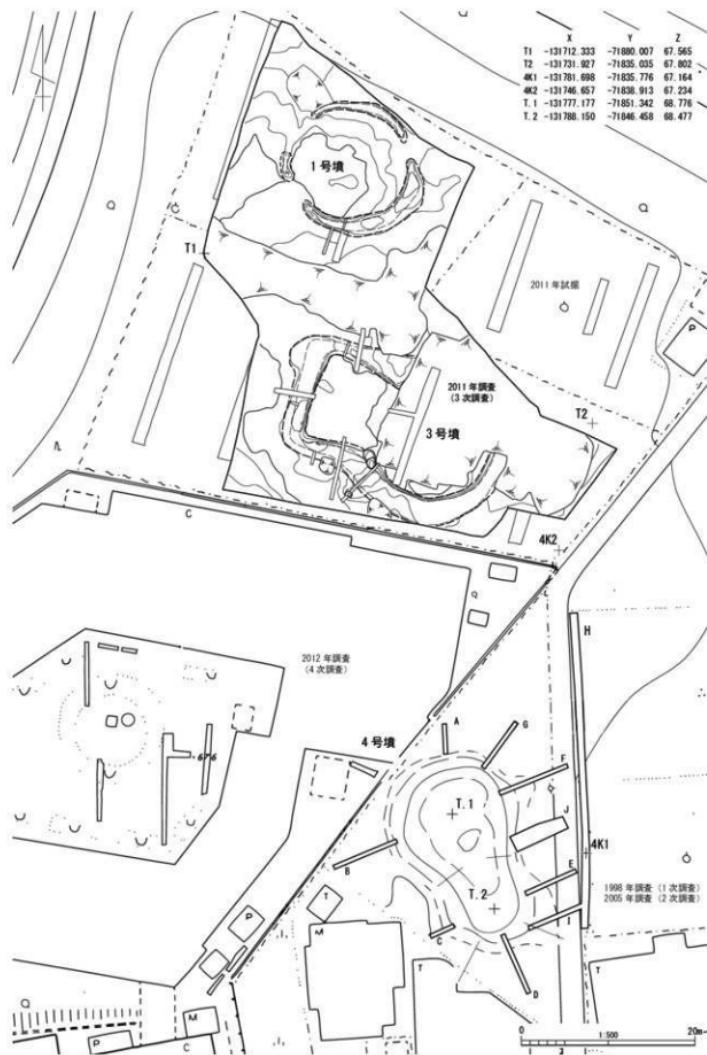


Fig.10 郷ヶ平古墳群の調査状況

4 古墳群の調査履歴

Tab.1 郷ヶ平古墳群一覧表

古墳名	墳形	周 機 (m)	主体部	出土遺物	築造時期	現状	備考
1号墳	円墳	直径 13.6	(竪穴系)	須恵器・土師器	TK23	消滅	
3号墳	前方後円墳	全長 22.3, 後円部直径 14.6	(竪穴系)	埴輪・須恵器など	TK23	消滅	
4号墳	前方後円墳	全長 26.5, 後円部直径 16.5	(竪穴系)	埴輪・須恵器など	TK10	保存 浜松市指定史跡	
5号墳	(円墳)	(直径 10.9)	(竪穴系)	なし	不明	削平	
6号墳	(円墳) *	(直径 14.1)	(竪穴系)	埴輪・須恵器	TK10	削平	
7号墳	(円墳)	不明	不明	なし	不明	削平	
8号墳	(円墳)	不明	不明	なし	不明	削平	

*6号墳は前方後円墳の可能性あり 2号墳は欠番; () 内は不明であることを示す。

【参考文献】

- 引佐町教育委員会 1980『引佐町の古墳文化Ⅰ』
 引佐町教育委員会 1981『引佐町の古墳文化Ⅱ』
 引佐町教育委員会 1983『引佐町の古墳文化Ⅲ』
 引佐町教育委員会 1988『引佐町の古墳文化Ⅳ』
 引佐町教育委員会 1998『北岡大塚古墳 引佐町の遺跡Ⅷ』
 静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳』
 静岡県考古学会 2003『静岡県の横穴式石室』
 細江町教育委員会 2005『神内平古墳群』
 (財) 浜松市文化協会ほか 2000『須部II遺跡』
 (財) 浜松市文化振興財団 2006『郷ヶ平4号墳II』
 鈴木一有 2005「鉄器の受容からみた古墳時代中期の東海」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム
 鈴木一有 2012『孤塚古墳調査概要報告』平成22年度 浜松市試掘調査概要 浜松市教育委員会

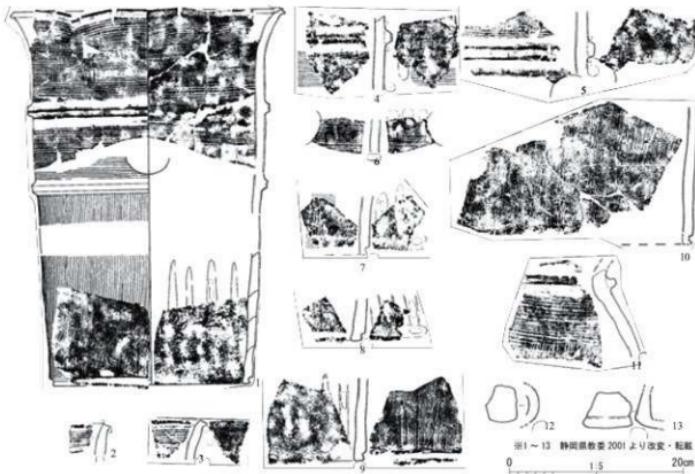


Fig.11 調査以前の3号墳採集遺物

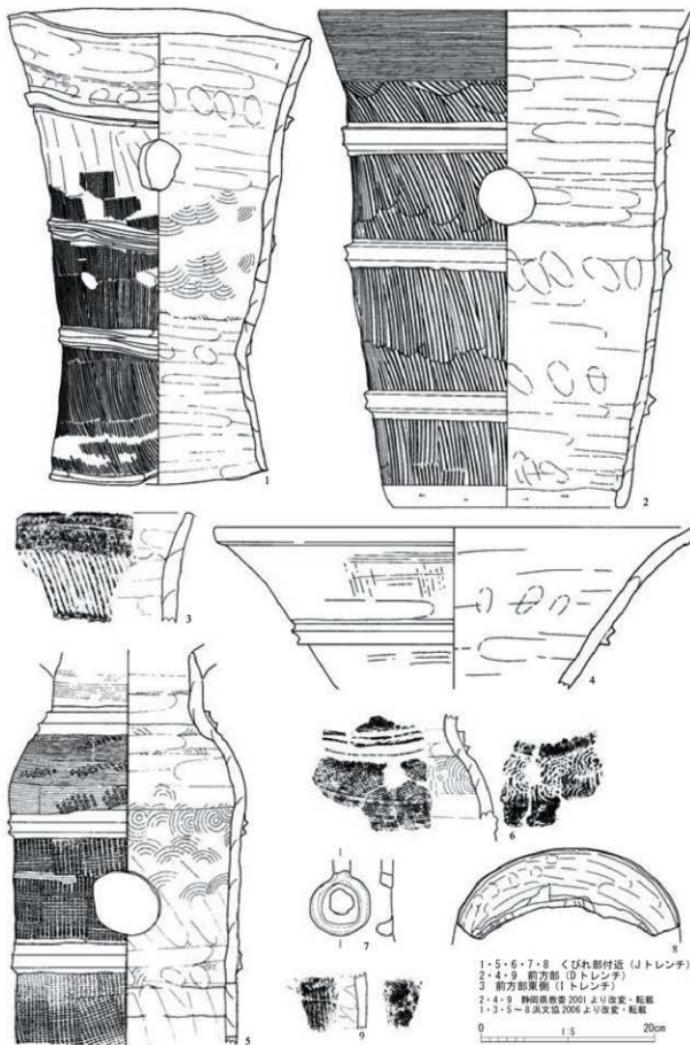
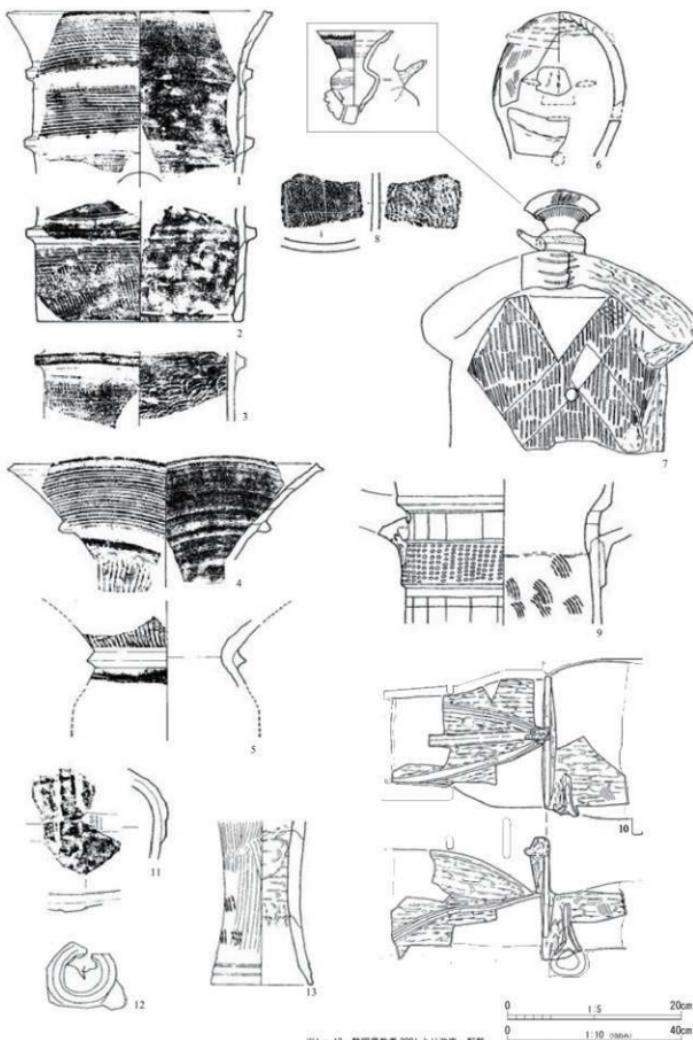


Fig.12 4号墳出土遺物

4 古墳群の調査履歴



*1～13 静岡県教育委2001より改変・記載

Fig.13 6号墳採集遺物

第2章 調査成果

1 試掘調査

(1) 2011年実施の試掘調査

概要 郷ヶ平古墳群3次調査地点における遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査は、2011年1月17日から28日にかけて実施した。調査は、対象地内にトレンチを15箇所設定した。試掘調査の総面積は324m²である。

調査は、バックホーで層位的に掘削し、遺構・遺物の出土状況を確認し、人力で基盤層に掘り込まれた遺構・遺物の検出を試み、土層断面の観察を行った。調査終了後は、遺物出土地点には遺構保護のため検出面に砂を敷き、その他は流用土を用いて埋め戻し、旧状に復した。

対象地内の基本層序は、表土・耕作土と橙色粘質土（地山）の2層である。地山は耕作による擾乱を受け、4・5トレンチでは地表面から深さ0.8mまで掘り起こされた部分もある。ミカン畑造成時に屋根瓦を歓内に敷き詰めており、現代の瓦が多数みられる。

遺構が確認できたトレンチは、3・4・7・11～14トレンチである。このうち、対象地南側にある3・11・12・14トレンチにおいて遺物を多く含む周溝が認められた。以下、推定される古墳ごとに調査所見を示す。

なお、1・2・5・6・8・9・10・15トレンチでは、遺構が認められなかった。ただし、2・5トレンチは埴輪が出土した。特に5トレンチの擾乱内から多くの埴輪片が出土している。

1号墳 7トレンチ南側において周溝が検出された。検出面から周溝底までは、深さ50cmを測る。周溝幅は、南側肩部が擾乱により確認できず、確かにないが6m前後と想定できる。遺物は出土していない。

7トレンチで検出された周溝の範囲を知るため、7トレンチと8トレンチの間へ東西方向に13トレンチを設定した。13トレンチ東側で周溝の外周が認められ、円墳は北へ曲がることが確認できた。北壁に沿って3カ所にサブトレンチを設け、周溝立ち上がり周溝底の確認を行った。検出面から周溝底までは、深さ25cmを測る。周溝幅は、13トレンチ北西部に周溝立ち上がりが認められたことから、5m前後と言えよう。周溝の埋没が進行した段階で、7世紀後半以降の長頸壺（Fig.16-1）が出土した。

試掘調査の結果、1号墳の所属時期は現在のところ定かでなく、7世紀代までにある程度、周溝が埋没していたことが指摘できるのみである。

1号墳は直径10m程の円墳の可能性が高いことが判明した。築造時期は未確定だが、7世紀まで利用されていたとみられる。

推定2号墳 5トレンチ付近に2号墳が存在していたと伝えられている。5トレンチは、擾乱内から大量の埴輪片が出土し、古墳の存在が推定できる。

なお、本発掘調査の結果、從来2号墳とされていた部分は、前方後円墳である3号墳の後円部にあたることが判明している。

1 試掘調査

3号墳 3トレンチでは南端と北端から周溝が検出された。西壁に沿って30cm幅のサブトレンチを入れ周溝の深さを確認したところ、南側の周溝は検出面から周溝底まで深さ40cmであった。周溝幅は、周溝内側肩部と周溝底の関係から6m前後と推定できるが、周溝南側肩部が確認できず定かでない。

サブトレンチ内の周溝埴丘側肩部から埴輪がまとまって出土した。出土遺物の中には、円筒埴輪のほか、人物埴輪の頭部や備・腕がみられ、須恵器が共伴する。出土状況の記録と、一部の取り上げを行うに留めた。

いっぽう、北側周溝は、検出面から周溝底までの深さが約30cmであった。周溝幅は検出面で2.2mを測る。

周溝の平面形を確認するため、11・12トレンチを設定し、その結果、11トレンチ南側から周溝が北へ、12トレンチ内で東へ各々曲がり、3トレンチ北側周溝に向かう様子が看取された。周溝の幅はいずれもトレンチ内で確認できず、定かでない。

11トレンチ北壁に30cmのサブトレンチを設定し、周溝底の確認を試みた。周溝底は概ね検出面から25cmの深さである。周溝埋土から須恵器杯身が破碎された状況で出土した。下層にも遺物が存在する可能性があり、調査は、上層で確認した杯身の取り上げを行った。

12トレンチは周溝のプラン確認に留めた。周溝埋土からは、朝顔形埴輪や円筒埴輪が出土した。

また、周溝の南側を確認するため、3・4トレンチの間に14トレンチを設定し、周溝外周の確認を試みた。しかし、周溝立ち上がり付近に擾乱が認められ、周溝外周は確認できなかった。14トレンチ北側では大量の埴輪を含む周溝埋土を確認した。

なお、4トレンチにおいても周溝埋土が確認されたが、周辺の擾乱が激しく、周溝の屈曲などは確認できなかった。

3号墳出土遺物 (Fig.16-2～Fig.17) 3号墳の周溝内やその周辺から須恵器や円筒埴輪、形象埴輪が出土した。須恵器のうち全形がうかがえるものは坏身(11)のみで、浜松市東区有玉窯産の製品と類似する。

円筒埴輪は、口径の復元できるものが14のみで37.6cmを測る。突縁は、断面「コ」字形もしくは緩やかな「M」字形であり、透孔は円形を呈する。底部には淡輪技法の特徴を有する。形象埴輪には、女子埴輪の頭部(21)や人物埴輪の腕(22)、馬形埴輪の鉤(23・24)がある。

3号墳は、東側が明らかでないため明確ではないが、一辺10m前後の方墳もしくは東側に後円部をもつ前方後円墳の可能性があり、埴丘には、人物埴輪や馬形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪を伴うことが明確になった。また、須恵器を用いた祭祀・儀礼を行った痕跡が窺える。3号墳は出土遺物から5世紀後葉から6世紀初頭頃の築造と考えられる。

(2) 2012年実施の試掘調査

概要 郷ヶ平古墳群において、九重莊の建て替え工事が計画されたため、2012年2月6日から20日にかけて遺構・遺物の有無を確認するため試掘調査を実施した。対象地にトレンチを8箇所設定した。試掘調査の総面積は30.33m²である。調査は、バックホーで層的に掘削しつつ、遺構・

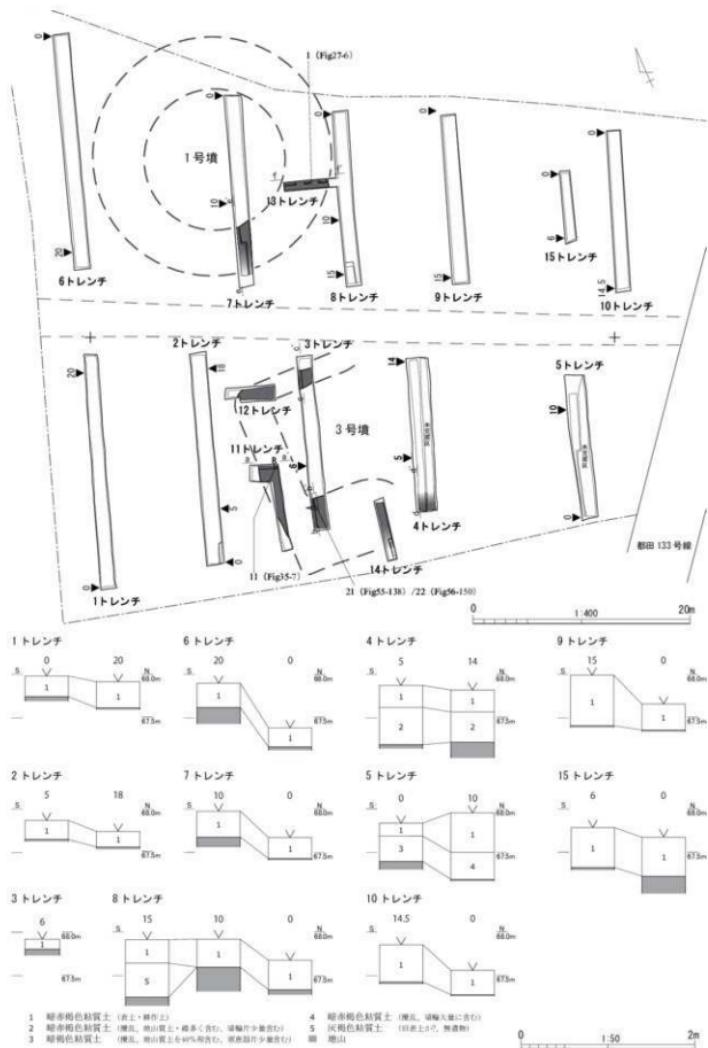


Fig.14 2011年実施試掘調査地区および土層柱状図

1 試掘調査

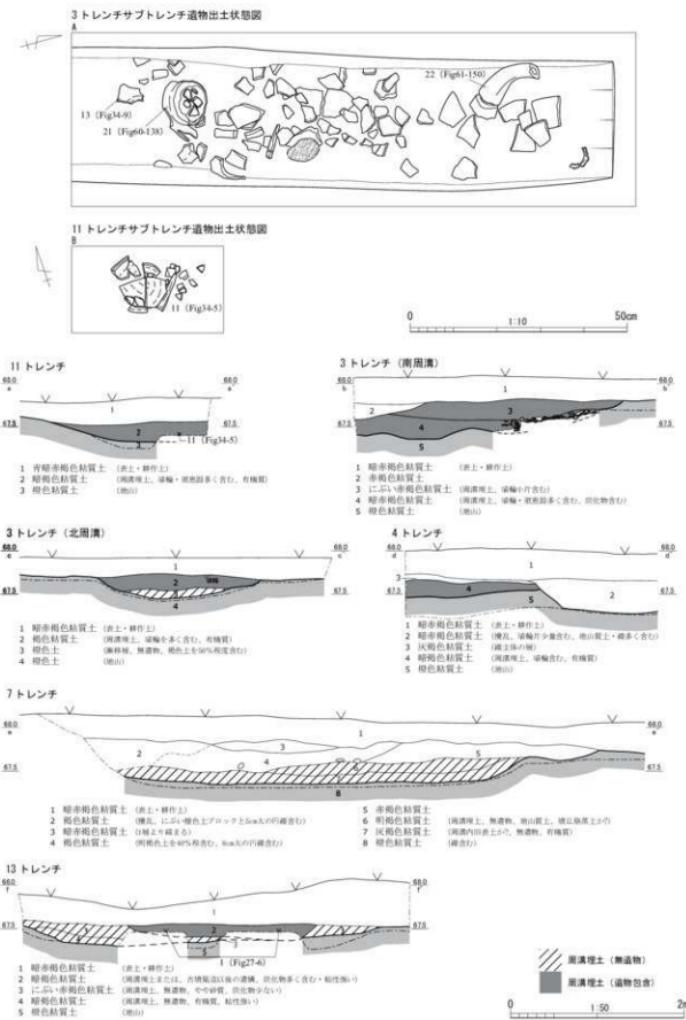


Fig.15 2011年実施試掘調査詳細図

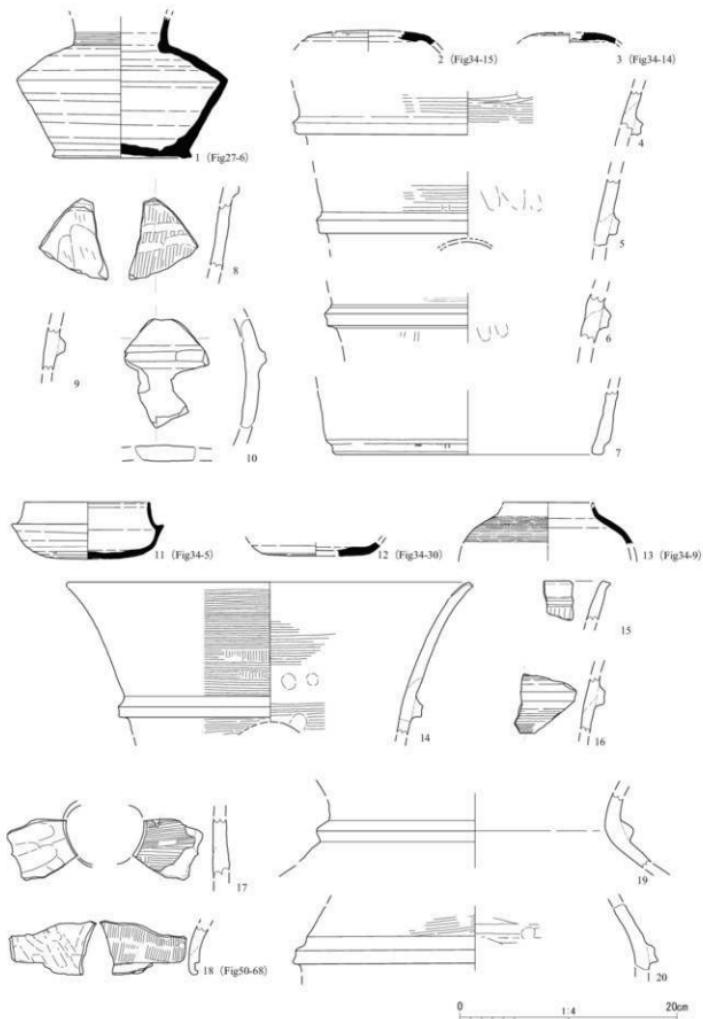


Fig.16 2011年実施試掘調査出土遺物（1）
1:13 トレンチ 2:9-10 トレンチ間 3～10:5 トレンチ 11:11 トレンチ 12・16:2 トレンチ
13・15:3 トレンチ南側周縁 14:3 トレンチ北側周縁 17:4 トレンチ 18～20:12 トレンチ

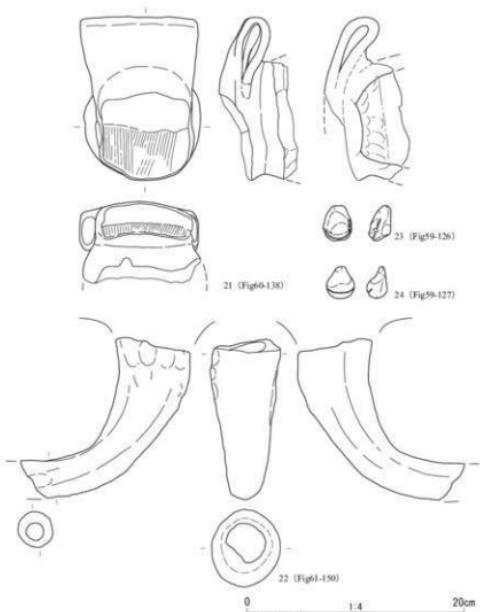


Fig.17 2011年実施試掘調査出土遺物（2）
21～24：3トレンチ南側周溝

の調査時にも縄文土器が出土しており、縄文時代の遺跡が広がっている可能性が高い。

6号墳 6号墳推定地に3トレンチを設置し、周溝などの検出を試みたが、古墳に伴う遺構や遺物は全く認められなかった。しかし、3トレンチよりもさらに南の地点から6号墳の埴輪と共に通性をもつ30余点の埴輪片が表採され、従来の想定位置よりも南に6号墳が所在する可能性が高まった。6号墳に、埴輪を伴うことから前方後円墳の可能性も十分考えられる。試掘調査は部分的であるため、6号墳の墳形や規模を確定するには至っていない。今後の調査によって、墳形の認識が変わるべきがある。

所在を確認できない古墳 5・7・8号墳については、6箇所にトレンチを設定したが、擾乱が著しく、古墳に関する遺構の検出はなかった。また、遺物もほとんど出土せず、埴輪は全く出土していない。5号墳と7号墳は、埴輪を伴わない古墳である蓋然性が高い。しかし、6トレンチから6世紀前半の須恵器壺蓋（Fig.19-1）が出土した。6トレンチ付近に所在が推定される5号墳もしくは7号墳に伴う遺物と想定され、5号墳または7号墳は6世紀前半の古墳であるといえよう。

（和田）

遺物の出土状況を確認し、人力で基盤層に掘り込まれた遺構・遺物の検出を試み、土層断面の観察を行った。調査終了後は、流用土を用いて埋め戻し、旧状に復した。

この試掘調査は、郷ヶ平古墳群3次調査終了後に実施されたものであるが、古墳の分布や時期に一定の示唆を与える成果を得たため、本報告書に掲載した。

4号墳 4トレンチを後円部西側に設定し、周溝の遺存状態の確認を試みた。周溝の遺存は認められたが、周溝外側の肩部は、トレンチ内に収まらず確認できなかった。周溝内からの埴輪の出土は、墳丘から離れた部分であったこともあり少ない。

また、擾乱土中から縄文土器片が1点出土した。4号墳

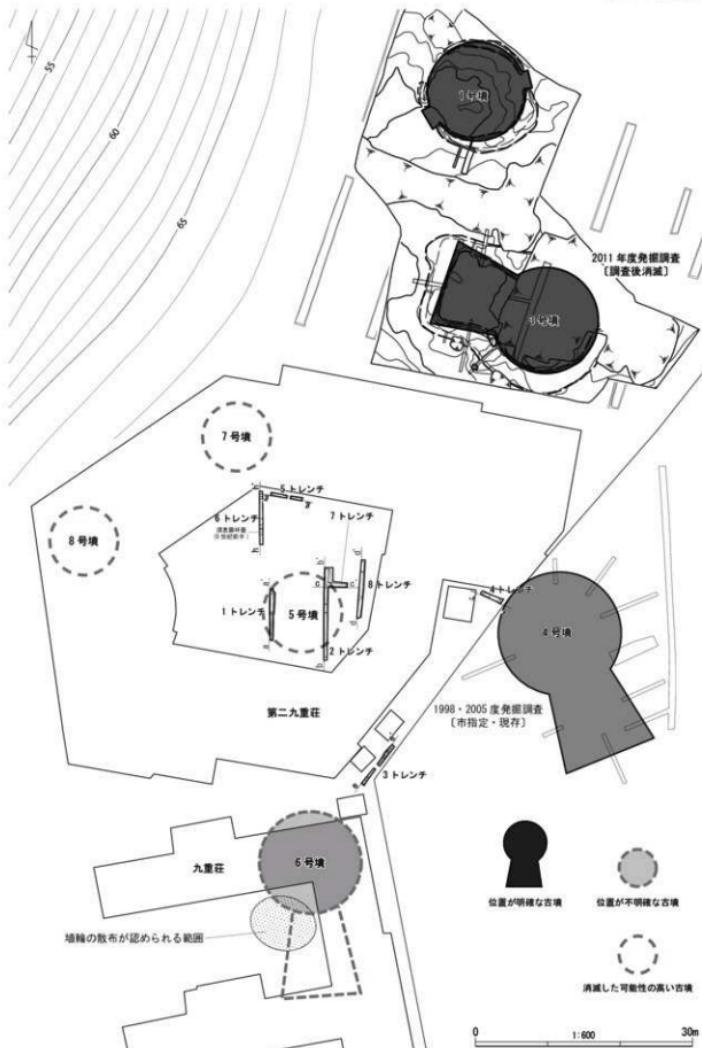


Fig.18 2012年実施試掘調査トレンチ配置図

1 試掘調査

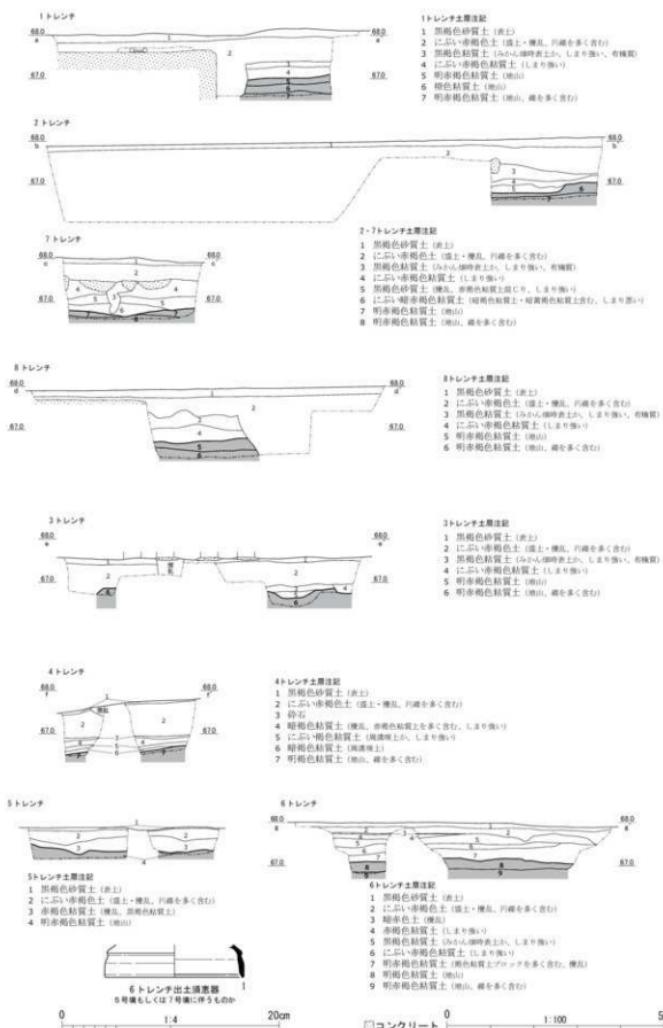


Fig.19 2012年実施試掘調査詳細図

2 検出遺構の概要

本発掘調査の結果、調査対象地には、墳丘が削平された古墳2基分の周溝が検出された。調査地内北側に位置する古墳が1号墳、南側に位置する古墳が3号墳である。1号墳は、墳丘の北東と北西に土橋状の高まりをもつ直径13.6mの円墳である。周溝は最大で幅2.0m・深さ0.2mを測る。周溝内には、須恵器の供獻がみられる。このほか、古墳築造以前の土坑(SK04)が1号墳南側で検出された。遺構の時期は不明確ながら、縄文時代にさかのぼる可能性がある。

3号墳は、全長22.3mの前方後円墳である。周溝は最大で幅3.2m・深さ0.4mを測る。周溝内からは、円筒埴輪のほか、馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪、須恵器、土師器が出土した。
(和田)

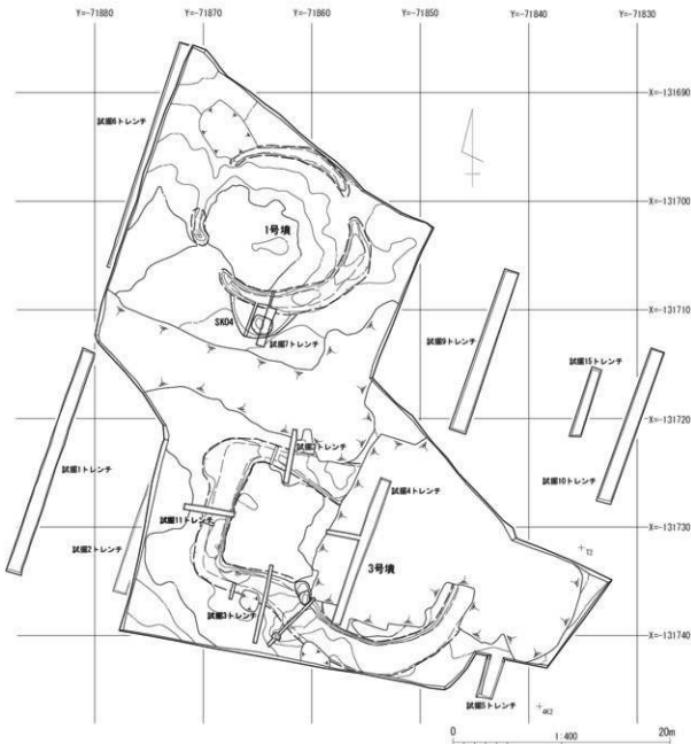


Fig.20 調査区全体図

3 古墳築造以前および以後の遺構と遺物

(1) 古墳築造以前の遺構

SK04 (Fig.21) 古墳築造以前の遺構を1号墳南側で検出し、SK04とした。SK04は1号墳の周溝によって北側を削平されており、平面形は不明であるが、円形または梢円形を呈すとみられる。大きさは、残存幅で最大約6mあり、遺構の南側には大きさ $1.9 \times 1.6\text{m}$ の土坑状の窪みがある。この窓みにはSK04の埋土と同じ埋土が堆積していたことから、一連の遺構と考えられる。深さは、最深部で0.2mを測る。

SK04の層位は2層あり、1号墳周溝南西の土層断面で確認できる (Fig.25-A 断面)。下層にはにぶい黄褐色粘質土(5層)が薄く堆積し、その上に、にぶい褐色粘質土(4層)が厚く堆積する状況が見られる。1号墳周溝は4層を掘り込んで掘削されることから、SK04が1号墳の築造前に埋まっていたと判断できる。

(2) 古墳築造以前の遺物

出土状況 SK04からは、石核が1点出土したが、石核は底面から浮いた状態で出土し、SK04が埋没する過程で混入したものと考えられる。

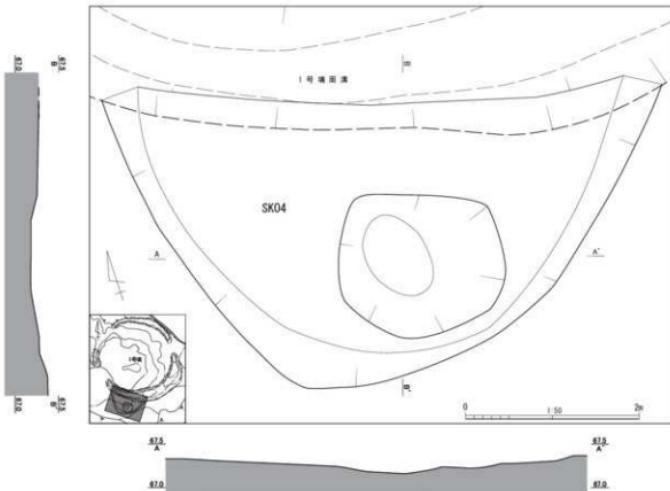


Fig.21 SK04 実測図

また、今回の調査では、SK04から出土した石核のほか、10点の石器が出土し、4点を図化した。これらは、主に調査対象地の南側（3号墳周辺）から出土したが、一部から集中的に出土するなどの傾向は認められない。調査対象地の大半が耕作されており、耕作の及ばなかつた3号墳の周溝に限り遺物が保存された経緯が考えられる。

今回の調査では、確実に縄文時代の遺構といえるものは検出していない。しかし、石器の分布傾向が南側に偏ることや、調査区の南側に位置する4号墳から

縄文土器が出土していることから、縄文時代の遺跡は南側に広がっていたと想定される。（関根）

石器 (Fig.22) 石器は製品とみられる4点を図示する。1は下呂石製の石鏃である。完形の製品で、3号墳の後円部周溝から出土した。長さ2.4cm、重量0.8gである。五角形鏃の一種とみられるが、肩の張りは弱い。刃部は細かな押圧剥離によって整形されている。2は砂岩製の打製石斧である。包含層から出土した。残存長6.3cm、幅6.3cm、重量108.7gである。中央部から大きく破損しているが、刃部を形成したのち、両側縁を形成した製作工程がうかがえる。3は緑色片岩製の打製石斧である。3号墳のくびれ部周溝から出土した。残存長8.3cm、幅3.7cm、重量66.3gである。中央部で片側を欠損する。端部には使用痕が残る。4は緑色片岩製の打製石斧である。3号墳の周溝から出土した。残存長7.3cm、幅4.1cm、重量57.7gである。（鈴木）

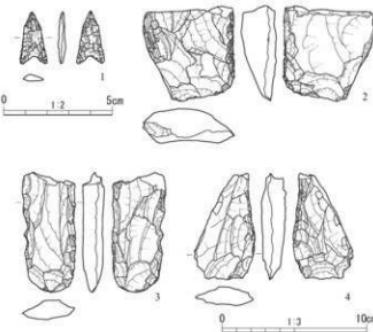


Fig.22 石器実測図

(3) 古墳築造以後の遺物

出土状況 今回の調査区からは、古墳時代の遺物の他に、古代から近世にかけての遺物が若干出土している。いずれも遺構に伴うものではなく、3号墳の北側および東側の擾乱内や耕作土中から出土したものである。

出土遺物 (Fig.23) 奈良時代の遺物として須恵器の有台長頸壺（5）がある。平安時代以降の遺物では、灰釉陶器（6）、山茶碗（7）、かわらけ（8）、文久永寶（9）がある。当該期に何らかの生活活動があったと想定されるが、遺構は伴わず不明である。（関根）



Fig.23 古墳時代以後の遺物

4 郷ヶ平1号墳

(1) 墳丘の状況

墳丘 (Fig.24) 郷ヶ平1号墳は、今回の調査区の北側に位置し (Fig.20)、聞き取り調査や試掘調査でその存在が想定された古墳である。丘陵状地形の平坦面の先端に位置し、郷ヶ平古墳群内で最も北にある (Fig.9)。墳丘は、戦後間もない頃に削平を受け、調査前にはミカン畠となっていた。このため、調査前の地形から墳丘の高まりを確認することはできなかった。

今回の調査において、墳丘の盛土は確認できなかつたが、わずかに墳丘の高まりを確認できた。また、周溝は一部が削平されて消失しているものの、ほぼ円形に検出されたことや、墳丘の等高線がおおむね円形にめぐることから円墳と判明した。古墳の規模は周溝の内側で直径 13.6m あり、残存する墳丘部分の高まりは、周溝の検出面から 0.1 ~ 0.4m ほど高い。

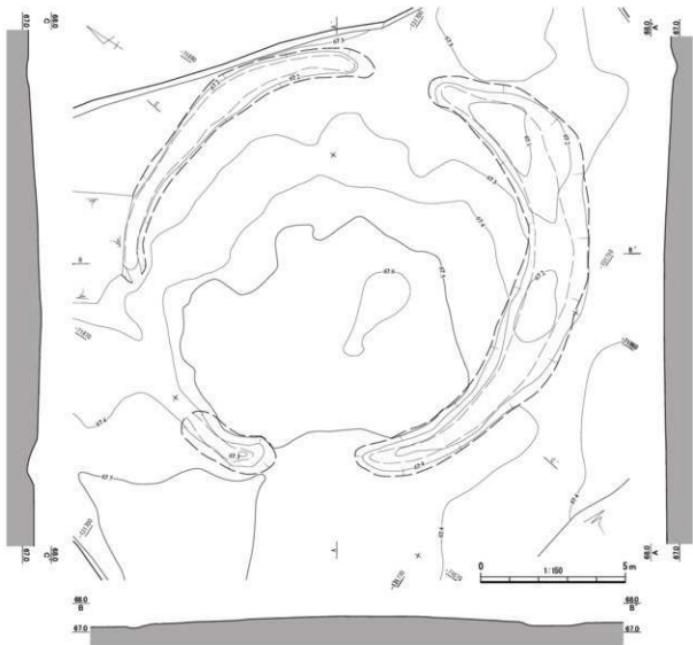


Fig.24 1号墳測量図

周溝 (Fig.24) 周溝は、墳丘の北東側・北西側・南西側の一部を除き検出された。

周溝は、平面形が円形で幅 1.5 ~ 2.0m、深さ 0.1 ~ 0.2m を測り、南側ほど幅が広く深い傾向がある。周溝の断面形は、底面が平坦であり、墳丘裾の傾斜変換点は比較的明瞭であるが、周溝外側の立ち上がりはやや不明瞭である。また、周溝の土層堆積状況は、初期流入土とみられる黄褐色粘質土、周溝埋土である暗褐色粘質土や褐色粘質土が確認できる。

周溝が検出されなかった墳丘の北西側では、ミカン畑の畠と畠の間にあたり、深く耕作され失われたとみられる。

いっぽう、周溝が検出されなかった墳丘の北東側と南西側では、擾乱が認められず、築造当初から掘削されなかった蓋然性が高い (Fig.24, Fig.25)。これらの場所は、墳丘の状況から土橋状に残された可能性が高いが、造出しの可能性も否定できない。

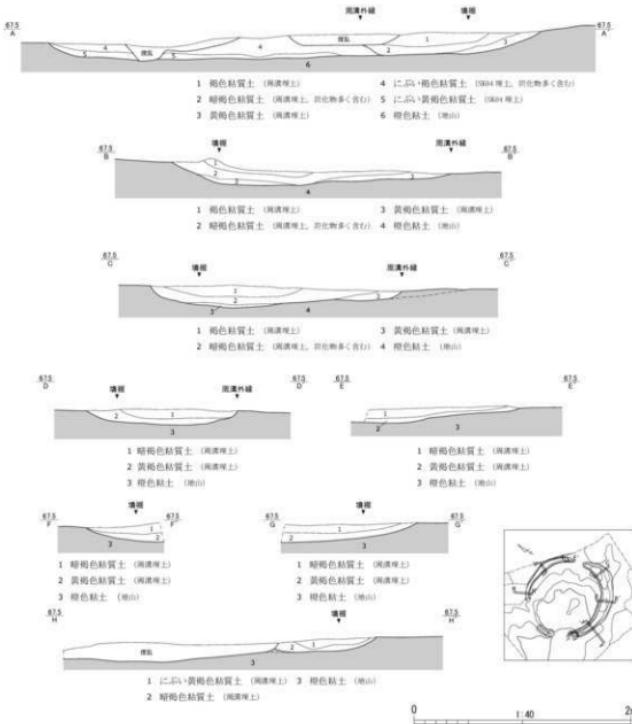


Fig.25 1号墳土層断面図

遺物出土状況 遺物は陸橋西側および墳丘東側周溝から出土し、それ以外の場所からの出土はなかった。遺物の出土は、陸橋の両側に集中する傾向がみられ、須恵器杯蓋は周溝の底面から浮いた状態で出土し、土師器高杯は底面に近い位置で出土する状況がみられた。

また、須恵器の長頸壺（Fig.27-6）は周溝東側の試掘13トレーン周辺から出土した。器種によって出土位置に違いがあらわれている。なお、土師器壺口縁（Fig.27-7）は墳丘南西側の周溝外から出土した。
(関根)

（2）出土遺物

陸橋周辺部出土遺物 (Fig.27-1～5) 1は、突出した明確な稜を有する須恵器杯蓋で、陸橋西側で出土した。ヘラケズリの範囲は広く、端部の面も明確である。暗紫灰色を呈する特徴から、類例が追える湖西窯の製品である可能性がある。帰属時期は、形態的特徴から判断してTK23型式期といえるだろう。本古墳群出土遺物の中で、最も古相を示す遺物である。

2～5も須恵器杯蓋であるが、1と異なり、すべて陸橋の東側から出土している。いずれも小破片であるため、明確な位置づけが困難であるが、1と比べると端部の段が不明瞭であったり、稜が曖昧であったりする特徴が看取できる。製作時期はTK10型式期まで降るものと捉えられる。周溝内で出土した須恵器の時期が異なる特徴は、後述する郷ヶ平3号墳でもみられる。古墳の築造後に行われた祭祀の存続を伝えるものといえるだろう。

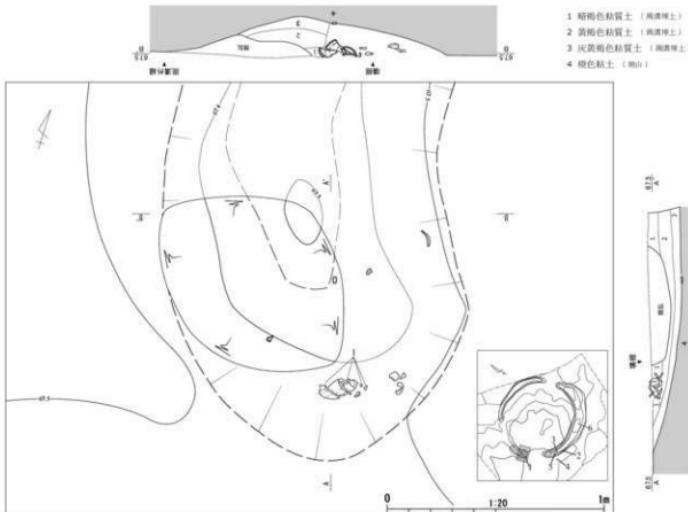


Fig.26 1号墳周溝遺物出土状態図

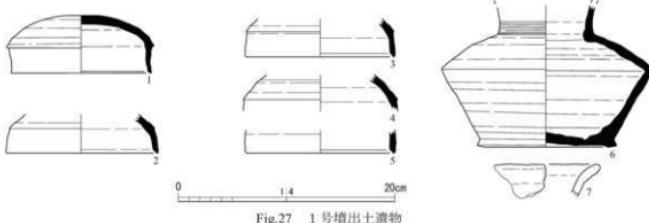


Fig.27 1号墳出土遺物

なお、4の須恵器坏蓋は、1号墳の陸橋部東側で検出した土坑 SK04 の上層から出土している。SK04 は先述のとおり古墳築造以前の土坑とみられ、帰属時期は縄文時代に遡る可能性がある。その下部は1号墳の築造以前に埋没しているとみられるが、上部は完全に埋没せず、古墳群の造営時期にも窪地として残存していたと捉えられる。破片の状態で出土した2～5はいずれもSK04付近の周溝外側で行われた祭儀に伴うものとみられ、3号墳における SX01 の様相と類似する。

周溝東側出土遺物 (Fig.27-6) 6は1号墳の東側の周溝で出土した。試掘調査において検出したもので、出土位置は、Fig.15 および Fig.26 に示している。底部を下に向け、ほぼ正立した状態で出土した。須恵器の長頸壺で、7世紀後半以降の製品とみられる。古墳の築造時期とは明らかに異なることから、古墳が再利用された可能性を示す遺物と捉えられるだろう。

その他の出土遺物 (Fig.27-7) 7は1号墳の周溝の南西側で出土した土師器の甕の口縁部片である。残存部分が小さいことから、帰属時期は必ずしも明確にしえない。

(3) 小 結

古墳の特徴 調査の結果、郷ヶ平1号墳は、基底部で計測して、直径13.6mの円墳であることが判明した。1号墳には、葺石や埴輪は認められない。1号墳の東西方向には陸橋部があり、造出し状の突出部があった可能性がある。とくに、西側の陸橋部から出土した須恵器坏蓋(1)の遺存部分が大きい点は注目できる。造出しの上に置かれていた供獻土器が周溝に転落したものとみて矛盾はない。

築造時期 出土遺物のうち、遺存部分が大きい須恵器坏蓋(1)を、1号墳の築造に伴う土器と判断する。この遺物の編年の位置は、TK23型式期であり、郷ヶ平古墳群の中でも最古相に位置づけられる。1号墳の築造時期は後述する3号墳と同時期か、若干遡る可能性があるだろう。また、小破片ながら、製作時期が降る須恵器も出土している。いずれも小片であるため、明確な編年の位置づけは困難であるが、TK10型式期まで降る可能性がある。製作時期が異なる須恵器の混在は、隣接する3号墳でも認められる。築造時期を示す須恵器は遺存部分が大きく、時期がやや降る須恵器は小破片で出土する点も3号墳の事例と共通する。

郷ヶ平1号墳は、同古墳群の中でも最も谷部に近い部分に位置する点も注目できる。郷ヶ平古墳群では、平野部からみて手前側(北側)から奥(南側)に向かって順次、古墳が築造されたと想定できるだろう。

(鈴木)

5 郷ヶ平3号墳

(1) 調査区の設定

郷ヶ平3号墳は試掘調査の結果では方墳か前方後円墳か不明であったため、前方部の周溝を検出した段階で、前方部に直交するように東西南北に4本のトレンチを設定した。その後、前方後円墳であることが判明し、南側くびれ部が残存していたことから、くびれ部の形状や土層の堆積状況を確認するためのトレンチを設定した。

また、周溝からは全面で埴輪が出土しており、その取り上げに際してA～Gの調査区を設定した(Fig.28)。A地区は北側くびれ部から前方部周溝北側の東半分であり、B地区はその西半分であるが、耕作などの影響により埴輪の分布が希薄な箇所があったため、A地区とB地区の境界は西側に寄っている。C地区は前方部北西コーナーから前方部周溝西側の北半分であり、D地区はその南半分から前方部南西コーナーとした。E地区は前方部周溝南側であり、特に形象埴輪が密に分布する地点を意識して設定した。そのため、E地区から出土した埴輪はすべて形象埴輪である。F地区は南側くびれ部から後円部周溝西側、G地区は後円部周溝東側に設定した。

周溝からは須恵器も出土した。須恵器の出土位置は、一定の範囲に集中することから、出土地点をI～V地点として記録した(Fig.28)。なお、前方部北西側の周溝が外側に張出す箇所を中心に周溝の外側まで須恵器の出土が広がる箇所をVI地点とし、他の周溝から出土した須恵器と年代が異なり周溝の外側まで分布が広がることからSX01とした。また、後円部北側擾乱はH地区とする。

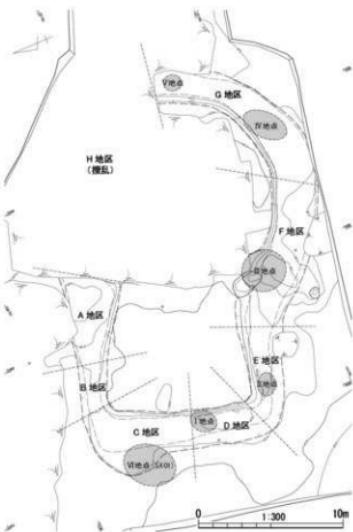


Fig.28 3号墳の調査区設定

(2) 古墳の状況

墳丘 (Fig.29) 3号墳は、聞き取り調査や試掘調査により、丘陵状地形の平坦面の先端からやや離れた場所に存在が想定される古墳(Fig.9)で、今回の調査区南側にあたる(Fig.20)。調査前にはミカン畑となっており、墳丘の高まりは全く確認できなかった。しかし、周辺地域の住民の方の話によると、「戦後間もない時期に盜掘の為、後円部を大きく削平した」とのことなので、比較的最近まで墳丘は残っていたようである。

調査の結果、墳丘は大きく削平され盛土は全く確認できなかったが、後円部の南側半分



Fig.29 3号墳測量図

5 郷ヶ平3号墳

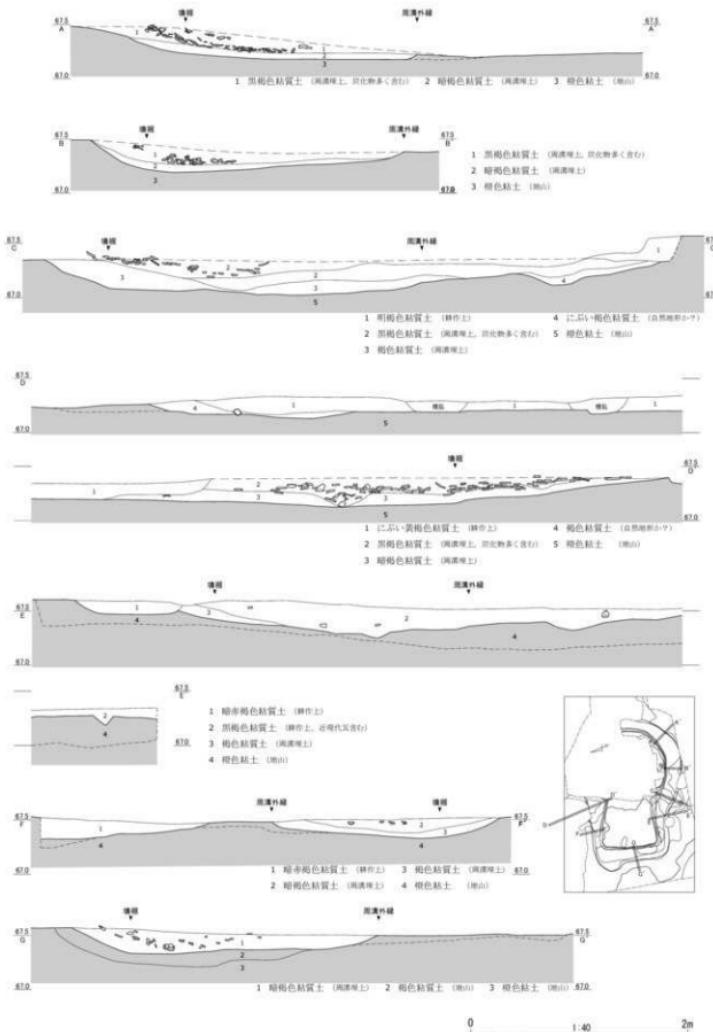


Fig.30 3号墳土層断面図

と前方部の周溝が検出され、前方後円墳と判明した (Fig.29)。墳丘は、前方部で周溝の検出面より若干高い位置まで残っているのに対して、後円部はそれよりも深く削平されており、地域住民の方の話と合致する状況が確認された。古墳の規模は、全長 22.3m、後円部の直径 14.7m、前方部の幅 12.0m である。

周溝 (Fig.29) 周溝は、後円部の南側半分および前方部で検出した。周溝の大きさは、前方部で幅 1.8 ~ 2.7m、深さ 0.2 ~ 0.3m を測り、西側周溝で幅が広く、コーナー部で幅が狭くなりくびれ部に向かって広がっている。さらに、南西コーナー部を挟んだ両側が深く掘削され、南西コーナー部が若干張出す形状となる。後円部の周溝の大きさは、幅 2.7 ~ 3.2m、深さ 0.3 ~ 0.4m を測り、前方部の周溝よりも大きく掘削されている。また、くびれ部は北側、南側ともに深く掘削される。

周溝の断面形は、墳丘の裾側が最も深く、外側に行くにつれて浅くなる形状である。そのため、周溝外側の立ち上がりは不明瞭であった。土層の堆積状況は、初期流入土とみられる褐色または暗褐色粘質土、周溝埋土である黒褐色粘質土、耕作土が各トレンドで確認できる (Fig.30)。また、埴輪は黒褐色粘質土からの出土が大半を占め、特に初期流入土との境界で密に分布する状況がみられた。周溝全体の形状は、いわゆる鍵穴形と呼ばれるものであるが、3号墳の周溝は外側の立ち上がりが不明瞭で、盾形となる可能性も残す。

(3) 土器の出土状況

須恵器 (Fig.35) 3号墳周溝の I ~ V 地点で須恵器が出土している。いずれも埴輪が出土した層位とほぼ同じであるが、いずれも埴輪よりも下の層に近い位置で出土している。他に、VI地点とした前方部北西側 (SX01) と後円部周辺の擾乱内からも須恵器が出土した。

I 地点では、完形の壺身 3 点と壺蓋 2 点、高杯 1 点 (Fig.34-1 ~ 6) が出土している (Fig.31)。いずれも出土層位は埴輪よりも下層である。他にも壺蓋の破片が数点出土していることから、壺身・壺蓋がそれぞれ 3 点以上、高杯が 1 点のセットで供献されたとみられる。また、壺身・壺蓋が離れた状態で出土していることや、高杯が壺身・壺蓋の上に乗る状態で出土していることから、墳丘上から築造後、間もない時期に落ち込んだ可能性が高いと考えられる。



Fig.31 3号墳前方部西側（I 地点）須恵器出土状態図

5 郷ヶ平3号墳

II 地点では、口縁部を除きほぼ完形に復元できる短頸壺 (Fig.34-9) が出土した。短頸壺は破片の状態で出土し、埴輪とほぼ同じ層位から出土している。このことから埴輪と同じ時期に周溝内へ落ち込んだとみられる。

III 地点では、細片の状態で須恵器広口壺 (Fig.34-10) が出土した。出土した層位は埴輪と同じである。破片は極めて細片化した状態であり、足りない部分も多い。自然に割れたとは考え難く、墳丘上における祭祀・儀礼において人為的に破碎された可能性が高い。

IV 地点からはほぼ完形の壺身 (Fig.34-12) が1点出土した。壺身は破片の状態で出土し、埴輪と同じ層位から出土しているが、埴輪よりも相対的にやや下層から出土している。

V 地点からは、ほぼ無傷の状態で壺身1点 (Fig.34-13) が、周溝の底面付近から上下反転した形で出土した (Fig.32)。出土した壺身は上下が逆の状態で出土していることから原位置を保っていないと考えられる。しかし、出土した状態は、掘削の際に付けた傷を除けばほぼ無傷であるため、当初から上下を逆にして置かれていた可能性も否定できない。

VI 地点 (SX01) では、壺身・壺蓋が複数、高环1点、横瓶1点 (Fig.34-18～32) が出土した (Fig.33)。いずれも破片の状態で出土しており、祭祀・儀礼の際に割られた可能性が高い。この地点からは埴輪がほとんど出土していないため、埴輪との先後関係を堆積状況によりうかがい知ることはできない。しかし、周溝の検出段階において、SX01に伴う須恵器が出土しており、周溝がある程度埋まった段階で、埋没した土器群といえよう。また、出土した須恵器は、周溝の他の地点から出土した須恵器よりも新しい要素をもつといえる。

以上のことから、SX01から出土した須恵器は、古墳築造後、ある程度時間をおいてから行われた祭祀・儀礼に伴う可能性が高い。

これらの他に、後円部周辺の擾乱内から須恵器が出土している。いずれも破片の状態であるが、出土位置から後円部に供献されたものと想定される。

土師器 土師器は少数ではあるが、くびれ部や前方部の一部から出土している。A地区からは、壺・

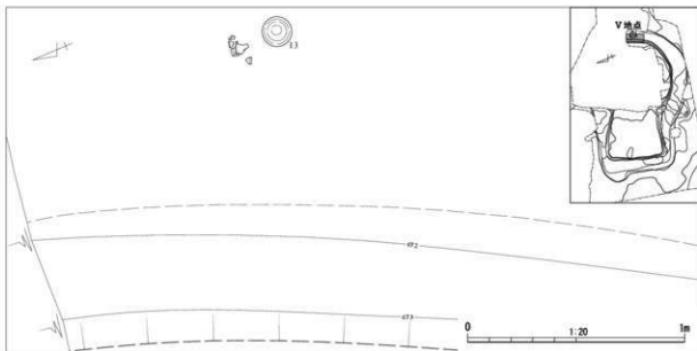


Fig.32 3号墳後円部東側（V地点）須恵器出土状態図

甕・高坏 (Fig.34-33 ~ 36) が埴輪に伴って出土しており、他の地区に比べて出土数が多い。また、直接古墳に伴うものか判断は難しいが、A 地区の北側で地山に近い位置から坏身 (Fig.34-37) が出土している。他に、F 地区の南側くびれ部からは小型の壺 (Fig.34-11) が、E 地区の前方部南西コーナーの周溝外縁からは土師器片が出土した。
(閑根)

(4) 須恵器・土師器

概 要 3号墳の周溝から Fig.34 に示す須恵器・土師器が出土した。出土位置は I ~ 8 が I 地点、9 が II 地点、10~11 が III 地点、12 が IV 地点、13 が V 地点、14 が G 地区、15 ~ 17 が H 地区、18 ~ 32 が SX01、33 ~ 36 が A 地点、37 が A 地点の北側である。

I 地点出土遺物 (Fig.34-1 ~ 8) I ~ 6 は、前方部西側の I 地点で集中して出土した遺物群である。須恵器の坏身・坏蓋 5 点と無蓋高坏 1 点で構成される組み合わせで、周溝底部に近い同一層位から折り重なるような状態で出土した。すべて完形に近い状態に復元でき、一括性が高い遺物群と捉えられる。坏身・坏蓋 (1 ~ 5) は灰白色を呈し、互いによく似た焼成状態をみせる。いっぽう、無蓋高坏 (6) は灰色を呈し、坏身・坏蓋とは明らかに異なる。無蓋高坏は、TK23 型式の特徴が見出せるが、坏身・坏蓋には在地的な変容が看取でき、帰属時期を明確にすることが難しい。坏身・坏蓋は、棱や端面処理の粗略化がみられ、外面へラケヅリの範囲も狭いことから、MT15 型式期まで降ると捉えることも可能である。

ただし、一括性が高い出土状況を重視すれば、資料群の間に著しい時期差を見い出すことにも躊躇を覚える。I ~ 5 はいずれも器径が 13cm ~ 14cm 程度と小さく、全体的な形態的特徴も古相を留めている。無蓋高坏 (6) との時期差はあまりないと捉えても良いだろう。I ~ 6 の遺物群をほぼ同時期と捉えた場合、灰色を呈する個体と白灰色を呈する個体はそれぞれ異なる生産地を想定するのが妥当である。白灰色を呈する一群は、時期がやや降るが浜松市東区有玉窯産（浜松市教委 2004）の製品と近似している点は注目できよう。

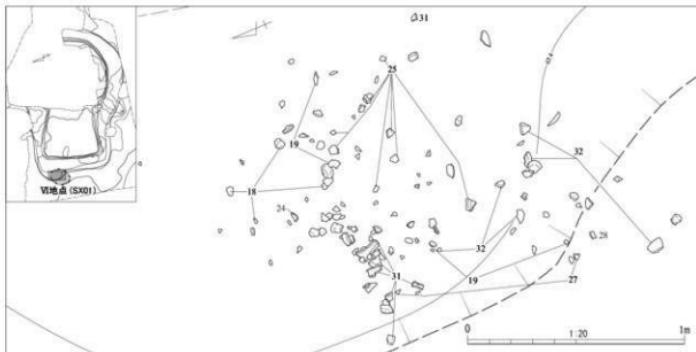


Fig.33 3号墳VI地点(SX01)須恵器出土状態図

7・8の須恵器壺蓋の出土位置は、I 地点に含まれるもの、上述の遺物群からは若干の空隙地が認められた。残存部分も小さく、焼成や色調などの特徴も異なる。形態的特徴からは TK10 型式期に降るものと捉えて矛盾ない。出土位置から判断しても、後述する SX01 出土遺物に含めて捉える方がよいであろう。

II 地点出土遺物 (Fig.34-9) 9は、前方部南側のII地点から出土した須恵器短頸壺である。色調は灰白色を呈し、先述の1～5と近似する。外面にはカキメ調整が施されている。

III 地点出土遺物 (Fig.34-10・11) 10・11は、南側くびれ部のIII地点から出土した。10は須恵器の広口壺であり、破碎された状態であった。口縁部の突帯は突出が高く、TK23 型式期に位置づけてよいだろう。11は、土師器の小型壺である。

IV・V 地点出土遺物 (Fig.34-12・13) 12・13は、後円部北側のIV地点およびV地点から出土した須恵器壺身である。色調はともに灰色を呈し、陶邑の様相を留める。端部の面取が明瞭であること、ヘラケズリの範囲が広いことなどの特徴から、TK23 型式期の所産と位置づけてよいだろう。これらの須恵器は、焼成、色調の特徴から湖西市明通り窯（湖西窯）産の可能性が高いとみられる。

H地区出土遺物 (Fig.34-14～17) 14～17は後円部北側の擾乱部（H地区）から出土した須恵器の破片である。いずれも灰色を呈するが、小片であることから詳細な位置づけは困難である。

SX01 出土遺物 (Fig.34-18～32) 18～32は前方部西側の周溝外側、VI地点において検出した土器集積 SX01 から出土した須恵器である。壺身・壺蓋（18～29）、高壺（31）、横瓶（32）がみられるが、いずれも小破片の状態で出土している。儀礼に伴い破碎された可能性が指摘できよう。SX01 から出土した壺身・壺蓋は周溝出土の他の個体と比べ直徑が大きく、稜は不明瞭であり、端部の処理もやや粗雑である。TK10 型式期まで降るものとしてよいだろう。高壺や横瓶の年代観とも矛盾はない。SX01 から出土した須恵器も、灰色を呈するものと、白灰色を呈するものの二者が認められる。白灰色を呈するものとしては、23 や 25 があげられ、浜松市東区有玉窯の製品と近似している。また、色調は暗灰色を呈しているが、26についても有玉窯産の可能性がある。

A地区出土遺物 (Fig.34-33～37) 郷ヶ平3号墳から出土した土器は須恵器が多いが、若干の土師器もみられる。土師器は、北側のくびれ部（A地区）に集中する傾向がある。A地区から出土した土師器は、小型壺（33）、台付甕（34）、高壺（35・36）などであるが、いずれも小破片であるため、詳しい形態をうかがうことが難しい。土師器の塊（37）はA地区の北側、1号墳と3号墳の中間地点で出土した。いずれも3号墳の築造に伴うものとみてよいだろう。

出土須恵器の特徴 郷ヶ平3号墳からは比較的豊富な量の須恵器が出土した。後述する埴輪と共に、3号墳の築造時期を示す遺物群として注目できるだろう。出土須恵器には、產地が異なる数群と製作時期の差が明確に認められた。形態的な変容が著しい白灰色を呈する壺身・壺蓋（1～5）は、製作時期を古くみるか、新しくみるか判断が難しい。一括性が高い出土状態は、無蓋高壺（6）との同時期性を示唆しているが、形態的な特徴の差を重視すると、製作時期が異なる遺物群が混在したと解釈する余地も残される。

いっぽう、SX01 出土遺物は明らかに時期が降るものである。3号墳における祭祀には一定の時期差が認められ、前方部周溝外周に設けられた祭祀空間の存在を示す遺物群と評価できる。(鈴木)

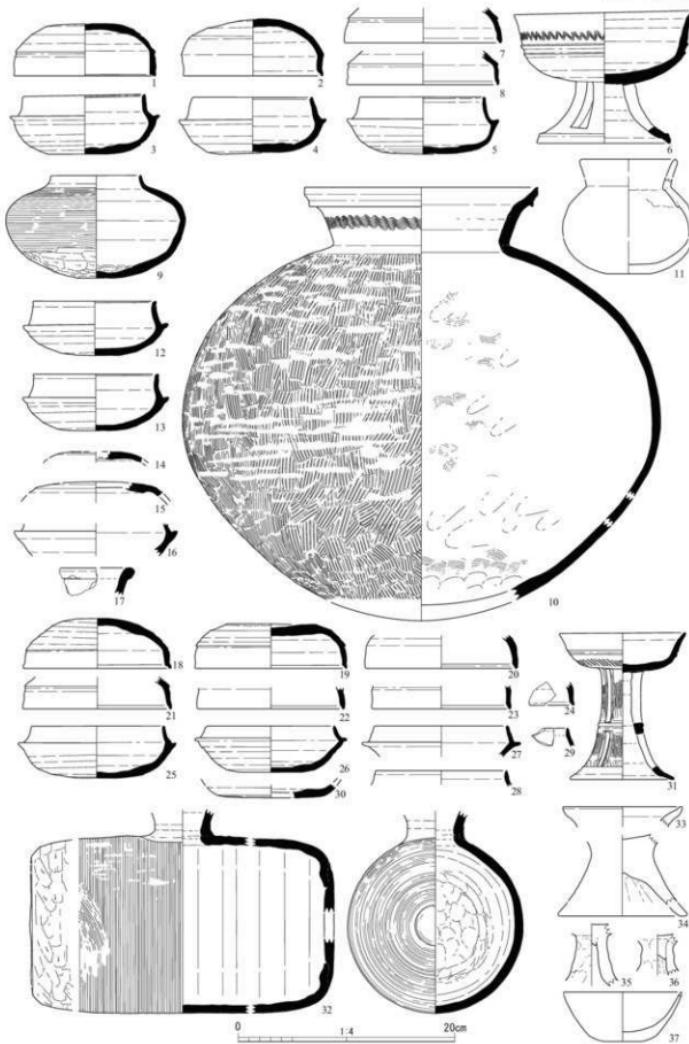


Fig.34 3号墳出土須恵器・土師器

1～8：I地点 9：II地点 10・11：III地点 12：IV地点 13：V地点 14～17：H地区 18～36：SX01 33～36：A地区 37：A地区ほか

5 郷ヶ平3号墳

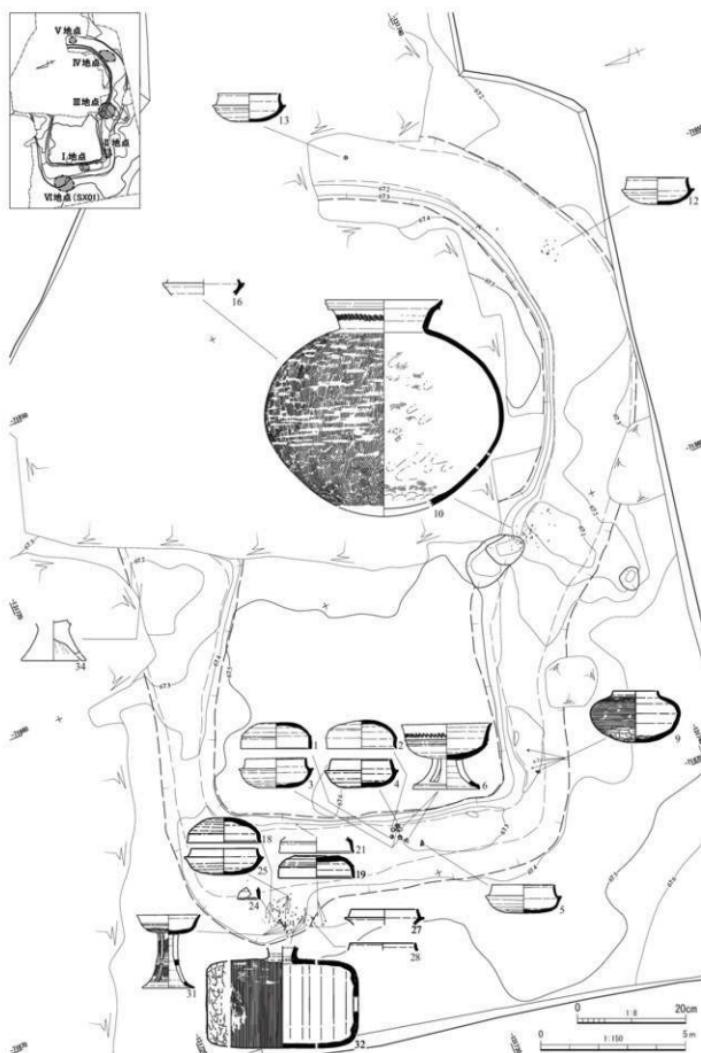


Fig.35 3号墳須恵器出土位置図

(5) 墳輪の出土状況

概要 3号墳の周溝からは、ほぼすべての地点で埴輪が出土した。埴輪の分布が途切れる部分は、耕作の影響を受けた場所やトレンチを設定した場所である。このことから、本来は途切れなく埴輪が埋没していたと想定される。

埴輪の出土状況は、墳丘側の周溝内に集中し、周溝の外側へ行くにつれて希薄になる傾向が認められる。埴輪は墳丘上にのみ樹立された蓋然性が高い。出土した埴輪はいずれも破片の状態であるが、基底部から口縁まで接合する個体 (Fig.50-68) もある。

埴輪の種類における出土位置をみると、形象埴輪は前方部南側の周溝内 (E 地区) を中心に出土した。いっぽう、円筒埴輪は、形象埴輪がみられない地区から万遍なく出土するといえ、形象埴輪と円筒埴輪は配置する地点を分けて樹立されたといえる。

A～C 地区 A～C 地区では、円筒埴輪のみが破片の状態で出土した。試掘調査区を除き、万遍なく円筒埴輪の出土が認められ、A 地区と C 地区の周溝内からは、全形をうかがえる円筒埴輪がそれぞれ 1 個体出土した (Fig.48-38, Fig.50-68)。

A 地区からは多量の円筒埴輪が出土し、くびれ部付近では他の場所に比べ周溝外縁に近い位置まで埴輪の出土が認められる。また、A 地区の墳丘側周溝斜面上に埋没した埴輪の下からは、全形を窺い知ることのできる 1 個体分の円筒埴輪 (Fig.48-38) が出土した。

B 地区は、試掘トレンチや耕作の影響により、埴輪の出土は希薄であるが、他の地区ではあまり見られない形態の円筒埴輪が出土しており、やや特殊な地区である可能性も考えられよう。

C 地区は、B 地区に隣接する箇所では埴輪の出土がやや希薄であるが、周溝外縁まで埴輪の出土が認められる。また、A 地区と同じように墳丘側周溝斜面上に埋没した埴輪の下からは、全形を窺い知ることのできる 1 個体分の円筒埴輪 (Fig.50-68) が出土した。C 地区から出土する円筒埴輪は、比較的焼きの良い個体が目立つ。

D～F 地区西半 D～F 地区西半では、円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土した。また、E 地区を中心に行形象埴輪も出土した。形象埴輪については後述するため、ここでは円筒埴輪を中心に述べる。

D 地区では、全体的に埴輪の出土がみられたが、その多くは細片であり、図示できる遺物もほとんどない状態である。

E 地区は形象埴輪のみが出土した。一部、円筒埴輪の口縁部や底部に類似する資料はあったが、それらは形象埴輪の基底部などと捉えられ、確実に円筒埴輪の突帯や透かしとみられる破片はなく、円筒埴輪の出土はなかったと言える。

F 地区西半のくびれ部は、A 地区のくびれ部と異なり、埴輪の出土が墳丘側に偏る。また、墳丘に近いほど破片が大きい傾向が認められる。

F 地区東半～G 地区 F 地区東半～G 地区は 3 号墳の後円部にあたり、全体的に円筒埴輪の分布がみられた。分布の傾向は、他の地区との差異は認められないが、灰色～緑灰色を呈す焼成不良の円筒埴輪が若干多い傾向が挙げられる。

(関根)

5 郷ヶ平3号墳



Fig.36 3号墳埴輪出土状態図



Fig.37 3号墳埴輪分布図

形象埴輪の出土状態 (Fig.40・42・43) 3号墳の埴輪の分布傾向で大きな特徴は、円筒埴輪と形象埴輪で分布がはっきりと分かれる点である。円筒埴輪は前方部南側西半を除く周溝の全域から出土する。

一方、形象埴輪は、前方部南側西半（E地区）を中心出土し、前方部西側南寄り（D地区）や、南側のくびれ部付近（F地点）からの出土も認められるが、この範囲に限定される。以下、器種ごとに出土位置を示したのち、形象埴輪の相対的な位置関係について触れておきたい。

馬形埴輪 馬形埴輪は、2個体分の破片が認められ、1個体は全形が復元できる良好な遺存状態で出土した。頭部は、馬形埴輪の中で西侧から出土し、鼻先を北に向かって、頭部付け根が南東に向いた状態で出土した。頭部の東側からは、左後ろ脚や臀部の破片がある程度まとまった状態で出土した。出土位置にまとまりはあるものの、馬形埴輪本来の位置関係とは関係なく破片が分布する。このことから、墳丘上に設置されたものが周溝内に転落したといえる。馬形埴輪に付随する鈴は、馬形埴輪の分布域を中心にみられる。鈴の多くは馬形埴輪に由来するものといえよう。

馬曳き埴輪 馬曳き埴輪は、頭部と腕、腰部の破片が、馬形埴輪の頭部の東側に近接して出土した。馬形埴輪に近接して、設置され、馬形埴輪が周溝内に転落する際に揃って転落したと想定される。馬形埴輪との位置関係や右手を挙げている形態から馬形埴輪の南側に設置された蓋然性が高い。

女子埴輪 試掘調査時に3トレンチから出土したものである。馬形埴輪の頭部から南西へ約0.5mの位置から出土した。頭部のみであるが北へ約1mの位置には腕が3つみられ、これらのうちいずれかは、この頭部に伴うものと想定される。

彈琴人物埴輪 全形をうかがえる琴部が出土し、彈琴人物埴輪の存在が確認された。彈琴人物埴輪は、馬形埴輪の頭部から西へ約1mの地点を中心出土した。周辺には、人物埴輪の腕部や脚部をはじめとした破片少なくとも2個体分みられ、いずれかの破片が彈琴人物埴輪を構成する一部であると想定される。

家形埴輪 家形埴輪は、前方部西側からくびれ部西側にかけての広範囲に分布が認められ、他の形象埴輪と出土状況が異なる。同一個体である保証は無いものの、破片数が少ないとまとめた状態で出土しない点は注目しておきたい。

位置関係 前方部南側西半の形象埴輪の相対的な位置関係について触れておきたい。もっとも、破片の分布から位置が復元できる形象埴輪は、前方部南側周溝内の中央から出土した馬形埴輪(118)である。この馬形埴輪を基準に相対的な位置関係を示しておきたい。この馬形埴輪の東側には、もう1個体の馬形埴輪もしくは動物埴輪が位置していた可能性が高い。また、馬形埴輪の頭部付近左側には、馬曳き埴輪が設置された可能性が高い。さらに、馬形埴輪の西側には、彈琴人物埴輪や女子埴輪など3体程度の人物埴輪が設置された可能性が高い。しかし、これらの人物埴輪が設置された位置関係を示すことはできない。

家形埴輪については、人物埴輪出土地点付近からある程度まとめて出土する傾向が認められる。しかし、他の形象埴輪に比べ散在的に分布するといえ、設置された地点が、ほかの形象埴輪に比べ、まとめて転落し難い墳丘の中央よりの場所に位置した可能性が指摘できよう。 (和田)



Fig.38 3号墳前方部北側（A～C地区）埴輪出土状態図

5 郷ヶ平3号墳



Fig.39 3号墳北側くびれ部（A地区）下層円筒埴輪出土状態図



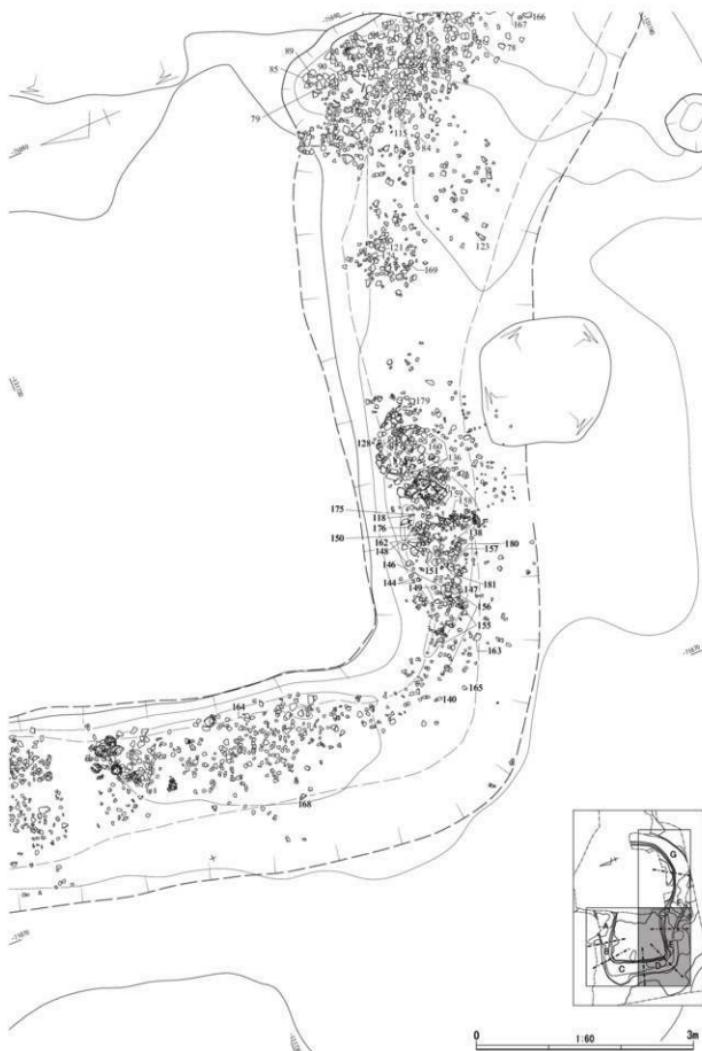


Fig.41 3号墳前方部南側(D~F地区) 墓出土状態図

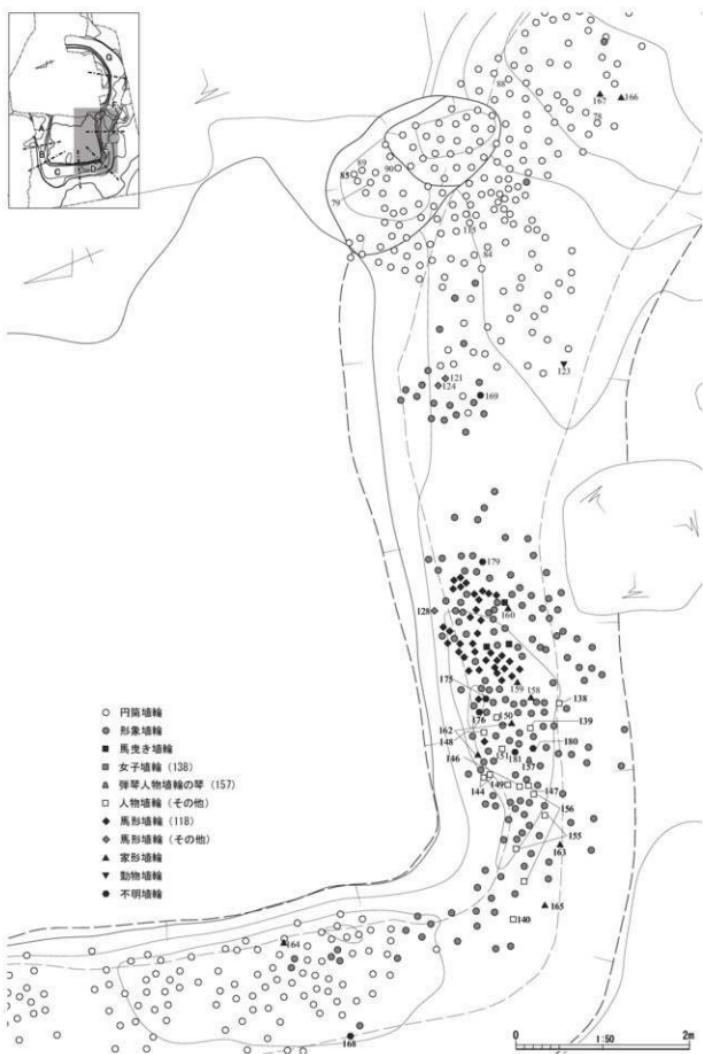


Fig.42 3号墳形象埴輪分布図



Fig.43 3号墳前方部南側(E地区)形象埴輪出土状態図

(6) 円筒埴輪

概要 (Fig.48～52) 郷ヶ平3号墳の周溝からは大量の円筒埴輪が出土している。出土した埴輪は、すべて周溝に落ち込んだ状態で出土しており、完形に復元できる個体(38、68、98など)は極めて少ない。出土した埴輪は細片化しているものが殆どで、接合検討を経ても大きく繋がらなかった。これは、埴丘上にあった埴輪が、一定期間を経たのちに破損し、破片になった状態で周溝内に流れ込んだ経緯をうかがわせるものである。

円筒埴輪は、Fig.48～52に示す73点を図化した。残存率が低いものが多く、同一個体を別図に示しているものが一定量含まれる可能性が考えられる。また、後述する朝顔形埴輪の円筒部も含まれるとみてよいが、普通円筒埴輪と弁別できないことから、ここではすべて円筒埴輪として報告する。

全体形 (Fig.44) 円筒埴輪の全体形がうかがえる3個体(38、68、98)はすべて2条突帯3段構成(以下、2条3段と略す)であり、第2段に円形の透孔を2箇所あけている。また、底部には明瞭な段が観察でき、淡輪技法(川西1977)によって製作されていることが分かる。破片資料もすべて上述の特徴から逸脱するものがみられない。3号墳から出土した円筒埴輪は、2条3段構成であったとみてよいだろう。

全体形がうかがえる個体から判断すると、口径は38～43cm程度、高さは44cm前後とみられる。なお、焼け歪みが顕著な個体が多く、残存部分によって復元できる直径が大きく異なる可能性があるので、破片資料の復元径については注意が必要である。

第1段の高さは残存する68と106がいずれも24cm程度であるが、第2段の高さは8.7cmから12.5cmまで比較的多様である。第3段の高さも9.9cmから11.5cmに至る変異幅が認められる。各段の高さの規格性は低いといえるだろう。

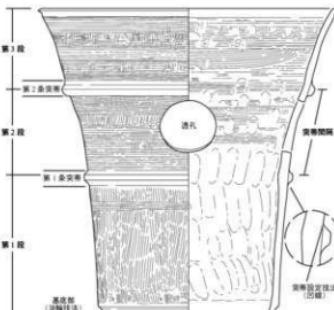


Fig.44 円筒埴輪部位名称模式図

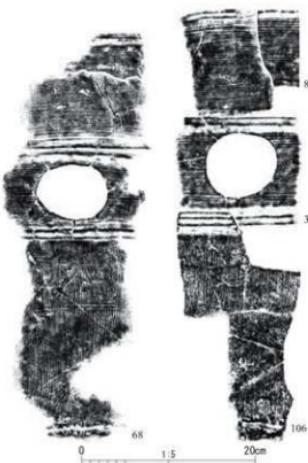


Fig.45 円筒埴輪拓影

5 郷ヶ平3号墳

焼成 郷ヶ平3号墳から出土した埴輪はすべて無黒斑であり、窯窓によって焼成されたものである。ただし、焼き上がりの状態は明確な硬質（須恵器質）ではなく、軟質といえるものである。風化が顕著なものが多く、調整の詳細もうかがいにくい。

色調 郷ヶ平3号墳から出土した円筒埴輪の色調は大部分が橙色であり、灰オリーブ色（以下、灰色とする）に発色する個体もわずかに認められる。ただし、同一個体内でも橙色から灰色の双方を呈するものがあり（98が典型例）、円筒埴輪全体が灰色を呈するものではない。焼成時における環境の違いによって部分的に灰色に焼きあがる箇所があると捉えられよう。

胎土 円筒埴輪の胎土は比較的緻密で、大きな砂粒などはみられない。いずれの個体も胎土は近似しており、この特徴は朝顔形埴輪、形象埴輪とも共通している。

調整技法 突帶貼付以前の1次調整はタテハケを基本とする。なお、突帶が剥離した資料の中に突帶下にヨコハケが施された個体（59）がある。2次調整は静止痕が認められないC種ヨコハケ（川西1987）が用いられている。ヨコハケを施す原体の幅は不明確ながら、5～6cm程度とみられ、各段の調整は3回以上にわたることが多いと想定できる。外面のヨコハケは第2段、第3段にはほぼ例外なくみられるが、第1段には、施されるもの（38、50、68、74、105）と施されないもの（52、58、95、106）の両者が認められる。ヨコハケの条線の間隔は、2cmに7～8本程度である。内面については、第1段の殆どがユビナデ、第2段は部分的にヨコハケ、第3段は密にヨコハケが施されている。

口縁部 (Fig.46) 口縁は大きく外反し、端部に面をもつものが多い。また、口縁端部直下に明確な瘤みがみられる個体が多い点も特徴である（40、43、68、69、76、98など）。いっぽうで厚みが均一な単純な外反形態も認められる（38、63など）。

突帶 (Fig.47) 突帶は断面「コ」字形もしくは緩やかな「M」字形を呈するものが多く、突出高は1cm程度である。「M」字形を呈するものは、上部が突出する傾向が認められる（88、105など）。また、三角形を呈するものがごく少数認められるが（67など）、こうした個体は形象埴輪である可能性が想定できる。

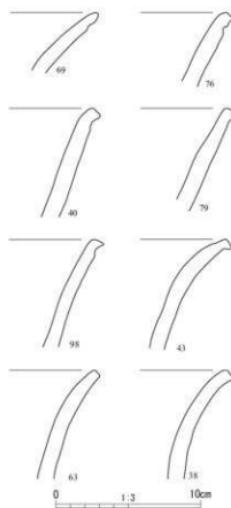


Fig.46 円筒埴輪の口縁形態

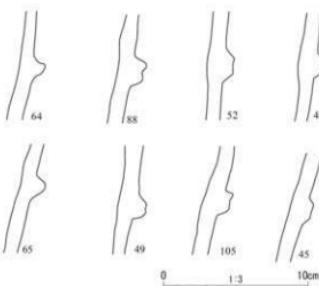


Fig.47 円筒埴輪の突帶形態



Fig.48 3号墳出土凹筒埴輪（A地区）

5 郷ヶ平3号墳

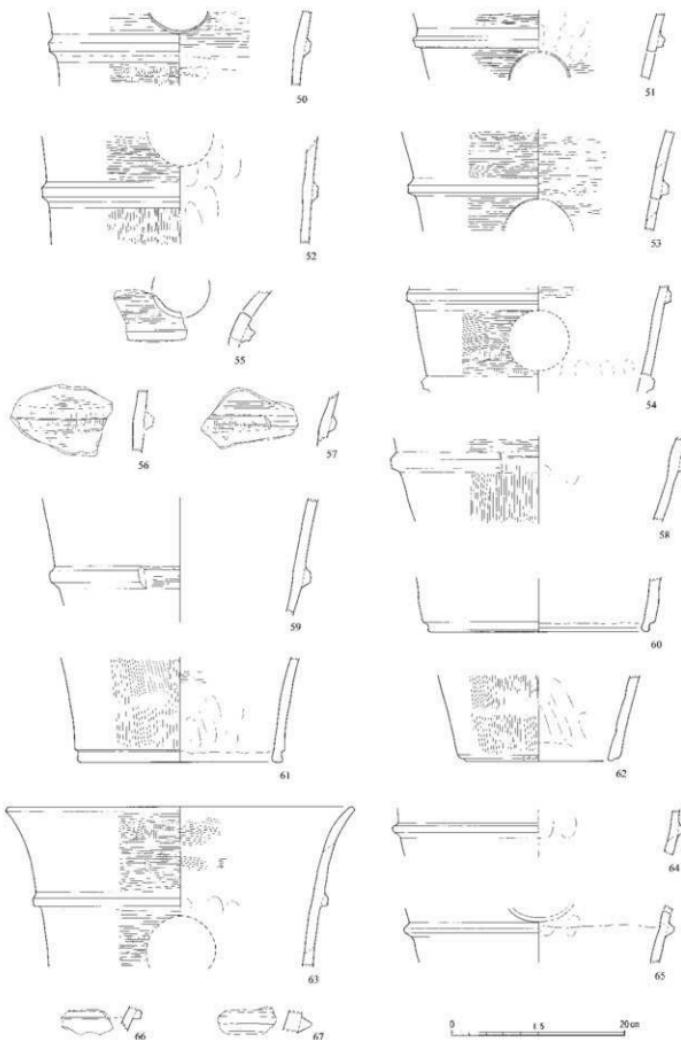


Fig.49 3号墳出土円筒埴輪 (A・B地区)

50~62:A地区 63~67:B地区

突帯設定技法には、凹線技法（鐘方 1997）が認められる。凹線は突帯が添付される上端に近い部分にめぐっている。凹線は断面がV字形を呈するもので、幅も2mm以下の細いものである。凹線の設定には、先端が比較的鋭利な工具を使用したと想定できるだろう。

突帯間隔は突带上端の直線距離で計測して、8.9cmから12.6cmまでの差異がある。郷ヶ平3号墳の円筒埴輪における突帯間隔は規格性が低いといえるだろう。突帯設定工具についても、間隔を明確に規定するような構造をもっていなかった可能性がある。本報告では突帯間隔設定技法と呼びず、単に突帯設定技法とよぶ所以である。

透孔 透孔は例外なく、円形のものが第2段に2箇所あけられているものとみてよい。透孔の直径は7cm程度とみられるが、68にみるように、突帯間隔が狭い個体は梢円形を呈し、短径が6cm、長径が8cmほどのものがある。

基底部 郷ヶ平3号墳の円筒埴輪の基底部には例外なく段が認められ、淡輪技法を用いて製作されていることが分かる。淡輪技法とは繊維質の輪を底部に敷き円筒部を積み上げる手法であり、過去には底部の大きさを規格化する意図が想定されていた（鈴木敏 1990）。ただし、郷ヶ平3号墳の

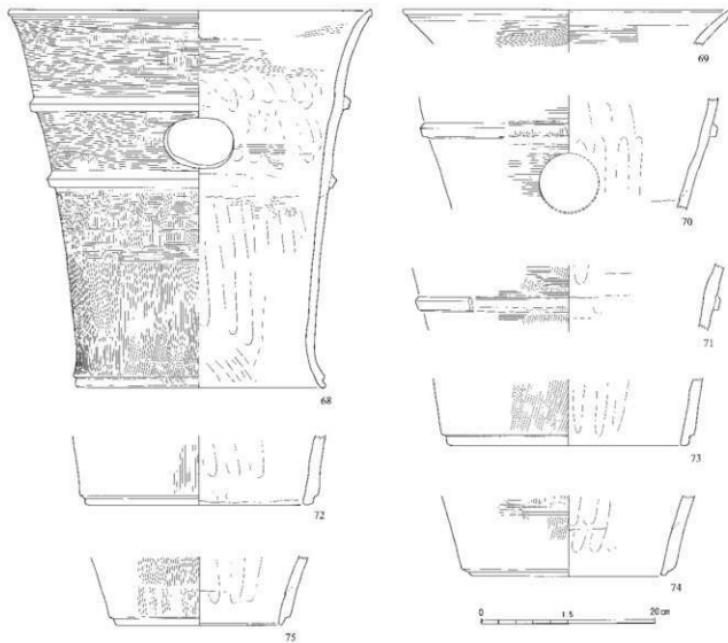


Fig.50 3号墳出土円筒埴輪（C地区）

5 郷ヶ平3号墳

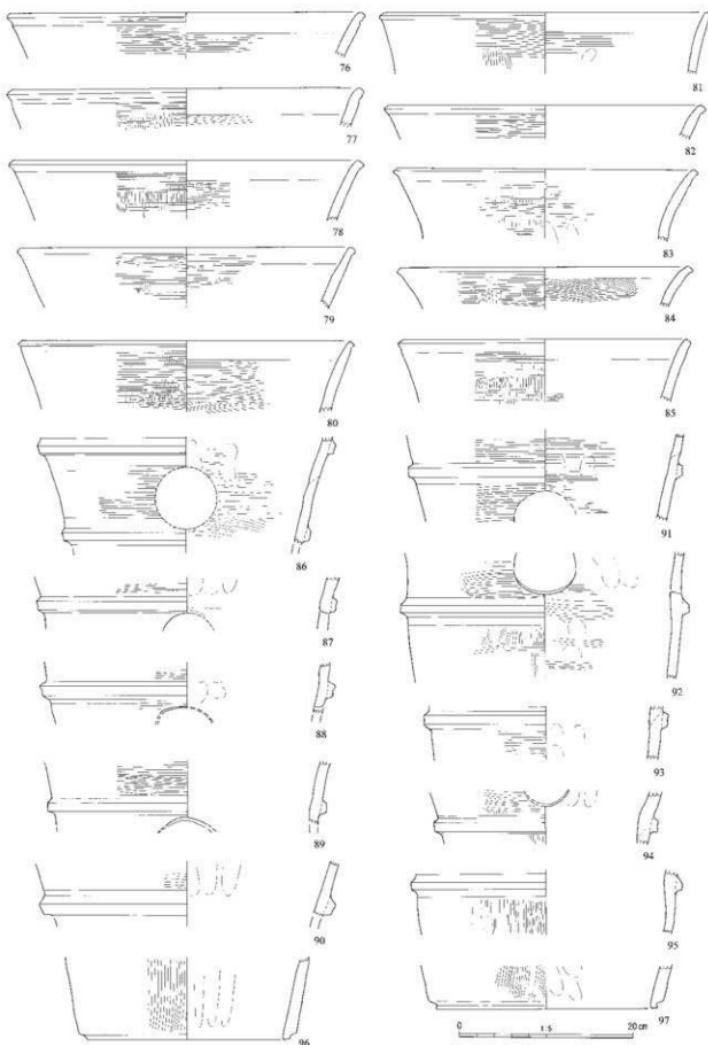


Fig.51 3号墳出土内筒埴輪(F地区)

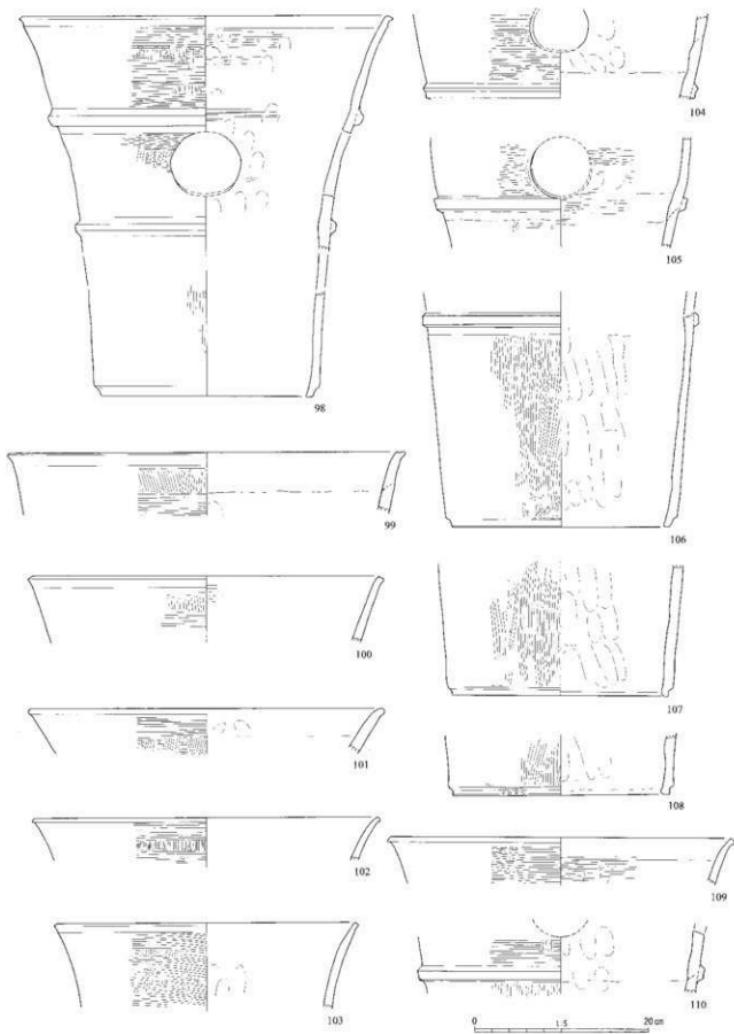


Fig.52 3号墳出土円筒埴輪 (G・H地区)

98～108: G地区 109～110: H地区

底部の直径は17cmから29cm程度までの多様性があり、特定の大きさを規定しているとはみなしがたい。むしろ、成形時に使用する回転台からの離脱を容易にするために繊維質の輪が用いられたと解釈する方が理解しやすい（辻川1997）。

円筒埴輪の時期 郷ヶ平3号墳に用いられた円筒埴輪は、2条3段構成をはじめとする形態的特徴をはじめ、製作技法の共通性が高い。出土位置ごとの特性も看取できず、全体的に齊一性が高いものと評価できるだろう。遠江における淡輪系円筒埴輪は、第1段におけるヨコハケの有無が編年上の指標とされる（鈴木敏1990）。本古墳には、第1段にヨコハケをもつ一群と持たない一群がみられるが、両者の混在は時期差ではなく、同時代の実態とみた方が妥当であろう。第3章で示すとおり、両者の存続期間はほぼ並行するとみてよい。郷ヶ平3号墳の円筒埴輪の編年の位置は、概ね周溝から出土した須恵器の年代観、すなわちTK23型式期とみて矛盾はないだろう。

（7）朝顔形埴輪

概要 朝顔形埴輪については、いずれも細片化が著しく、全体形をうかがう資料に恵まれない。頸部や肩部の特徴から、朝顔形埴輪と認定できる資料は限定的で、円筒埴輪と比べ全体量は少ない想定できる。ただし、Fig.53に示す朝顔形埴輪の頸部もしくは肩部の出土位置はC、F、G、Hの各地区に散らばっていることから、円筒埴輪列の一定間隔の中に朝顔形埴輪が樹立されていたことは確実である。明確に朝顔形埴輪といえる個体の焼成や胎土、色調、および突帶などの形態的特長はいずれも円筒埴輪のそれと変わらない。

資料の詳細 (Fig.53) 朝顔形埴輪の頸部破片（112、114、115、117）はいずれも屈曲が弱いもので、頸部は小さく窄まらない形態であることが分かる。すべて肩部にはヨコハケが施されている。112には突帶設定技法である凹線がみられる。116は傾きから朝顔形埴輪の口縁外面の突帶と捉えたが、突帶が方形で小さいため、形象埴輪の可能性も考えられる。

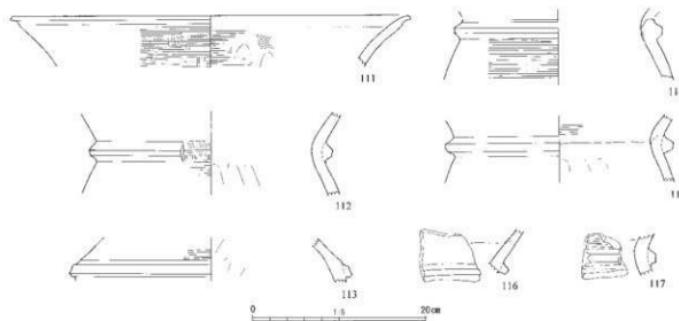


Fig.53 3号墳出土朝顔形埴輪
111・115：F地区 112・113・116：C地区 114：H地区 117：G地区

(8) 形象埴輪

概要 郷ヶ平3号墳から出土した形象埴輪には、馬、動物、人物、家が認められる。馬形埴輪は2個体分、人物埴輪には、馬曳き1、罠を結う女子2、彈琴人物1が確認できる。腕の破片数から判断して人物埴輪はさらに2体程度あったとみられる。家形埴輪の個体数は不明瞭である。

形象埴輪は、いずれも無黒斑で橙色を呈している。焼成や色調、胎土の状態などは円筒埴輪との共通性が高いが、外面に部分的に残るハケメの条線は細かい場合があり、外面調整に用いられた工具は異なることがあったとみられる。

馬形埴輪 (Fig.54～59) 118は完形に復元できた馬形埴輪である。頭部先端から胴部、尻尾、脚部の先端まで各部位が遺存し、遺存状態が良好な資料として注目に値する。全長103.5cm、高さ70cm、幅32.5cmである。

製作技法 全体の形状は、脚部を独立して製作した後、腹部の粘土板を介して胴部を形成し、別作りの頭部を外側から接合している。耳や尻尾は、本体を円形に割り貫いた部分に部品を挿入して接合している。透孔は円形を呈し、脚部の付け根に合計4箇所、設けられている。

端部埴め込み技法 頭部の接合には、口縁状に端部をしぶった部分に外側から埴め込むようにして継ぎ足す技法がみられる(PL.19)。内面にはしぶった端部が大きく残存している。この技法は、当地域の淡輪系形象埴輪に多くみられるもので、人物埴輪の胸も同様の接合手法を採用している。本稿では、こうした技法を「端部埴め込み技法」と呼ぶ。

頭部 頭部は轡や面繫の一部を除きほぼ完存する。口と鼻孔が表現される部分を底部として、深鉢状の円筒部をつくりあげ、別作りの本体と接合している。頭部と本体の接合関係はややねじれしており、正面から見ると右に首を傾げているように見える。口は円筒底部の円盤を一文字に切り込みを入れ表現している。鼻孔も前面の円盤に小孔を穿って表現している。目は楕円形を呈し、外縁は若干盛り上げられている。耳は板状の部品を丸め、本体に差し込んで接合している。

面繫 面繫は、頭部の側面と額にあり、円筒埴輪の突帯のように表現されている。側面の辻金具によって額と後頭部方向に振り分けられているが、後頭部にまわされた帶は両耳の周りを巡って額の帶と連結しており、実物とは異なる表現がみられる。

轡には鈴付の楕円形鏡板が表現されている。轡に取り付けられた鈴の数は7であり、一般的な鈴付鏡板の鈴数5と比べると多い。また、実物では立開が付く長辺部には鈴がないが、本例では立開の側に鈴が表現されている。轡の表面には、直径0.7cmほどの円形十字文の刺突が外縁と長軸に施されている。円形十字文の刺突は面繫の革帶部分にもみられるが、直径0.5cm程度のやや小型の工具が併用されている箇所がある。とくに正面の帶にみられる刺突は小さく、2～3列に及んでいる。面繫の側面には辻金具を模した表現が立体的になされている。

手綱は轡の下面から面繫の下を通り、鬣の端部に至る。左右から収束する手綱の端部は前輪の前面で上方に捻っている様子が表現されている。突帯状に表現される点は、面繫の帶と同じであるが、やや幅が広く、表面に刺突文が施されないなど、面繫の帶との差異が明確に意識されている。

頭部・胴部 鬚は一枚の板を用い、円弧を描いている。その端部は若干広がっている。鬣の上端

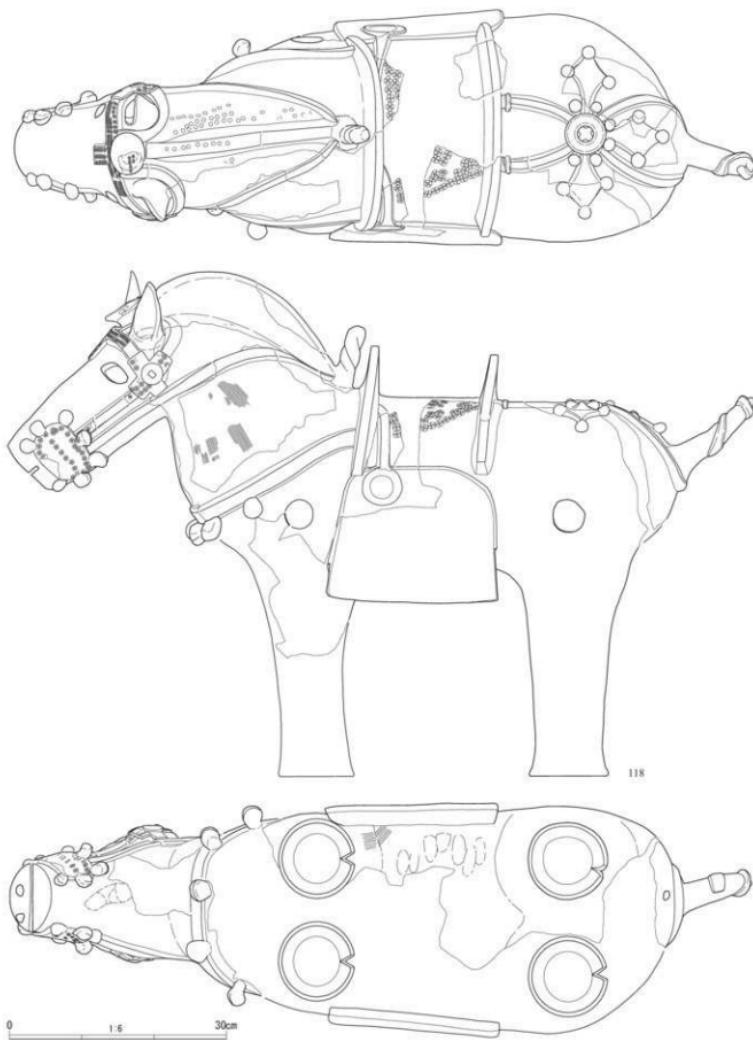


Fig.54 3号墳出土馬形埴輪(1)

面及び、鬱の基部のうなじにはそれぞれ直径 0.5cm ほどの円形刺突文（竹管文）が施されている。
鬱は円柱状に表現され、端部は広がっている。鬱の上面にも轡の表面と同じ円形十字文が施されている。頭部の下部外面には縦方向の細かいハケメ（条線は 11 本／2cm 程度）がみられるが、その他の表面はハケメがナデによって消されている。

胴 駒 胸駒は鞍の前輪から前方にめぐっている。突帯状に表現される帶は幅が広く、3cm ほどである。胸駒には、鈴が 5 箇所にわたり貼付されている。胸駒に付けられた鈴は、轡や杏葉の鈴と比べて一際大きく、実物の轡・杏葉の鈴と馬鈴の大きさの違いが表現されているといえるだろう。

鞍 部 鞍は背中に円弧状に突出する二枚の粘土板で表現されている。前輪は端部まで遺存するが、後輪は大きく欠損している。前輪の端部は丁寧にナデが施され、覆輪状に表現されている。鞍梅の表現として、面駒のものよりも大きな直径 1.1cm ほどの円形十字文の刺突が施されている。本例に用いられた円形十字文の施工工具は、面駒の 2 種と鞍梅の 1 種を加え、全部で 3 種を数える (Fig.56)。前輪の内側からは鍔に至る力革が伸び、輪鍔が連続している。鍔は直径 5.5cm ほどの円環で表現されている。泥障は鞍の下部に表現され、別造りの板状部が添付されて成形されている。泥障の表面には特別な装飾はみられない。

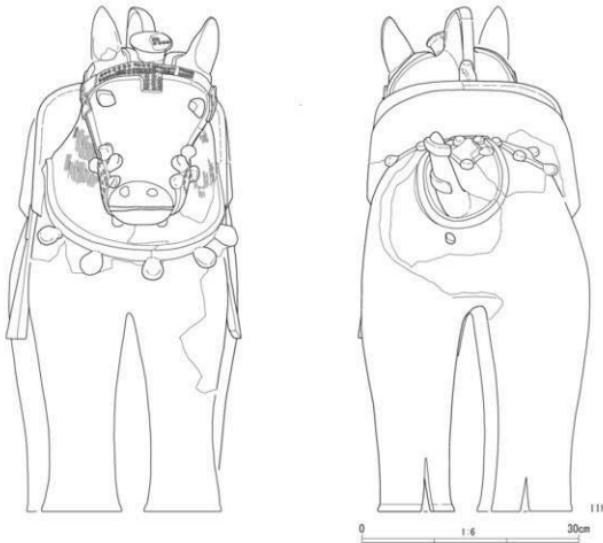


Fig.55 3号墳出土馬形埴輪 (2)

5 郡ヶ平3号墳

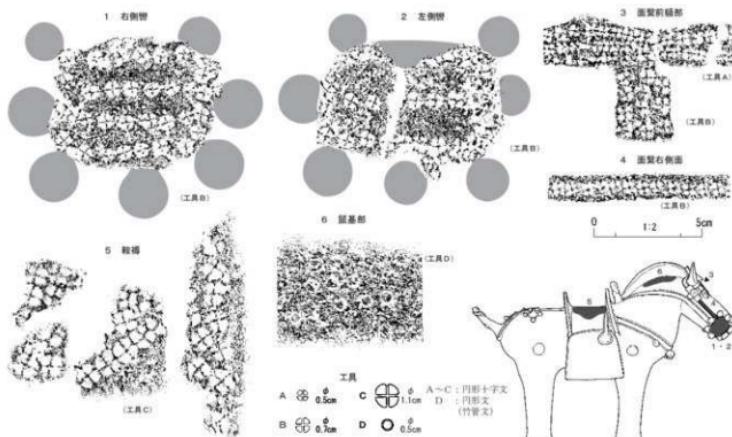


Fig.56 馬形埴輪における刺突文

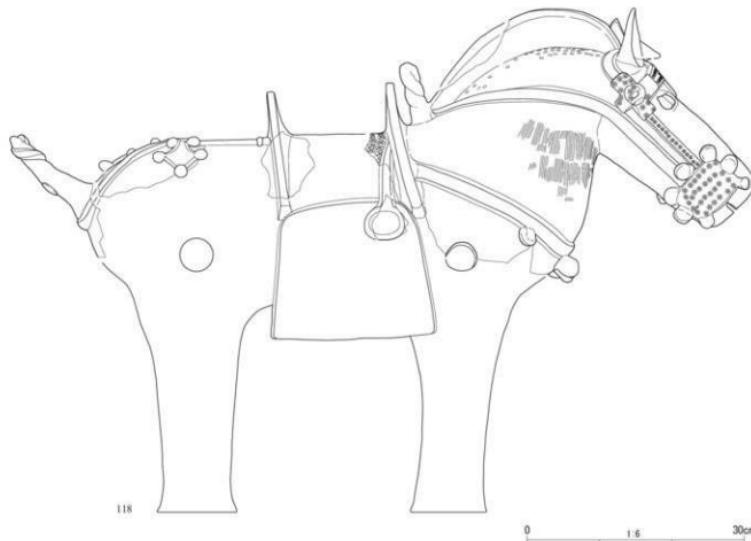


Fig.57 3号墳出土馬形埴輪(3)

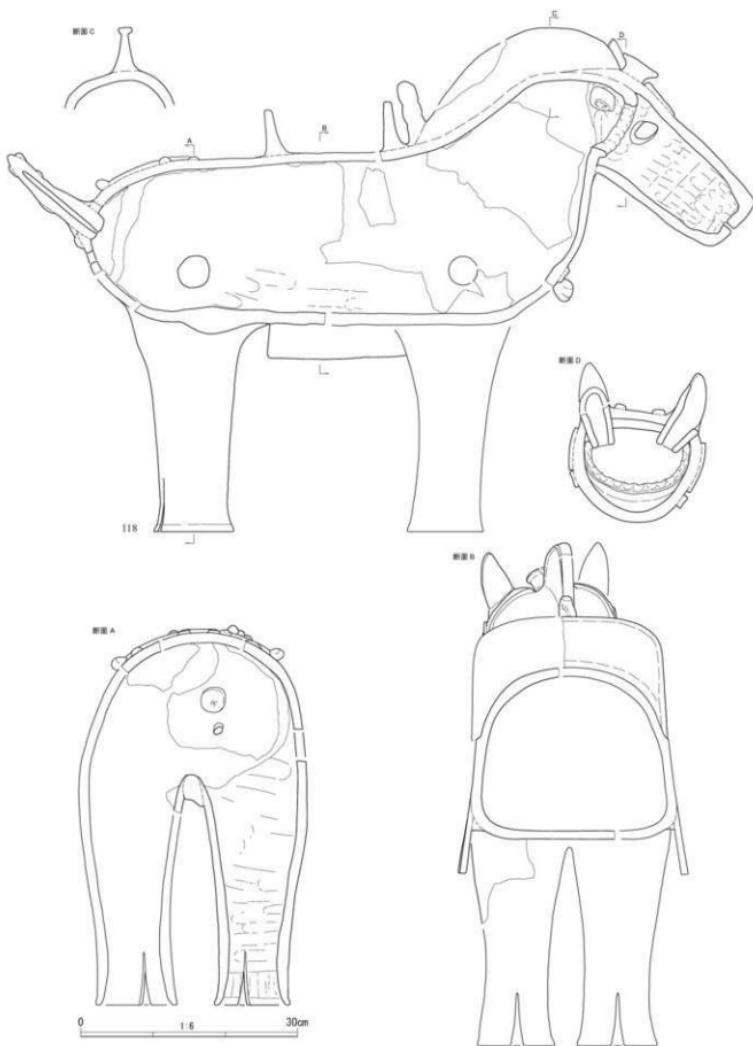


Fig.58 3号墳出土馬形埴輪(4)

尻 銜 尻銜は鞍の後輪と尻尾を繋ぎ、中央に推定できる環状雲珠を介して8字にめぐっている。後輪からは鞍を介して2条の帯が連続するが、端部には資金具を表現した直交方向の粘土紐がみられる。雲珠は遺存部分がないので形状等は確定的でないが、図示するような環状雲珠であったと想定する。中央に想定できる雲珠からは五鈴杏葉が3方向に垂下されている。杏葉の扁円部は表現されず、剣菱形を呈する本体に5個の鈴が付けられている。杏葉に付随する鈴は轡の鈴よりもさらに小さい。鈴の遺存状態が悪いので確定的でないが、切り込みも表現されていない可能性がある。杏葉の表面には刺突文は施されていないが、縁金を表現したような線刻による縁取りがみられる。

尻 尾 尻尾は円柱状の本体に、螺旋状に紐を巻きつけた表現がみられる。本体の中心部には細長い中空部分があり、端部を本体に差し込んで接合している。尻尾の下には直径1.3cmほどの尻孔があけられている。尻尾、小孔ともに中心線から左に偏った位置にある。

脚 部 脚部は、左の後脚が完存する。脚部は円柱状をなし、中央部の直径は10cm程度、胴部付け根から先端までの高さは29.0cmである。脚端部は若干外反しており、後部には蹄叉を表現した切り込みが7.5cmほどにわたりみられる。

その他動物埴輪 (Fig.59) 119～135は馬形埴輪もしくはその他の動物埴輪の部品である。119は前方の脚部から胸にかけての部位とみられる。120は胴部側面とみられ、鞍の端部が表現されているので馬形埴輪とみてよい。121・122も馬形埴輪の泥障とみられ、121には籠の一部が貼付されている。123は尻尾の破片で、本体との接合のために芯となる別部材をはめ込んでいる状況が確認

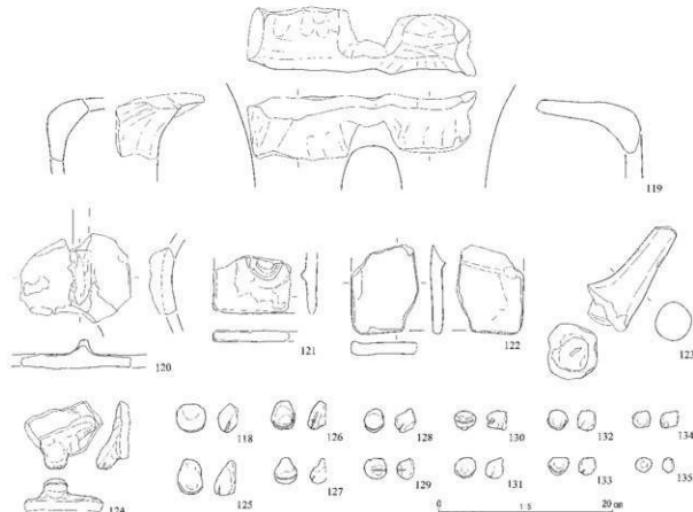


Fig.59 3号墳出土動物埴輪

できる。螺旋状に巻きつけた紐の痕跡がみられないで、馬とは異なる動物の尻尾とみてもよい。124～135は鈴が表現されたもので、完形に復元できた118とは異なる馬形埴輪の部材とみられる。124は胸繫を表現したものとみられる。125～127は大きさから胸繫に貼付された鈴と捉えられる。図には参考に118の胸繫に貼付された鈴も掲載した。128～135は轡もしくは杏葉に貼付されたとみられる鈴である。小さいもの（134・135）は切り込みも表現されていない。

馬曳き埴輪 (Fig.60-136) 136は馬曳きを表現した埴輪とみられる。頭部から腕に至る破片が、完形復元できる馬形埴輪118と同一地点から出土していることもその証左といえる（出土状態はFig.43に図示）。なお、136は全体形を復元しているが、胴部以下は想定部分が大きく、実際の姿とは異なる可能性がある。とくに、腕の表現については、詳細な検討をする。

頭部は全体の3分2ほどが残存する。目と口の端部がかろうじて残存していたが、その詳細な形態や鼻などは全く分からない。頭部の上端は大きく欠損しているが、頭髪の表現がみられないことから、何らかの被り物が貼付されていた可能性がある。後頭部には長く伸ばした頭髪を左右と後に分けた結髪の状態が観察できる。左右に分けられた髪は、側面の美豆良に至ると捉えられる。同様の表現は、同じ淡輪系埴輪を伴う男子埴輪に共通する。腕は中空にされた一部が残存する。後述する146～153といった一般的な腕と比べると華奢な造りである。

腰周りとみられる破片は遺存部分が僅かである。円筒埴輪と同様の突帯がめぐり腰帯が表現されている。突帯の一部には下方に垂れ下がる表現がみられる。帯の結び目であるか、もしくは謙などの何らかの垂下物が表現されていた可能性が考えられる。

男子埴輪 (Fig.60-137) 郷ヶ平3号墳には、上述の馬曳き埴輪の他にも男子を象った埴輪があるが、頭部が抽出できないことから、個体識別は困難である。137は帽子を表現しているとみられ、貴人を表現した人物埴輪の可能性がある。また、後述するように琴を象った埴輪（157）があり、彈琴人物埴輪が含まれることが知られる。琴の部品と焼成や胎土、色調が近似する部品として靴を履いた足（155・156）が知られる。この部品も彈琴人物埴輪と同一個体である可能性がある。

女子埴輪 (Fig.60-138～145) 138・139は髪を結った女子埴輪の頭部である。髪は2点分あるので郷ヶ平3号墳から出土した資料の中には、2個体の女子埴輪があることが分かる。髪は一枚の板を折り曲げて二重にしており、実物の髪を忠実に表現している。こうした写実的な髪の表現は当地域の淡輪系形象埴輪に広くみられる。髪の遺存状態が良好な138をみると頭部の製作技法が明瞭にうかがえる。顔面から積み上げた粘土を頭頂部から塞ぎ頭部を成形し、その上から二つ折りに曲げられた髪が貼り付けられている。なお、髪の内部や頭部の髪の剥離部分には条線の粗いハケメ（条線は7本／2cm程度）が観察できる（Fig.17-21）。

140は人物埴輪の腕である。両腕を前に差し出し容器を捧げ持つ人物を表現したものとみられ、給仕する姿をあらわした女子埴輪の一部とみてよいだろう。両手の上部には、容器が剥離した痕跡がみられる。141に示すような容器を表現した部品がのせられていたと捉えられるだろう。

142や143は不明確ながら、女子埴輪の衣服の一部と推定できるものである。142は胸部の衣服の合わせ目を、143は袈裟状衣の両側面に突出する襞を表現したものとみられるが、いずれも遺存部分が少なく確定的でない。144はやや低平な突帯の上に羽状の刺突が入れられたもので、袈裟状



Fig.60 3号墳出土人物埴輪(1)

衣の横帯を表現しているとみられる。145は衣服の裾と想定する。

人物埴輪破片 (Fig.61) 146～153は人物埴輪の腕である。腕は8点分が知られ、最低でも4体の人物埴輪があったことが分かる。腕の主要部分は中空にされているが、胴体との接合には148に典型的にうかがえるように、端部埋め込み技法が採用されている。146と147は手のひらにあたる部分が扁平に表現されており、同一個体の可能性がある。

154～156は人物埴輪の足とみられる破片である。154には、鰐状の部位がみられ、着用する衣服などが表現された可能性がある。155・156は靴を履いた足を表現した破片である。焼成や色調、胎土などが互いに酷似しており、同一個体と考えられる。後述する琴を象った破片(157)とも共通性が高く、彈琴人物埴輪の脚部とみても矛盾はない。155・156とともに踵には襞がみられ、その襞は膝の側面まで連続している。側面の襞には連弧状の装飾がみられる。ともに遺存状態が悪く、剥離面を正確に把握することが難しい。両者は胡坐をかくようにも復元できるが(Fig.73-8)、その場合は弾琴人物ではなく、別個体の可能性も考慮しておきたい。

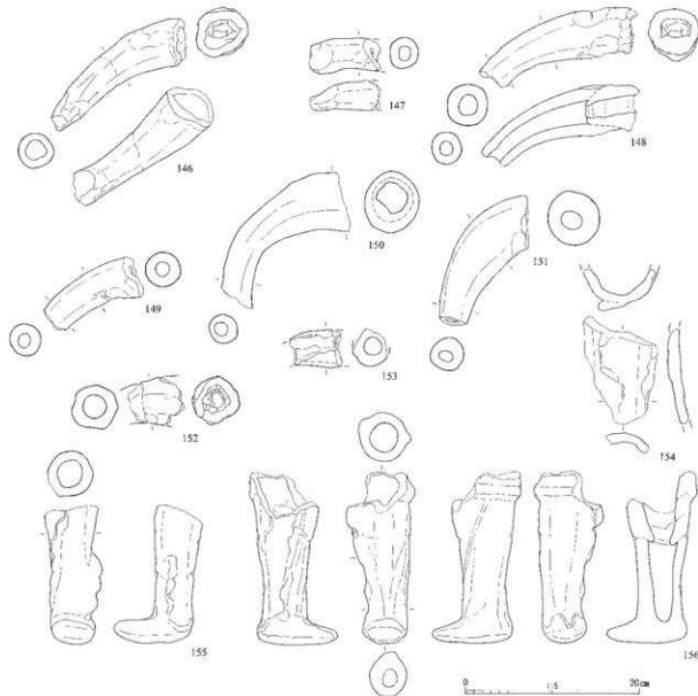


Fig.61 3号墳出土人物埴輪(2)

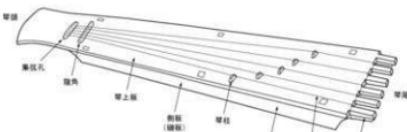


Fig.62 琴名称模式図

弾琴人物埴輪の琴 (Fig.63)

157は弾琴人物埴輪に付随する琴である。琴の突起の大部分は欠損するが、突起を6箇所もつ五弦の琴と考えられ、弾琴人物埴輪に伴う琴としては、最大級かつ写実的なものである。

なお、先述のとおり、人物埴輪の足の破片である155・156は焼成、色調、胎土などが157と近似しており、同一個体の可能性がある。これらの破片は出土位置も前方部西南隅部に集中していることも、同一個体とみる根拠の一つにあげうる。琴の全長は29.5cm、琴上板の最大幅11.9cm、側板(磯板)を含めた最大高は5.0cmである。琴上板と側板で構成され、共鳴槽をもつ琴が表現されたものであることが分かる。ただし、共鳴槽部分の底板、小口板(仕切板)の表現はみられない。琴上板と側板を固定する表現がないので、上板と側板の関係は不明である。側板の下部には弾琴人物本体と接合するための補強粘土が4箇所にわたり貼付されている。

琴上板は、琴尾が最も幅が広くなり、集弦孔に向かって幅が窄まっている。集弦孔から琴頭へは再び幅が広がり、鳥の尾のような形状をなす。こうした形状の特徴は東海地方で出土する木製琴の琴頭の形と共通する。琴尾側には突起が1箇所のみ残存する。残存する突起は一番端のものであり、側板と重なっているとみられることから、やや太めに表現されている可能性がある。琴尾の幅と、弦を表現した線刻の特徴から、突起は6箇所あったと想定できる。突起の付け根には、突起と直交する方向の線刻がある。これは弦を突起に巻きつけた表現かもしくは突起を切り込む際に付けられた設計線などの可能性がある。弦は沈線で表現され、5本の線刻が確認できる。弦は集弦孔から放射状に広がり突起間へ向かって伸びている。線刻の端部は突起と突起の間に入っているとみられるが、弦を突起に巻きつけていたどうかは不明である。

線刻表現された弦の集束部分には、幅2cmほどの橢円形状の不整形な粘土の貼付がある。この

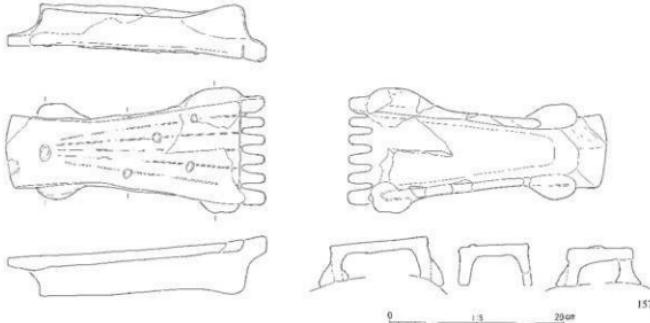


Fig.63 3号墳出土弾琴人物埴輪の琴

粘土貼付は集弦孔を表現したものである可能性があるが、実物の木製琴の場合、集弦孔は側板よりも外側の琴頭近くに設定することが一般的であり、本例の特徴と異なる。本例の粘土貼付位置は側板がある位置に相当すること、埴輪においても集弦孔は孔で表現される例が多いことなどから、この粘土貼付は集弦孔ではなく龍角を表現している可能性も考えられる。

弦の途中には円形浮文のような粘土貼付箇所が4箇所認められる。欠損部分にもあったと想定できるので、円文は5弦すべてに伴うとみてよいだろう。円文の位置は不規則であり、線刻の上に貼付されている。この円文は琴柱を表現した可能性が考えられるが、異論もある。琴柱を表したものであるなら、弦の下にあるように表現すべきであるので、この貼付文は琴柱とは異なるものを示している可能性も考慮しておきたい。同様の貼付文の事例は千葉県の姫塚古墳例や殿部田1号墳例にもみられ（宮崎1993）、相互の関連性を考慮してもよいだろう。

また、本例の琴頭部分には、円形の剥離痕のような損傷箇所が認められる。弾琴埴輪の琴には、栃木県亀塚古墳例のように琴頭部分に鈴が付けられているものが知られる。実物の木製琴に鈴が付けられた痕跡を持つものはないが、本例の琴頭にも鈴が付いていた可能性は留意してよいだろう。

家形埴輪 (Fig.64) 158～167は家形埴輪の破片もしくはその可能性が高いものである。158・159は堅魚木とみられる円柱状の破片であり、屋根にあたる粘土板が剥離した状態がみられる。堅魚木の直径は3cmほどで、長さは10cm程度である。

160は屋根上面と飾筋の可能性がある破片、161は棟木端部の可能性がある破片である。なお、161は馬形埴輪の髪の可能性も考慮してよいだろう。

162～167は屋根から軸部（壁）に至る部分の破片である。いずれも軒の突出は小さく、壁から

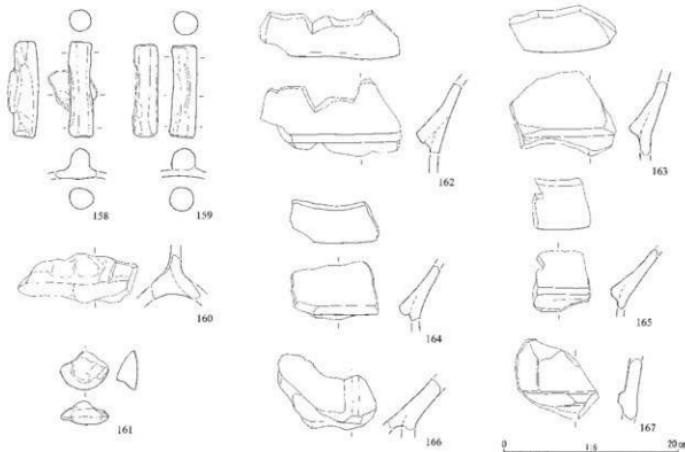


Fig.64 3号墳出土家形埴輪

外側に僅かに突出する程度である。屋根の傾斜は比較的強く、高い屋根をもつ家形埴輪の破片とみられる。166には屋根外面の突帯が、167には軸部外面の突帯と線刻表現がみられる。

種別不明の埴輪 (Fig.65) 168～177は、種別が不明確な埴輪、もしくは土製品である。168は円柱状に形成されるもので、端部には剥離痕が認められる。169は彎曲する本体に突帯が貼付された破片である。馬形埴輪の可能性があるが、明確でない。170は扁平な板に小さな突帯が付くものである。一辺は透孔もしくは端部とみられる。

171～176は円柱もしくは角柱状を呈する埴輪の部材、もしくは土製品である。遺存状態が悪く、剥離痕なども明確でない。形象埴輪に貼付された粘土が剥離したものに加え、単体で用いられたものが含まれるとみることもできよう。形象埴輪の部材と捉えた場合、人物埴輪の指が含まれると推定できる。また、馬曳き埴輪がもつ轡や、人物埴輪に伴う弓の弦などの可能性も考慮してよいだろう。いっぽう、これらの部材が単体で用いられたとみる場合、供物などを象った土製品が含まれる可能性が考えられる。同様の部材は、神内平1号墳や二子塚古墳にもみられ、人物埴輪の指として報告されている。

177は表面に布の压痕がみられる埴輪片である。表面にみられる布目は比較的緻密である。この破片は形象埴輪とする確証はなく、円筒埴輪の可能性も想定できよう。

形象埴輪基底部 (Fig.65) 178～182は形象埴輪の基底部とみられる個体である。いずれも形象埴輪が集中するE地区から出土した。E地区からは円筒埴輪の口縁部が全く出土しなかつたことも、これらの個体を形象埴輪の基底部ととらえる理由の一つである。

180や181のように円筒埴輪と異なり上部に向かって内傾する特徴は、淡輪系形象埴輪の基底部に多くみられる特徴である。178や180のように底部に近い位置までヨコハケがめぐらすこと、本墳から出土した円筒埴輪にはみられず⁶、形象埴輪の基部とみる根拠の一つにあげられる。これらの基部は、焼成、胎土、底部の特徴などが円筒埴輪と共通し、円筒埴輪製作工人と形象埴輪製作工人は一部重複するか、互いに深い関係にあったとみられる。

(鈴木)

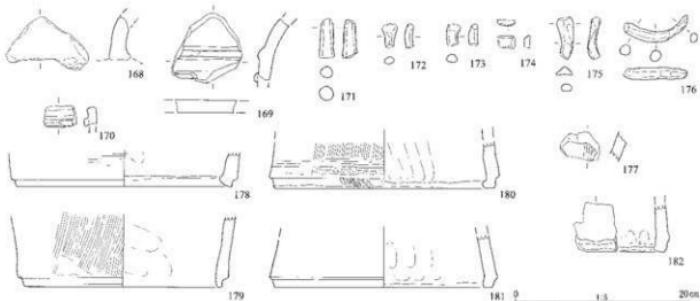


Fig.65 3号墳出土形象埴輪

(9) 3号墳くびれ部土坑 (SK01)

遺構 (Fig.66) SK01は、3号墳の南側くびれ部で検出した土坑である (Fig.66)。遺構内に堆積していた土層は、南側くびれ部で認められた初期流入土（褐色粘質土層）と非常に類似しており、当初、周溝の一剖と認識していた。そのため、SK01を検出したのは遺物取り上げ後に周溝を掘削している最中であった。

平面形は南北方向に長い楕円形で、大きさが $1.3 \times 2.4m$ 、深さが最も深いところ $0.4m$ を測る。また、南側半分は一段下がる形状をしている。遺構の埋土は褐色粘質土で、3号墳周溝の初期流入土に類似する。埴輪は、検出面上を除いて出土していない。古墳築造後の間もない時期に埋没したといえる。

(関根)

遺物 (Fig.67) SK01からは土師器が出土し、埴輪は検出面を覆うだけであった。出土した土師器は遺構の埋土中からまばらに出土したが、南側の一段下がった箇所では、甕 (Fig.67-1) がまとまって出土した。このほか、土師器の高坏 (Fig.67-2) が出土したが細片である。

これらの土師器の所属時期は、甕が長胴化過程のものと想定できることや、高坏の形態から5世紀後半を中心としたものといえよう。

土器の年代からみても、土層の堆積状況から得た所見と祖語ではなく、古墳築造後、埴輪が転落する直前に埋没したものといえ。古墳築造とほぼ同時期ととらえて問題なかろう。

(和田)

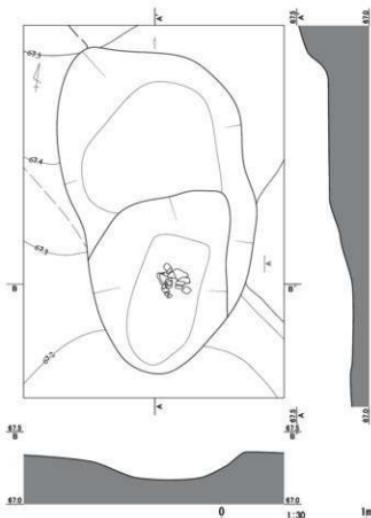


Fig.66 SK01 詳細図

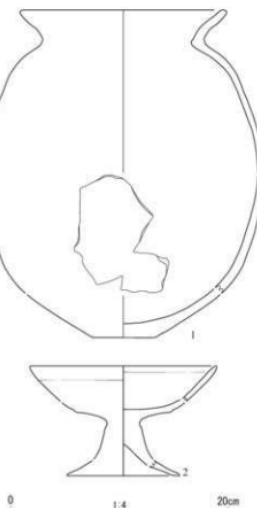


Fig.67 SK01 出土遺物

(10) 小結

古墳の特徴 調査の結果、郷ヶ平3号墳は全長22.3mの前方後円墳であることが判明した。埴輪をそなえるが、葺石は施されていない。後円部の直径は14.7m、前方部の幅は12.0m、周溝を含む全長は、26.0mである。周溝は緩やかな前方後円形を呈しているが、くびれ部は幅が若干広くなっている。前方部や後円部にみられる周溝は幅が2.5mほどである。前方部の北西隅の外周には周溝の張り出しが認められ、祭祀空間が形成されていた可能性がある。

須恵器 周溝からは須恵器・土師器と埴輪が出土した。須恵器は陶邑系（湖西窯を含む）のものと在地系（有玉窯を含む）のものが含まれるが、概ねTK23型式期に位置づけられるものである。また、前方部北西外側には製作時期が新しい時期の須恵器が破碎された状態で出土した（SX01）。出土遺物の編年の位置はTK10型式期であり、郷ヶ平4号墳（前方後円墳）の築造時期と重なることは、追加儀礼の契機を探る上で示唆的である。

円筒埴輪 周溝から円筒埴輪が豊富に出土した。円筒埴輪は2条3段構成のもので、底部には環状の段差をもつ淡輪技法がみられる。円筒埴輪の第1段にはヨコハケをもつ一群ともたない一群が共存している。編年の位置についてもTK23型式期とみて矛盾はない。

形象埴輪 形象埴輪は前方部南側の周溝（E地区）から集中的に出土した。この部分には円筒埴輪の破片が認められないで、前方部南辺には円筒埴輪列がなく形象埴輪のみが樹立されていた可能性が高い。形象埴輪には、馬、馬曳き、彈琴人物を含む男子、女子、家の各種が認められる。馬形埴輪は部材がほぼ完全に揃う資料として県内初の出土例である。彈琴人物に伴う琴も県内では初の出土例で、写実的な表現が注目できる。

築造時期 周溝から出土した須恵器と埴輪の編年観から導き出せるTK23型式期が、郷ヶ平3号墳の築造時期と捉えられる。曆年代で示せば西暦470年代から480年代頃を中心とする時期といえるだろう。

TK23型式期は、当地域にみられる淡輪技法の埴輪系列のなかでも、形象埴輪を豊富にもつ系譜が出現する画期に位置づけられ、郷ヶ平3号墳の事例は、その初源期に近い資料といえる。人物埴輪を伴う形象埴輪群が東日本の広域に拡散する時期にあたる点でも、近畿地方と東日本を繋ぐ位置にある本例の重要性は高いといえるだろう。（鈴木）

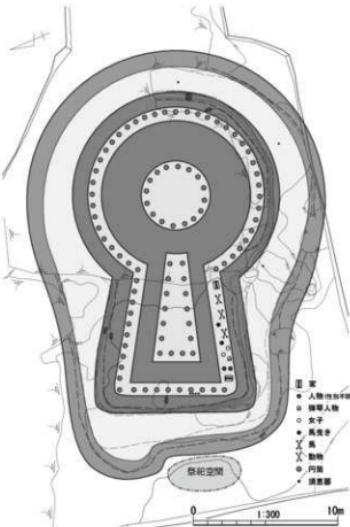


Fig.68 郷ヶ平3号墳墳丘復元図

第3章 後論

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

(1) はじめに

郷ヶ平3号墳からは豊富な形象埴輪と淡輪技法をもつ円筒埴輪が出土し、当地域における埴輪製作技法の推移や生産体制を探る標識的な資料が得られた。淡輪技法とは纖維質の輪を底部に敷き円筒部を積み上げる手法であり、須恵器製作技法との強い関連をもつ。こうした技法をもつ埴輪は、伊勢や遠江に多く分布し、その本貫地と目される大阪府淡輪地域および和歌山県紀ノ川下流域との関連が指摘されている（川西1977、坂・穂積1989）。

淡輪技法の採用には自重による変形を防ぎ、底部の大きさを規格化する意図があったと想定されていた（鈴木1990）。しかし、淡輪系埴輪における底部径の多様性は著しく、この技法は底部の大きさを規定しているとはみなしがたい。むしろ、成形時に使用する回転台からの離脱を容易するために纖維質の輪が用いられたと解釈する方が理解しやすい（辻川1997）。

三河・遠江地域では、淡輪系埴輪を出土する古墳が20基ほど認められ（Tab.2）、焼成した窓跡も確認されている。ここでは、当地域における淡輪系円筒埴輪の編年的位置づけを明確にした上で、形象埴輪を含めた三遠地域における淡輪系埴輪の実態とその推移について触れておきたい。

(2) 三遠地域における淡輪系円筒埴輪の変遷

分類 当地域における淡輪系円筒埴輪については、1次調整にイタナデを施すものとヨコハケを用いるものの2種に大きく分けられる。前者はI類、後者はII類とされており（鈴木敏1990）、本稿でもこの分類を踏襲する。I類、II類ともに2次調整には基本的にヨコハケを用いるが、I類には突带上にもヨコハケが施されるものがある。ここでは、突带上にヨコハケをもたない通有の製品をI a類に、突带上にもヨコハケを施すものをI b類とする。また、I類の中には2次調整にヨコハケを用いずナデ調整されるものがあるが、この一群をI c類としておきたい。I b類は突帯幅が広いものが多く含み、須恵器焼成とともに関連が深い。伝統的な円筒埴輪の形態や技法との乖離が顕著な点で、在地的な変容を示すとともに、須恵器焼成技法との関連を強く印象付ける。

II類については、第1段に2次調整のヨコハケを施すものをII a類、施さないものをII b類、全体的に2次調整の省略が進んだものをII c類とする分類案（鈴木敏1990）を援用する。大まかな変遷観としては、I a類・I b類→II a類→II b類→II c類といった推移が想定できるが、その細部については複数の報告者が指摘しているとおり、検討が必要である（白井・鈴木京2004、栗原2005）。

変遷観 I類については、形態や技法が多様な千人塚古墳例が初源的な事例とみられる。千人塚古墳例には4条突帶5段構成（以下、4条5段と略す）のものがふくまれ、I a類とI c類が認められる。また、突带上にヨコハケを施さないものの、低平な突帶も認められ、I b類との関連が

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

Tab.2 三遠地域における淡輪系埴輪出土地

古墳名	所在地	墳形	規模	須恵器	内面		外観				動物				器財			
					構成	細分	男子	婦人	浮舟	漆耳	武人	馬	力士	女?	馬	鹿	犬	鳥
千人塚古墳	浜松市	造出付円墳	51	—	4条3段	Ia, Ic												
光明山古墳	浜松市	前方後円	82	—	—	Ia, Ib												
京見塚古墳	磐田市	円墳	47	TK208	2条3段	Ia, Ib												
京見塚	磐田市	室跡	—	—	2条3段	Ia, Ib												○
(明通室跡)	湖西市	室跡	—	TK23	2条3段	(Ib)												
郷ヶ平3号墳	浜松市	前方後円	22	TK23	2条3段	IIa, IIb	○	(O)	○	○	○	○	○	○				
一ノ宮古墳	(南)前方後円	15~20	(TK23)		2条3段	IIa												
神内1号墳	浜松市	前方後円	17	TK23~TK47	2条3段	IIb	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○
青塚古墳	幸田町	前方後円	36	—	不明	不明	(O)											
二子塚古墳	磐田市	前方後円	55	TK47	2条3段, 3条4段	IIa	○	○	○	○	○	○	○	○				
後山13号墳	磐田市	不明	—	—	不明	IIa												
辺田平1号墳	浜松市	前方後円	20	HII (TK47)	2条3段	IIa	○	○	○	○	○	○	○	○				
念佛6号墳	豊川市	前方後円	—	不明	—	IIa, IIb	○	○	○	○	○	○	○	○				
数谷原古墳	豊川市	不明	不明	—	不明	不明												
岬塚古墳	湖西市	室跡	—	MT15	2条3段	IIa, IIb												
古村塚古墳	岡崎市	前方後円	31	MT15	3条4段	IIb	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
権現平(6号墳)	浜松市	前方後円	15~20	—	—	IIb												
江古山2号墳	磐田市	方墳	9	H10(MT15)	2条3段	IIb												
江古山4号墳	磐田市	方墳	11	H10(MT15)	2条3段	IIb												
伊保遺跡	磐田市	古墳群	—	—	不明	(IIb)												
稻荷塚古墳	磐田市	不明	—	—	不明	(IIb)												
鬼塚古墳	浜松市	前方後円	21	TK10	不明	IIc												

うかがえる。副葬品が示す古墳の編年的位置はTK73型式期に中心があり、その下限はTK216型式期である。光明山古墳例は千人塚古墳例よりも粗いヨコハケが顕著なもので、突帶上にもヨコハケをめぐらすI b類を主体とする。I b類の特徴は、先行する磐田市堂山2号墳の石見形埴輪などにも看取でき、天竜川東岸域の地域的特性と捉えられる（鈴木敏1990）。光明山古墳例には、僅かながらタタキの痕跡をとどめるものがあり、淡輪技法と須恵器生産技術との関連を明確に伝える点で初現的な時期に位置づけてよい。これら2例の帰属時期は、TK73型式期に遡る可能性があるが、後続例との時間的開きを考慮すると、TK216型式期に位置づけておくのが妥当であろう。京見塚古墳例はI b類を主体とし、2条3段構成に統一されている。後出するII類との形態的な類似性が高く、I類の新相期に位置づけてよいだろう。この古墳からはTK208型式期の須恵器が出土している。

I類に統いて成立したII類は、2条3段構成という統一的な形態規範がある。同時期の尾張地域でも同じ段構成の埴輪が盛行るので、2条3段構成の埴輪は、東海地方の広範囲に受容される形態と評価してよいだろう。IIa類とIIb類の関係は時期差と評価されてきたが、郷ヶ平3号墳では、両者が共存し、同時期に並存することが明確になった。その時期は、出土須恵器が示すTK23型

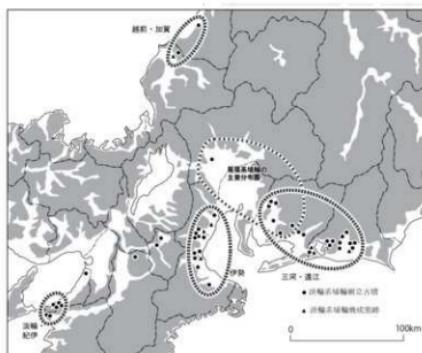


Fig.69 淡輪系埴輪の分布

西周 須恵器		円筒埴輪			特記事項
425	(TK73)	1a	1b	1c	淡輪技法の導入
TK216					
450					
TK208		1b	2名3段構成の確立		
475	TK23	IIa	IIb	IIc	II型の成立 人物・動物埴輪の本格導入
TK47	H11	IIa	IIb	IIc	IIa型とIIb型の確立 第1段ヨコハケの流行
500	H10	IIb	IIc	IIc	第1段ヨコハケの衰退
MT15					
525	TK10	IIc	IIc	IIc	2次調整ヨコハケの衰退

西周 須恵器 円筒埴輪 特記事項

425 (TK73) 1a 1b 1c 淡輪技法の導入

TK216

450

TK208 1b 2名3段構成の確立

475 TK23 IIa IIb IIc II型の成立
人物・動物埴輪の本格導入

TK47 H11 IIa IIb IIc IIa型とIIb型の確立
第1段ヨコハケの流行

500 H10 IIb IIc IIc 第1段ヨコハケの衰退

MT15

525 TK10 IIc IIc IIc 2次調整ヨコハケの衰退

西周 須恵器 円筒埴輪 特記事項

425 (TK73) 1a 1b 1c 淡輪技法の導入

TK216

450

TK208 1b 2名3段構成の確立

475 TK23 IIa IIb IIc II型の成立
人物・動物埴輪の本格導入

TK47 H11 IIa IIb IIc IIa型とIIb型の確立
第1段ヨコハケの流行

500 H10 IIb IIc IIc 第1段ヨコハケの衰退

MT15

525 TK10 IIc IIc IIc 2次調整ヨコハケの衰退

西周 須恵器 円筒埴輪 特記事項

425 (TK73) 1a 1b 1c 淡輪技法の導入

TK216

450

TK208 1b 2名3段構成の確立

475 TK23 IIa IIb IIc II型の成立
人物・動物埴輪の本格導入

TK47 H11 IIa IIb IIc IIa型とIIb型の確立
第1段ヨコハケの流行

500 H10 IIb IIc IIc 第1段ヨコハケの衰退

MT15

525 TK10 IIc IIc IIc 2次調整ヨコハケの衰退

西周 須恵器 円筒埴輪 特記事項

425 (TK73) 1a 1b 1c 淡輪技法の導入

TK216

450

TK208 1b 2名3段構成の確立

475 TK23 IIa IIb IIc II型の成立
人物・動物埴輪の本格導入

TK47 H11 IIa IIb IIc IIa型とIIb型の確立
第1段ヨコハケの流行

500 H10 IIb IIc IIc 第1段ヨコハケの衰退

MT15

525 TK10 IIc IIc IIc 2次調整ヨコハケの衰退

Fig.70 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷

1 三遠地域における渋輪系埴輪の変遷とその意義

式期といえ、II類の出現期に相当する。TK23型式段階の須恵器を焼成した湖西市明通り窯跡から出土した円筒埴輪（渋輪系埴輪の可能性が高い）も第1段にヨコハケをもたないII b類とみられる。これらの事例が示すように、II類の出現期（TK23型式期）からII a類とII b類は並存するとみてよいだろう。

第1段の外面ヨコハケ調整は、畿内の円筒埴輪でも省略される事例が認められ、当地域においても浜松市孤塚古墳（TK73型式期、鈴木—2012）において、第1段の外面ヨコハケ調整を省略した円筒埴輪が確認されている。第1段の外面調整の有無は、変遷の傾向を掴む属性として有効であるが、編年的位置付けの絶対的な指標となりにくい。

古墳に伴う須恵器の編年観を通じて整理するなら、第1段にヨコハケを施すII a類は、II類の出現期（TK23型式期）からTK47型式期にかけて存続し、つづくMT15型式期には峰場窯例を最後に急速に衰退すると捉えられる。いっぽう、第1段のヨコハケを省略するII b類は、II類の出現期からII a類と並存し、MT15型式期まで残存すると考えられる。2次ヨコハケの省略傾向が著しいII c類は該当例が亀塚古墳の1例のみであり、MT15～TK10型式期に中心があるとする見解（鈴木敏1990）以上の所見を持ち合わせない。

なお、II類の中には3条4段構成のものが二子塚古墳と古村積神社古墳に認められる。新しい時期における変容形態と捉えることもできようが、前者は全長55m、後者は全長31mと墳丘規模が大きいことから、3条4段構成の埴輪は、階層差が示されている可能性がある。

古 墳 名 別 記 地 理 分 類	地 理 分 類	地 理 分 類	地 理 分 類	地 理 分 類	地 理 分 類	地 理 分 類
西三河（矢作川流域）	東三河（豊川流域）	西遠江（都郡・天竜川流域）	中遠江（太田川流域）	東遠江		
土 器 分 類	土 器 分 類	土 器 分 類	土 器 分 類	土 器 分 類	土 器 分 類	土 器 分 類
1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1
200 2 2 異	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1	1 1
3 3 異	2 2	2 2	2 2	2 2	2 2	2 2
4 4	3 3	3 3	3 3	3 3	3 3	3 3
5 5	4 4	4 4	4 4	4 4	4 4	4 4
400 6 6 TK22	5 5	5 5	5 5	5 5	5 5	5 5
6 7 TK21	6 6	6 6	6 6	6 6	6 6	6 6
7 8 TK26	7 7	7 7	7 7	7 7	7 7	7 7
8 9 TK23	8 8	8 8	8 8	8 8	8 8	8 8
9 10 MT15	9 9	9 9	9 9	9 9	9 9	9 9
10 11 TK45	10 10	10 10	10 10	10 10	10 10	10 10
800 11 TK29	11 11	11 11	11 11	11 11	11 11	11 11

Fig.71 三遠地域における古墳の変遷

(3) 形象埴輪の特徴と変遷観

淡輪系円筒埴輪の出現期にあたるⅠ類は、京見塚古墳で僅かな蓋形埴輪が知られる程度で、形象埴輪が伴うことが極めて少ない。Ⅰ類は円筒埴輪生産に特化している段階の所産と判断できよう。いっぽう淡輪系埴輪Ⅱ類には、形象埴輪を伴うものが大半を占める。Ⅱ類導入以前の資料群と比べると、形象埴輪の充実ぶりは明確であり、大量の形象埴輪導入とⅡ類の淡輪系円筒埴輪の出現は帰一の事象と捉えられる。Ⅱ類の成立の背景には外来的な要因を大きく見積もるのが妥当であろう。

この時期の形象埴輪には円筒形の基部をもつものがある。基部が判明するものはすべて淡輪技法で製作されている。焼成や色調、胎土などの特徴も円筒埴輪と形象埴輪はほぼ共通するので、双方とも同一の工人集団が製作にかかわったと理解できる。Ⅱ類の円筒埴輪と共に伴う形象埴輪を、底部技法が確認できない事例を含め「淡輪系」と呼称する所以である。

Ⅱ類の淡輪系形象埴輪には、技法上、特筆すべき技法や特徴が看取できる。以下、先行研究（鈴木徹 1997、白井・鈴木京 2004）に導かれるながら、その一部を紹介しておきたい。

端部埋め込み技法 人物埴輪の腕や足、動物埴輪の頭部などの接合には、端部をしぼった本体部分に外側から埋め込むようにして部品を縫ぎ足す技法が多くみられる。こうした技法を「端部埋め込み技法」と呼ぶ。馬形埴輪の頭部の接合にもこの技法が採用されており、内面に口縁状の端部が大きく残存している。人物埴輪の腕にみられる埋め込み端部の形状には、中空にしているものと端部を閉塞しているものがある。前者が古相、後者が新相の特徴とみられる。新相の閉塞技法がみられる資料として神内平1号墳例、二子塚古墳例、古村積神社古墳例があげられる。

芯部巻き付け技法 人物埴輪の腕や鶏の頭部など中空の部位を製作する際には、粘土を棒状の芯に巻きつけて製作する技法（芯部巻き付け技法）がみられる（白井・鈴木京 2004）。この技法は馬形埴輪の尻尾にも援用されており、細部に至るまで中空に造り上げる明確な意図がうかがえる。

差し出す腕 男子、女子ともに腕は前方に差し出す表現が多くみられる。女子の場合は両手を合わせて容器を捧げる表現が多用され、給仕する人物が表されている。いっぽう男子埴輪においても、腕は前方に差し出したものが多く見られる。片腕を上げる所作をとることが多い馬曳き埴輪においても、淡輪系埴輪においては腕を前方に差し出す形態が多数を占めていると想定できよう。

男子埴輪の表現 男子埴輪の頭部は、粘土紐の巻上げによって頭頂部を閉塞し、被り物や頭髪が添付されている。また口の開口が小さく、緩やかなU字形を描く。被り物は鉢巻状に表現されるも



Fig.72 三遠地域の淡輪系形象埴輪にみる製作技法の特徴

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

のが多く、三角文の線刻が施される。頭髪の表現としては、左右に下げ美豆良がみられ、後頭部は垂髪がみられる。後頭部の垂髪は、左右に掻き分けた髪より上に表現されるという共通性もみられる。鉢巻状の被り物をもち、下げ美豆良を結う男子埴輪は馬曳きを表現したものが含まれる可能性が高い。郷ヶ平3号墳から出土した馬曳きも、同種のものといえる。

女子埴輪の表現 女子埴輪の頭部は比較的大きな円形粘土板によって閉塞したのち、髪が添付されている。髪は板状粘土を前後から折り曲げ、中空に表現され、実際の髪型に近い表現を志向している。髪の粘土板は、1) 上下二枚の粘土板を折り曲げるものの、から、2) 前後の端部のみを巻き込むもの、3) 上下の粘土板を張り合わせて一枚の板にするもの、といった差異があり、1) から3) の順に各技法が出現するものと捉えられる。女子埴輪も顔面が遺存する事例は少ないので、男子埴輪と比べると、口の開口は大きい（白井・鈴木京2004）。女子埴輪に多くみられる袈裟状衣には、羽状刺突が入れられた2条の横位突帯がみられる。さらに、背中には突帯による襷掛け表現がみられる点でも共通性が高い（鈴木徹1997）。また、女子埴輪には、両足をそなえるものがあること、容器を掛けもつ表現が多用されることなども特徴としてあげられる。

馬形埴輪 淡輪系の馬形埴輪は面繫、胸繫、尻繫の三繫を表現した飾り馬が表現されている。裸馬や飾りが省略された事例はみられない。馬形埴輪には轡が遺存するものが少なく不明確であったが、郷ヶ平3号墳例によって、鈴付きの楕円形鏡板をもつことが判明した。轡は新しい時期になるとf字形に表現される可能性が高い。面繫の後頭部にまわされた帶は、耳の付け根を縁取るようにめぐり額の帶と連結している。この繋ぎ方は実物と異なるが、淡輪系馬形埴輪に共通する表現である。面繫の交差部には辻金具が表現される場合と省略される場合がある。前者が古相、後者が新相とみられる。手綱は前輪の前方で収束し、端部は二本の粘土棒を捩じって上方に突出させている。

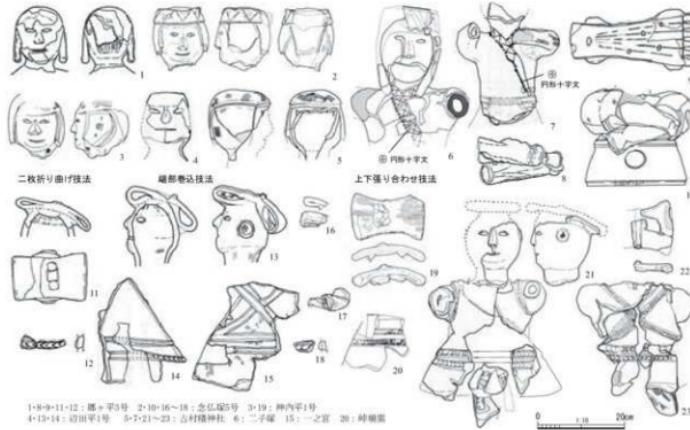


Fig.73 三遠地域における淡輪系人物埴輪の諸例

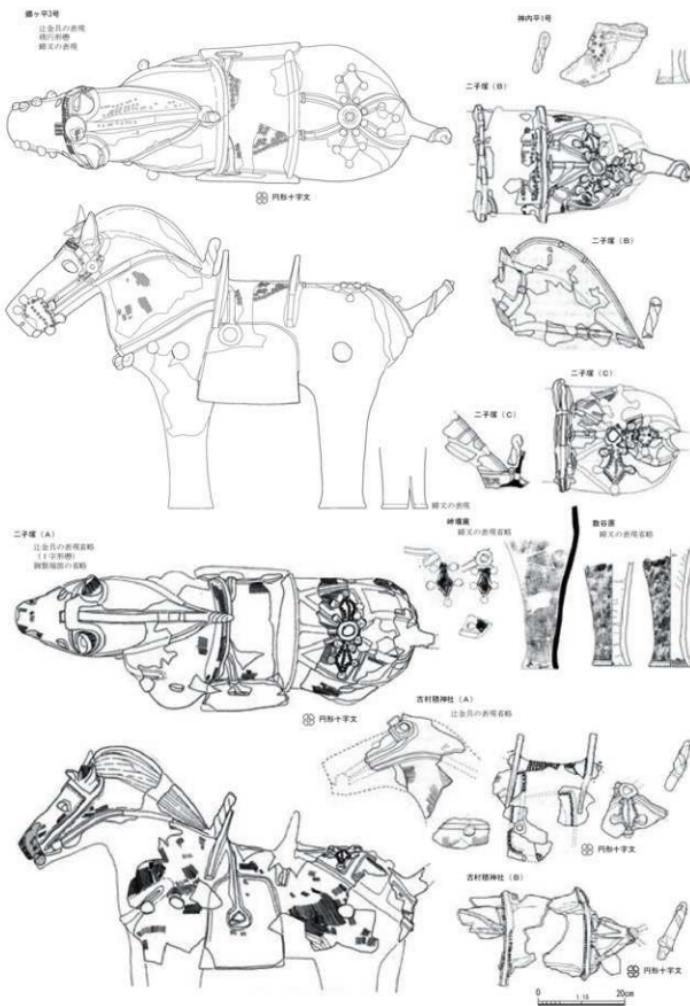


Fig.74 三遠地域における淡輪系馬形埴輪の諸例

1 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義

胸繫には馬鈴が、尻繫には環状雲珠を介して五鈴杏葉が3方向に垂下されている。五鈴杏葉の表面には刺突文が施されることが多い。後輪の轅との連結部には貴金属状の小粘土帶が添付される。

脚部は緩やかな曲線を描き、端部が外反する形態をなす。郷ヶ平3号墳例のように、蹄叉の切り込みがみられるものがある。切り込みがあるものが古く、新しい時期になると蹄叉の表現がなくなると想定できる。

円形十字文 淡輪系馬形埴輪には、円形十字文と円形文（竹管文）が多用されることも特徴である。円形十字文は面繫や轅、杏葉などの表面のほか、鞍轡を示す表現としても用いられている。円形十字文は大きさに差異が見られることが多く、報告で述べたとおり郷ヶ平3号墳例では3種の工具が用いられている（Fig.56）。

また、人物埴輪にも円形十字文が施された資料が散見できる。衣服の合わせ目に線刻で交差文が施され、その内側に円形十字文がみられる資料が二子塚古墳例と古村積神社古墳例にある。これらの男子埴輪は、馬曳きである可能性が高く、この想定が正しいとすれば、円形十字文は馬もしくは馬にかかわる人物に重点的に用いられる模様と評価できる。

鹿形・猪形・犬形埴輪 辻田平1号墳例には見返りの鹿が知られ、その他の古墳からも猪や犬などが多く出土している。辻田平1号墳には、弓に矢をつがえた写実的な狩人を象った埴輪もある。狩猟風景が表現された資料が一定量認められることは当地域の淡輪系形象埴輪の特色であろう。

家形・蓋形埴輪 家形埴輪は軸部に比べて屋根が高いもので、円柱状の堅魚木が乗ることが多い。線刻などが施されることがあるが、あまり大型のものは知らない。蓋形埴輪も立ち飾りの省略傾向が顕著である。また、盾形埴輪、駆形埴輪、石見形埴輪などは、存在しないか、あったとしても多くは製作されなかつたとみられる。

（4）形象埴輪祭祀の拡散と淡輪系埴輪

II類の製作地 上述のとおり、三遠地域における人物・動物埴輪は、淡輪系円筒埴輪II類の出現と同時に本格的に導入された。その分布域は静岡県磐田市から愛知県豊田市までの半径50kmほどの範囲で、中心は郷ヶ平古墳群が含まれる西遠江地域である。主要な生産地は湖西窯とみられ、製作工人は須恵器製作工人と同一か、彼らと極めて強い関係をもっていた人びととみられる。

淡輪系埴輪II類の製品は、円筒埴輪、形象埴輪とともに、5世紀後葉から6世紀初頭（TK23～MT15型式期）までの一定期間の存続時期が見込まれるにもかかわらず、斎一性が極めて強い。こうした特徴から、II類の製作工人集団は、限定的かつ專業的であったことがうかがえる。湖西窯の製品供給を恒常に受けた天童川以西の西遠地域では、淡輪系埴輪が排他的に採用された。天童川より東に位置する首長墓、二子塚古墳にも淡輪系埴輪が供給されているので、西遠江における淡輪系埴輪II類の生産、流通には、伝統的な磐田原台地の最有力首長も関与していたことが分かる。

いっぽう、同時期の愛知県東部では在來的な技法をもった三河系埴輪が多く分布し、西三河では尾張系埴輪の影響力も濃厚にみられる。当地における淡輪系埴輪は、点的な分布にとどまり、地域の中に根ざした技術系譜とはみなしがたい。三河における淡輪系埴輪は、製品が湖西窯から運ばれたか、工人集団が限定的に移動して製作したものと評価できる。また、江古山古墳群など豊田市の

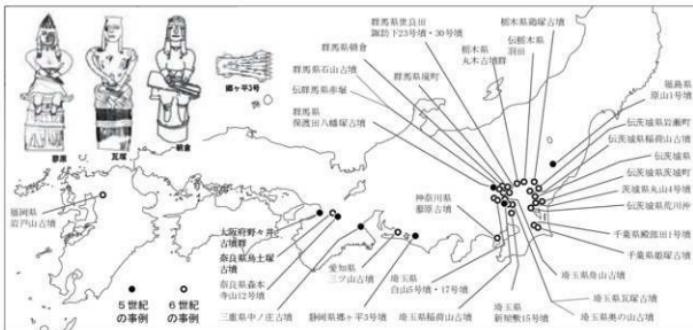


Fig.75 弹琴人物埴輪の分布

事例は在來的な尾張型埴輪との関連が強く、底部にかかる技法のみが伝播した可能性がある。

II類の系譜 三遠地域における淡輪系埴輪II類が登場するに到った情報の源流地は、淡輪技法の関連地である淡輪・紀ノ川下流域に限定できない。湖西窯で焼成された須恵器が陶邑系であることを考慮すると、淡輪系埴輪II類の製作工人たちも畿内の河内や和泉などからの影響を色濃く受けていると想定した方がよいだろう。また、形象埴輪にみる畿内からの情報伝播は、同時期に類似した技法や表現がみられる伊勢地域の様相（德積2001）も視野に入れて検討を進めるべきである。

いっぽう、5世紀後葉における形象埴輪の拡散は関東地域にも大きく影響が及んでおり、淡渦系埴輪の系譜を明確する作業は、畿内から東国への埴輪祭祀や技術の拡散を知る上でも重要性が高い。とくに、郷ヶ平3号墳で確認された彈琴人物埴輪は、当地域の淡渦系埴輪の展開を埴輪祭祀の全国的な推移の中に位置づける上で、重要な示唆を与えるものとなった。彈琴人物埴輪は6世紀の関東地方において流行するが、5世紀代の事例の分布状況から、その源流は畿内にあるとみてよいだろう。彈琴人物埴輪は5世紀後葉における大王墓の形象埴輪群の中枢に用いられている可能性があり、東海における事例は、当該期の畿内と関東の間の空白を埋める要素として注目できる。

(5) 結語

三遠地域における淡流域埴輪II類は、高い斎一性をもつことを特徴とする。技法の変異幅が少ないとから考えると、その製作者は限定的とみなせる。主要な存続期間は30～40年ほどで、この間に前方後円墳を中心に20基程度の古墳建築に関与したとみられる。1～2年ごとに新たな古墳造営に携わる計算であり、埴輪製作を専業的に行う工人集団が組織されていたと考えてよい。高い斎一性は、埴輪製作にかかる特殊技能が地域内に拡散しなかったことを示すとともに、当地域では埴輪生産が特殊な分野であったことを物語る。遠江では6世紀前半において、埴輪の技術系統が淡流域から尾張系に変化することをふまえると（鈴木敏2001）、工人たちの世代交代によって淡流域埴輪がもつ技術系譜の多くが途絶えたと評価できるだろう。（鈴木）

(鈴木)

2 郷ヶ平古墳群の形成過程とその特質

(1) はじめに

郷ヶ平古墳群の調査成果によって、遠江における5世紀後葉の埴輪をもつ小首長墓の実態が明確になった。埴輪の様相にとどまらず、前方後円墳と円墳が組み合う古墳群の構造、特徴的な周溝構態や周溝周辺における祭祀の痕跡、葺石の不採用など古墳の外部施設にかかわる情報も合わせて得られた意義は大きい。ここでは、近隣地域の事例をふまえ、調査から得られた情報を解きほぐし、郷ヶ平古墳群築造の歴史的背景と被葬者像について触れておきたい。

(2) 遠江における初期群集墳の特質

前方後円墳と円墳 近年、淡輪系埴輪をもつ古墳の調査事例が増加し、5世紀後半を中心とする首長墓の実態が明確になっている。その多くは単独に立地するものではなく、周りに中小古墳を從え古墳群を形成している。その中心は、前方後円墳と円墳の組合せである(Fig.76)。前方後円墳と円墳の組合せは全国的にも多く知られ、日本列島の広範にみられる首長階層の集団構造を示す基本単位とみなせる。こうしたあたり方は、遠江においても松林山古墳・高根山古墳の事例に認められ(鈴木一 2011)、古墳時代前期から連続する伝統的な集団構造の表現と評価できるだろう。5世紀後葉以降に発達する初期群集墳の多くは、この基本単位を中心にして、小規模な円墳などがさらに付随して築かれ、一つの古墳群を形成している。

先述のとおり、淡輪系埴輪II類は小型の前方後円墳に採用される事例が圧倒的に多く、類似した階層の有力集団が古墳造営を相次いで始めたことを伝えている。造営主体の多くは5世紀後葉に新たに前方後円墳を築造した新興勢力といえるが、従前の首長墓階層の原則に従って古墳群を形成している点で、伝統的な伴組みとも大きくかかわっている。しかし、この段階の古墳群には、それまでにみられなかった新たな様相も数多く見出せる。以下にその具体像を示しておこう。

埴輪の有無 淡輪系埴輪を採用する古墳は、前方後円墳(帆立貝形を含む)に限定されており、円墳などの小古墳には樹立されない傾向が顕著である。前方後円墳に付随する円墳は、墳形だけではなく、埴輪の有無という点で明確な階層差が表現されている(Fig.76)。

葺石の不採用 淡輪系埴輪II類を採用する古墳は葺石を持たないという点でも共通性が高い。遠江においては、葺石は5世紀末葉まで存続するが、小型方墳などに残存する傾向がある。淡輪系埴輪を囲繞する古墳には、新たな墳墓の外觀を示す積極的な志向性を読み取ることも許されよう。葺石の不採用はそれまでの首長墓にみられなかった古墳造営工程の変革といえ、形象埴輪を含む埴輪を並べることに外觀の主眼が移ったこととも関連があると評価できる。

人物・動物埴輪 豊富な形象埴輪の採用はこの時期の古墳群の最大の特徴である。その詳細は先述したとおりであるが、淡輪系形象埴輪は齊一性が高く、葬送儀礼において実施された祭祀の共通性も合わせて伝えている。古墳造営活動の主体は土木工事とともに、埴輪製作が大きな比重を占めており、葺石の不採用とあいまって、埴輪製作工人は造墓活動そのものに対する影響力を増していく

たとみられる。

前方部外周の祭祀空間 二子塚古墳、郷ヶ平3号墳、辺田平1号墳といった淡輪系埴輪を採用する前方後円墳の周溝には、前方部の一方の隅が突出するという形態上の類似性が指摘できる。郷ヶ平3号墳においては、この突出部の近くで、碎片化した須恵器がまとまって出土しており(SX01)、須恵器を破碎する儀礼が行われたことがうかがえる。突出部をもつ周溝形態は前方部外周における祭祀空間の存在を示唆するものであり、3古墳の類似は、共通した祭祀様式の発露と解釈することも許されよう。周溝の形態から想定できる祭祀空間については、良好な検出例を加えて慎重に議論を進める必要があるが、葺石をもたない墳丘の特徴や、齊一性の高い埴輪とともに、「淡輪系遠江型前方後円墳」と呼べる共通した墳墓属性として把握できる可能性を示しておきたい。

小型前方後円墳の被葬者 淡輪系埴輪を採用する小型前方後円墳には一之宮古墳や辺田平1号墳など、特徴的な立地環境から被葬者像が示せる事例がある。その具体像について触れておこう。

一ノ宮古墳は、須恵器生産の拠点である湖西窯の中枢に構築されている。墳形は不明な点が多いが、全長20m程度の小型の前方後円墳と考えられる。古墳の構築時期は、明通り窯といった湖西窯の中でも最古級の窯の構築時期(TK23型式期)と重なる。湖西地域には先行する首長墓系譜がみられないことから、この古墳の被葬者は遠江における須恵器生産の開始にあたり、主導的な役割を担った人物と考えられる。

いっぽう、辺田平1号墳は、隣接地に渡来系集団の墳墓群とみられる二本ヶ谷積石塚群が展開している。辺田平古墳群の埋葬施設には、二本ヶ谷積石塚群との関連がうかがえるものがあり、渡来系集団との密接な関係が看取れる。辺田平古墳群の中には、渡来人の系譜をひく人物が葬られている可能性が高い。こうした特徴から判断して、古墳群の中心をなす辺田平1号墳の被葬者は、渡来系集団を束ねた有力階層と捉えてよいだろう。

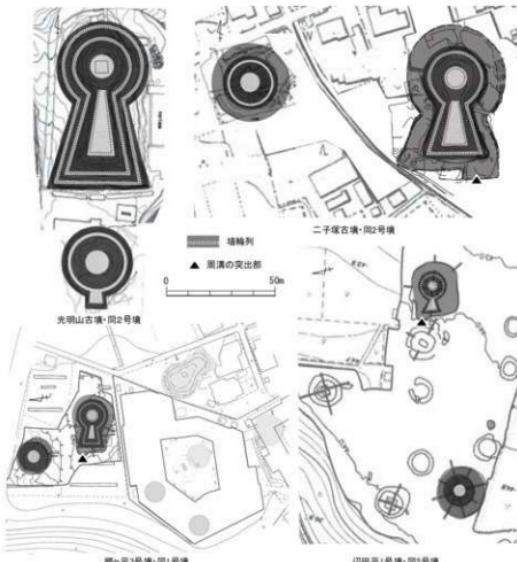


Fig.76 淡輪系埴輪を採用する前方後円墳と円墳の関係

(3) 都田川流域における首長系譜

小地域と首長墓 郷ヶ平古墳群が造営される都田川流域は、浜名湖に至る河川が貫く小盆地が連続し、地形的に完結性が高い地域である。この地は、律令制下における「引佐郡」に相当し、『和名類聚抄』の記載から平安時代には、渭伊郷、伊福郷、刑部郷、京田郷の4郷があったことが知られる。この4郷は、現在の都田川流域の小地域との対応が可能であり、渭伊郷：井伊谷川流域（北区引佐町井伊谷）、伊福郷：浜名湖沿岸地域（北区細江町気賀）、刑部郷：都田川下流域（北区細江町中川）、京田郷：都田川中流域（北区都田町）に相当するとみてほぼ間違いない（辰巳 1994）。引佐郡下の郷名については、古代史の観点から、それぞれ説得力が高い由来が指摘されている⁽¹⁾。

この地域には、全長 50m 規模の前方後円（方）墳が古墳時代前期から中期にかけて連続と構築されている（辰巳 2006）。都田川流域全体を統括する最有力首長は全長 50m 級の前方後円（方）墳を構築したことがうかがえる。いっぽう、郷ヶ平 3 号墳、同 4 号墳、陣内平 1 号墳といった小型前方後円墳は、同じ墳形を採用しながらも、全長 20m 級の規模にとどまる。複数の古墳が同時期に築かれたとみられることを合わせて考えると、その影響力が及んだのは律令制下の「郷（サト）」に相当する小地域とみてよいだろう。以下、これら小地域ごとに首長系譜と集落などの特徴をまとめておきたい。

小地域の特徴 井伊谷川流域の井伊谷盆地（渭伊郷）は、前期古墳の北岡大塚古墳から馬場古

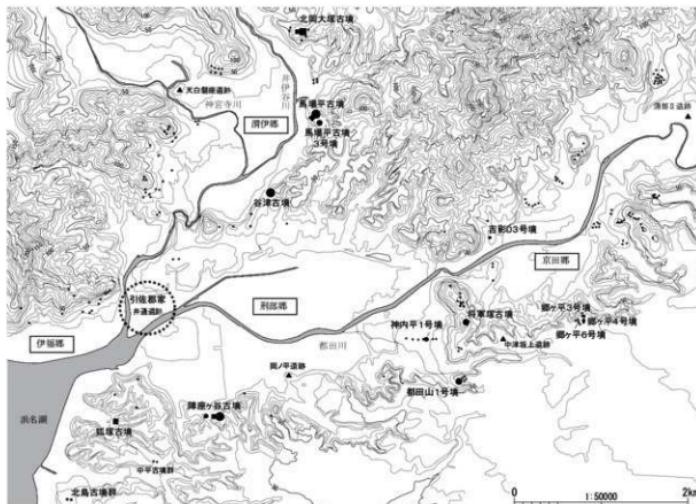


Fig.77 都田川流域における古墳の分布と奈良時代の地域単位

墳に至る首長墓が築造された地である。5世紀代には磐座祭祀が執り行われた天白磐座遺跡も知られ、首長系譜発祥の地として、この地域の精神的支柱としての役割を担っていたとみられる。

浜名湖沿岸地域（伊福郷）には前方後円墳の造営が知られないが、古墳時代中期に方墳が集中する傾向があり、特異な小地域性が認められる。その嚆矢となる狐塚古墳は当地域ではじめて埴輪を採用した古墳であり、短甲を副葬するなど被葬者には武官的な性格が濃厚にうかがえる。

都田川下流域（刑部郷）は、平野が最も発達した地域である。この地には、都田山1号墳といった、中規模の円墳がみられるが、その築造時期は明確になしえない。中期後葉には、当地域最後の最有力首長墓である陣塚ヶ谷古墳が築かれている。この古墳は平野部を広域に見渡せる高台に位置し、後に引佐郡家が立地する井通遺跡をはじめ、肥沃な耕作地を望むことができる。律令制下を中心地となる地域を意識した古墳の立地からは、郡内全域を貫く地域秩序の成立がうかがえよう。

郷ヶ平古墳群が構築された都田川中流域（京田郷）においては中期後葉以降に古墳の築造が活発になる。この地域の5世紀代には、渡来系鉄器である铸造鉄斧の出土（須部II遺跡、浜文協ほか2000）が知られ、機織具等の土製模造品を用いた新來の祭祀が執行された中津坂上遺跡も近隣地にある。また、6世紀前半には古式の横穴式石室に外來系馬具を副葬する吉影D3号墳が築かれるなど、渡来系文物の移入が積極的に行われた地域と評価できる。

郷ヶ平古墳群の構造 こうした革新的な地域に築かれた郷ヶ平古墳群は20m級の小型前方後円墳である3号墳（5世紀後葉、TK23型式期）と4号墳（6世紀前葉、TK10型式期）を中心に形成

されている⁽²⁾。この2基は、隣接して構築されているのみならず、墳丘規模が近似し、ともに埴輪を採用するなど、類似した様相が多く看取できる。二世代にわたる首長層の造墓が継続して行われたとみてよいだろう。なお、この2基に採用される埴輪は淡渦系と尾張系で異なっているが、築造時期における技術系統の差と捉えてよい。

前方後円墳の周囲に展開する円墳についても、1号墳は3号墳と組み合う被葬者間の関係を指摘した。5～8号墳については不明な点が残るが、4号墳に近接した築造時期が想定できる。先行して構築された3号墳の前方部周溝外周（SX01）において、4号墳の築造時に祭祀が行われている点も見逃せない。都田川中流域を本拠地とした小集団がかわる祖靈祭祀的な様相をうかがうことができよう。

また、この2基の前方後円墳の祭祀には、陶邑系（湖西窯を含む在地窯）須恵器と在地系（有玉窯）須恵器の双方が用いられた点も興味深い。手工業生産物として、系統が異なる地元産須恵器を意識的に揃えた可能性が考えられる。郷ヶ平古墳群の造営集団は、湖西窯から有玉窯を含む範囲に強い交流網をもっていたことがうかがえる。



Fig.78 都田川流域における首長墓の推移

2 郷ヶ平古墳群の形成過程とその特質

年 代	墳 丘	須惠器	円筒埴輪	形象埴輪	特記事項
450 TK208	1号墳				古墳群の造営開始 前方後円墳の選定
475 TK23	3号墳	1号墳	2号墳	3号墳	法輪系埴輪の採用 周溝周辺における祭祀
500 TK47 WT15	4号墳	3号墳 外周(330)	5号墳 6号墳 7号墳	4号墳	尾張系埴輪の採用
525 TK10	5号墳 外周(330)	6号墳	6号墳	6号墳	前方後円墳の選定 3号墳外周における祭祀
550 TK43	7号墳	4号墳	4号墳	4号墳	古墳の造営停止

Fig.79 郷ヶ平古墳群の構造

(4) 結語

郷ヶ平古墳群の造営集団を5世紀後葉に頭角をあらわした地域勢力で、奈良時代に「京田郷」と呼ばれた小地域を束ねる小首長層と想定した。京田は「屯倉」田との関連が指摘されており、その解釈が妥当なら、遠江のなかでも倭王権の直轄地的な関与が進んだ地域という評価も許されよう。古墳群の勢力圏内の都田地域には铸造鉄斧といった渡来系文物の出土も知られ、6世紀前半には率先して横穴式石室を構築する勢力が生まれるなど、新米の技術や文化の移入が積極的に進められた地域である。郷ヶ平古墳群の造営集団は、こうした新しい地域秩序の末端を担う有力階層であり、その中核をなす郷ヶ平3号墳の被葬者は渡来系文物の移入を積極的に促し、地域社会のなかで影響力を増した新興の指導者と位置づけられるだろう。

(鈴木)

【註】

- (1)「渭伊」は、元来「井(イ)のクニ」と呼ばれたこの地域の本貫地とされる。「伊福」は伊福部連の部曲、「刑郎」は王家がかわいわる名代の存在を示す。ともに倭王権もしくは有力氏族の直轄地としての性格がうかがえよう。また、「京田」もミヤケダ(屯倉田)が転訛した可能性が指摘されている(辰巳 1994)。
- (2) 墓輪をもつ郷ヶ平6号墳については、墳形が不明確であるため、詳細な位置づけが難しい。6号墳は、4号墳と組み合う有力円墳と評価することが可能であるが、4号墳とも異なる系譜の埴輪をもち、独自性がみられることから、前方後円墳の可能性も考慮すべきである。6号墳を前方後円墳とみるなら、3つの基本単位があるとみることも可能である。

第4章 総括

本書で報告した調査内容は、郷ヶ平古墳群にかかわる新知見を提供しただけでなく、5世紀後葉における墳丘の特徴や、人物埴輪を伴う埴輪祭祀の東海における展開など、多岐にわたる成果をもたらした。さいごに調査内容と後論で明らかにした事がらを要約し、総括としたい。

郷ヶ平1号墳 郷ヶ平1号墳は直径13.6mの円墳である。幅2mほどの周溝があるが、葺石、埴輪はもたない。周溝の二箇所には陸橋部が認められる。埋葬施設は既に削平されていたが、周溝の陸橋部近辺から築造時期を示す須恵器と土師器が出土した。古墳の築造時期は、周溝出土の須恵器から、5世紀後葉（TK23型式期）と捉えられる。また、周溝からは6世紀前葉（TK10型式期）の須恵器も出土している。古墳築造後にも何らかの祭祀が執り行われたとみられる。

郷ヶ平3号墳 郷ヶ平3号墳は全長22.3mの前方後円墳である。幅2.5mほどの周溝をそなえ、埴輪を立ち並べる。葺石は施されていない。1号墳と同様に埋葬施設は既に削られていたが、周溝内から土器と豊富な埴輪が出土した。周溝内から出土した須恵器は、5世紀後葉（TK23型式期）のものとみられ、古墳の築造時期を示すといえる。また、前方部片隅には周溝が一部突出した箇所が認められ、そこから破碎された状態で6世紀前葉（TK10型式期）の須恵器が出土した（SX01）。前方部外周に祭祀空間があったことがうかがえ、古墳築造以後に実施された祭祀の存在が明らかになった。

埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。円筒埴輪は2条突帯3段構成のもので、基底部に段をもつ淡輪技法で製作されている。第1段にヨコハケをもつ一群ともたない一群があり、両者の混在が確認できた。形象埴輪には、人物埴輪、馬形埴輪、動物埴輪、家形埴輪の各種が確認できる。人物埴輪には、彈琴人物、馬曳き、女子があり、胡坐をかく人物が加わる可能性がある。馬形埴輪は完形に復元できる貴重な事例である。彈琴人物埴輪は、琴の部分しか遺存しないが、その初源期に近い資料であり注目に値する。表現された琴は写実的で、全国的に見ても最大級の事例である。円筒埴輪、形象埴輪とともに古墳築造時期（TK23型式期）の所産とみて矛盾はない。

郷ヶ平古墳群の形成過程 郷ヶ平古墳群は合計7基の古墳で構成されるが、今回調査した1号墳および3号墳がはじめに築かれたものと捉えられる。前方後円墳と円墳の組合せは、遠江の前期、中期古墳に広く認められ、小規模ながら首長層がかわる伝統的な集団構造表現を踏襲している。ただし、埴輪の樹立は前方後円墳に限られ、葺石をもたないなど、豊富な形象埴輪の樹立とともに新たな墳墓様式としての外観を呈していることも注目できる。

古墳群造営の歴史的意義 郷ヶ平古墳群が構築された都田川流域（引佐郡域）は自然地形で隔てられた4つの小地域に分離できる。郷ヶ平古墳群はそのなかでも、古代に「京田郷」と呼ばれていた都田川中流域に築かれている。古墳や集落の動向からは、この地域は周囲の小地域と比べて、渡来系文物が多くみられ、新來の情報をいち早く受容した革新的性格がうかがえる。郷ヶ平古墳群の被葬者集団は、こうした小地域の中で渡来系の技術や文化の移入に指導力を発揮した有力階層とみられる。

（鈴木）

【参考文献】

- 赤木 剛 1994『念仏塚5号墳出土の埴輪』『三河考古』第7号
- 愛知県 2005『愛知県史』資料編3 古墳
- 碧田市教育委員会 2001『京見原古墳群発掘調査報告書』
- 碧田市教育委員会 2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 岡崎市教育委員会 1993・1994『古村横神社古墳発掘調査報告書(その1)』、『同(その2)』
- 笠原 澄 2004『理もれた美器』春秋社
- 群馬県古墳時代研究会 2008『群馬県内の人物埴輪』
- 湖西市教育委員会 1992『酒西市一ノ宮宮庭地内道路発掘調査報告書』
- 鐘方正樹 1997『前期古墳の円筒埴輪』『堅田直先生古稀記念論文集』真陽社
- 川西安幸 1977『淡輪の育長と埴輪生產』『大阪文化誌』2-4
- 川西安幸 1978『円筒埴輪論』『考古学雑誌』第64巻第2号
- 栗原雅也 2005『神内平1号墳』『神内平古墳群』細江町教育委員会
- 静岡県教育委員会 2007『静岡県の前方後円墳』
- 静岡県 1990『静岡県史』資料編2 考古二
- 白井秀明・鈴木京太郎 2003『辺田平1号墳出土の埴輪について』『浜北市史』資料編 原始古代中世 浜北市
- 埼玉県教育委員会 1984『瓦原古墳』
- 辻川哲郎 2007『埴輪生産からみた須恵器工人』『考古学研究』第54巻第3号
- 鈴木一有 2005『鐵器の受容からみた古墳時代中期の東海』『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム
- 鈴木一有 2011『松林山古墳と遠江の前期古墳』『黄金の世紀』中日新聞社
- 鈴木一有 2012『孤塚古墳調査概要報告』『平成22年度浜松市埋蔵文化財調査概要』浜松市教育委員会
- 鈴木 徹 1997『三河地域の形象埴輪(1) 一念仏塚古墳群の埴輪』『三河考古』第10号
- 鈴木 徹・白井秀明 1998『三河地域の形象埴輪(2) 大頭神社所蔵の埴輪』『三河考古』第11号
- 鈴木敏則 1990『遠江の淡輪系埴輪』『松機』3号
- 鈴木敏則 1994『淡輪系円筒埴輪』『古代文化』第46巻第2号
- 鈴木敏則 2001『埴輪』『静岡県の前方後円墳—総括編—』静岡県教育委員会
- 鈴木敏則 2003『淡輪系円筒埴輪2003』『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』埋蔵文化財研究会
- 辰巳弘 1994『地域王權の古代学』白水社
- 辰巳弘 2006『聖なる水の祀りと古代王權 天白磐座遺跡』新泉社
- 浜松市教育委員会 1998『千人塚古墳 千人塚平・宇摩坂古墳群』
- (財)浜松市文化協会ほか 2000『須頭II遺跡』
- 浜松市教育委員会 2004『有田古窯』
- (財)浜松市文化振興財團 2006『郷ヶ平4号墳II』
- 浜北市 2004『浜北市史』資料編 原始古代中世
- 浜北市教育委員会 2006『内野古墳群』
- 坂疋 慶裕昌 1989『埴輪技法の伝播とその問題』『木ノ本釜山(木ノ本III)遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会
- 細江町教育委員会 1995『北島遺跡発掘調査報告書』
- 細江町教育委員会 2005『神内平古墳群』
- 桃積裕昌 1999『初期人物埴輪における男性埴輪の一様相』『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター
- 桃積裕昌 2001『伊勢の埴輪生産—淡輪系と在来系(非淡輪系)—』『研究紀要』第10号 三重県埋蔵文化財センター
- 宮崎まゆみ 1993『埴輪の楽器』三交社
- 山田 晓 2012『光明山古墳探集の埴輪片』『浜松市博物館報』第24号
- 山田光洋 1998『楽器の考古学』同成社
- 横須賀市教育委員会 1987『蓼原』

【図出典】

上記各文献より引用、一部改変

出土遺物観察表

凡例

地区・地点の（ ）は、出土状態図に示す前に取り上げた遺物の出土位置を示す

「残存率」 全体における残存している割合を%（10%きざみ）で示す

残存率10%未満のものを「5」と示す

「反」 反転して図化したもの

大きさの単位は「cm」

馬形埴輪の鉢や古鉢は「全長=器形」、「幅=器高」、「厚さ=口径」として示す

ケズリ方向は、砂粒の動きを記載した

ハケメの本数は、2cm 中にある条数を示した

「色調」は、『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している

出土遺物観察表 (1)

Fld	番号	加工番号	造形	地区・地点	埋蔵	形状	周長率	瓦径	厚径	底面	色調	備考
22	1	521	3号墳		石器	石盤		24			下品石質、0.8g	
22	2	78	1号墳		石器	打製石斧		6.3	6.3		砂岩製、106.7g	
22	3	694	3号墳		石器	打製石斧		8.3	3.7		綠色片岩製、端面に使用痕、66.3g	
22	4	323	3号墳		石器	打製石斧		7.3	4.1		綠色片岩製、57.7g	
23	5	11	3号墳		深腹器	有台長縫口	10	反	14.8		灰白	底径 12.7 ~ 8世紀、1トレンチ
23	6	98	3号墳周辺		石器	石盤		5	反		16.0	灰白
23	7	192	3号墳	A	中空陶器	山窓瓶	10	反			灰白	底径 8.0
23	8	74	3号墳	F	土師器	瓶	10	反		8.0	淡黄褐	
23	9	35	3号墳	D	青銅製品	鉢貝	100	2.6	2.6	0.1		「文久永寶」、2.1g、試 111号
27	1	684 - 685 - 750	1号墳		深腹器	片蓋	60	13.5	5.3	12.9	黒墨灰	ケズリ方向差、湖西か
27	2	681	1号墳		深腹器	片蓋	5	反		14.0	灰	
27	3	511	1号墳		深腹器	片蓋	5	反	13.8	13.6	灰	
27	4	766	SK04		深腹器	片蓋	5	反			灰	上層
27	5	510	1号墳		深腹器	片蓋	5	反	13.8		灰	
27	6	197-207-284	1号墳		深腹器	有台長縫口	50	反	19.4		暗青灰	銀錠 85.底径 12.8. ケズリ方向左
27	7	744	1号墳周辺		土師器	瓶	5				黃褐	黒灰
34	1	59-183-520	3号墳	I	深腹器	片蓋	90	13.0	4.8		白灰	ケズリ方向右
34	2	529	3号墳	I	深腹器	片蓋	90	13.1	5.3		白灰	ケズリ方向右
34	3	538 - 520	3号墳	I	深腹器	片身	90	13.8	5.5	11.4	白灰	ケズリ方向右
34	4	527	3号墳	I	深腹器	片身	90	13.6	5.3	11.0	白灰	ケズリ方向右
34	5	試 265 ~ 269	3号墳	I	深腹器	片身	80	14.0	5.3	11.6	暗青灰	ケズリ方向右、ヘラ記号「-」。試 111号
34	6	524-525	3号墳	I	深腹器	無蓋高环	80		12.3	16.6	灰	TG23. 鋼瓶紐 54. 鋼環 12.3. ケズリ方向左
34	7	99	3号墳	I	深腹器	片蓋	5	反	14.4	14.2	灰	
34	8	134-712	3号墳	I	深腹器	片蓋	5	反	13.8	11.8	灰	
34	9	383-419-試 271	3号墳	I	深腹器	短縫口	90	16.5	6.5	8.1	灰白	片面一部自然釉、有玉か
34	10	64-67-704	3号墳	II	深腹器	広口壺	40	43.6	43.6	21.6	灰	底径 16.2
34	11	572-703	3号墳	I	土師器	瓶	10	反	12.2		禮	底径 7.8
34	12	181-188-683	3号墳	II	深腹器	片身	50	13.3	5.0	11.3	灰	ケズリ方向左、湖西か
34	13	37	3号墳	V	深腹器	片身	90	13.5	5.2	11.4	灰	ケズリ方向左、湖西か
34	14	試 257	3号墳	G	深腹器	片蓋	5	反			灰	ケズリ方向左
34	15	試 264	3号墳	H	深腹器	片蓋	5	反			青灰	ケズリ方向右、表裏
34	16	682	3号墳	H	深腹器	片身	5	反			灰	
34	17	32	3号墳	H	深腹器	瓶	5				灰白	
34	18	147-150-160	SK01	VI	深腹器	片蓋	50	13.8	4.8		灰	
34	19	143-149-155	SK01	VI	深腹器	片蓋	40	14.0	4.1		灰白	天井中央手朱調整、湖西
34	20	48	SK01周辺		深腹器	片身	5	反	16.1	15.8	灰	
34	21	48-296	SK01周辺		深腹器	片身	5	反	13.7	13.6	灰	
34	22	48	SK01周辺		深腹器	片身	5	反	13.8	13.4	灰	
34	23	47-48	SK01周辺		深腹器	片身	5	反	12.8	12.6	灰	
34	24	146	SK01	VI	深腹器	片蓋	5				灰	
34	25	141-157-161	SK01	VI	深腹器	片身	80	14.4	4.8	12.2	灰白	ケズリ方向右、有玉系
34	26	99	SK01周辺	VI	深腹器	片身	40	14.0	4.3	11.7	灰	ケズリ方向左、有玉か
34	27	48-136-140	SK01	VI	深腹器	片身	10	反	14.8	12.2	灰	
34	28	89-137-144	SK01	VI	深腹器	片身	5	反		12.0	灰	
34	29	139	SK01周辺	VI	深腹器	片身	5	反			灰	
34	30	試 248	SK01周辺	VI	深腹器	片身	5	反			青灰	底径 5.0. ケズリ方向左、試 2号
34	31	144-157-701	SK01	VI	深腹器	無蓋高环	80		12.5	11.6	灰白	頭輪 3.6. 銀錠 9.5. スカン 2段 2方向、非有玉か
34	32	48-140-759	SK01	VI	深腹器	横底	30	反	16.3		灰	底径 5.2
34	33	238	1号墳	A	土師器	小形壺	5	反		11.0	禮	
34	34	241	3号墳	A	土師器	高环	10	反			禮	に点打
34	35	234	3号墳	A	土師器	高环	10	反			禮	頭輪 2.8
34	36	220	3号墳	A	土師器	高环	5	反			禮	頭輪 3.0
34	37	142-143	3号墳周辺	A	土師器	壺	70	反			禮	底径 4.0
48	38	193-230-751	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	20	反		36.1	灰・禮	外表面凹り一辺付 (7 ~ 8本)
48	39	237-259	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		44.0	禮	外表面凹り一辺付 (10本)
48	40	217	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		41.2	禮	外表面凹り一辺付 (3本)、内面凹り付 (6本)
48	41	246	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		41.0	禮	32nF (10本)
48	42	47-251-259	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	10			40.0	禮	外表面凹り一辺付 (9 ~ 10本)
48	43	236-257-718	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	10	反		40.0	禮	外表面凹り一辺付 (8 ~ 9本)
48	44	751	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		35.0	禮	外表面凹り一辺付 (8 ~ 9本)
48	45	221	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5			37.7	禮	外表面凹り一辺付 (10本)
48	46	228	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		35.0	禮	32nF (10本)
48	47	24	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反		32nF	禮	32nF (10本)
48	48	232-241-721	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	10				禮	外表面凹り (7 ~ 10本) ~ 32nF (7 ~ 8本)
48	49	39-250-254	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	10	反			禮	32nF (6 ~ 7本)
49	50	714-742-751	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反			禮	32nF (8本)
49	51	236	3号墳	A	埴輪	円筒埴輪	5	反			禮	外表面凹り (8本) ~ 上部32nF (7 ~ 8本)

出土遺物觀察表 (2)

Fid	番号	加工番号	造形	地区・地点	埋蔵	形状	底面率	反転	側面	厚さ	口径	色調	備考
49	53	251~752	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面下段33n寸(8本)・上部9n寸~33n寸(3本)			
49	54	223~230	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面9n寸~33n寸(8~9本)			
49	55	742	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5		橙				
49	56	243	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5		橙				
49	57	214	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5		橙	安葬部分1次33n寸~9n寸(8~9本)			
49	58	248	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面下段9n寸(8~9本)・上部12n寸			
49	59	237	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙				
49	60	88	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5		橙				
49	61	242	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	底径23.8、外周9.5n寸(7~8本)			
49	62	95	3号罐	A	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	底径17.4、外周9.5n寸(8~9本)			
49	63	23	3号罐	B	埴輪	円筒埴輪	10		40.0				
49	64	262	3号罐	B	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面9n寸~33n寸(9本)			
49	65	264	3号罐	B	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面9n寸~33n寸(8本)			
49	66	263	3号罐	B	埴輪	円筒埴輪	5		橙				
49	67	263	3号罐	B	埴輪	円筒埴輪	5		橙				
50	68	522	式261・式286	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	70		43.5	42.0	橙	底径28.7、外周9.5n寸~33n寸(8~10本)
50	69	295	3号罐	C	埴輪	新規形埴輪	5	反	38.0			橙	外面23.5n寸、内面32n寸(9本)
50	70	258	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	5		橙	外面23.5n寸(7本)			
50	71	281	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	外面9n寸~33n寸			
50	72	279	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	底径28.2			
50	73	282	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	5		橙	底径27.1、外周9.5n寸~33n寸(7本)			
50	74	271	3号罐	C	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	底径22.1、外周9.5n寸~33n寸(7本)			
50	75	59	3号罐	O	埴輪	円筒埴輪	5	反	橙	底径20.7、外周9.5n寸(8~9本)			
51	76	336	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	10	反	41.2			橙	外面23.5n寸(8~9本)、内面32n寸(8本)
51	77	540	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	41.1			橙	外面9n寸~33n寸(8本)、内面32n寸
51	78	478	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	40.8			橙	外面9n寸~33n寸(10~11本)、内面32n寸(8本)
51	79	466	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	38.8			橙	外面9n寸~33n寸(8本)、内面32n寸(8本)、赤彩
51	80	536~559~580	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	10	反	38.6			橙	外面9n寸~33n寸(7~8本)、内面32n寸(7~8本)
51	81	548	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	38.1			橙	外面9n寸~33n寸(7~8本)、内面32n寸(7本)
51	82	544	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	37.0			橙	外面23.5n寸(8本)
51	83	547	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	35.0			橙	外面9n寸~33n寸(7本)、内面32n寸(7本)
51	84	534	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	34.0			橙	外面9n寸~33n寸(8~7本)、内面32n寸(10本)
51	85	531	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反	33.8			橙	外面9n寸~33n寸(7~8本)、赤彩
51	86	538	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(8~9本)
51	87	551	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	
51	88	474	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	
51	89	531	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面32n寸(8~9本)
51	90	533	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	
51	91	178	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5					橙	外面23.5n寸(7~8本)
51	92	702	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	10	反				橙	外面23.5n寸(7~8本)
51	93	555	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(7本)
51	94	538	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面9n寸~33n寸
51	95	559	1号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面9n寸~33n寸(8~9本)
51	96	547	3号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	底径23.2、外周9.5n寸(8本)
51	97	466	2号罐	F	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	底径23.0、外周9.5n寸(8本)
52	98	564~659~735	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	30	反	43.7	43.0	反グリップ	橙	底径23.2、外周9.5n寸(7本)~33n寸(8~11本)
52	99	116	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反	46.0			橙	外面9n寸(8~7本)~33n寸(7本)
52	100	754	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反	41.0			橙	外面9n寸~33n寸(7本)
52	101	740	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反	41.0			橙	外面9n寸~33n寸(8本)
52	102	116	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反	40.0			橙	外面9n寸~33n寸(7本)
52	103	735	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	10	反	35.0			橙	外面9n寸~33n寸(7本)
52	104	738	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(7~8本)
52	105	542~593~596	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(7本)、内面32n寸(7本)
52	106	646~756	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	10	反				橙	底径23.0、外周9.5n寸(7~8本)
52	107	562~563	2号罐	G	埴輪	円筒埴輪	10	反				橙	底径23.0、外周9.5n寸(7~8本)
52	108	756	3号罐	G	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	底径23.0、外周9.5n寸(7本)
52	109	123	3号罐	H	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(8本)、内面32n寸(7~8本)
52	110	11	3号罐	H	埴輪	円筒埴輪	5	反				橙	外面9n寸~33n寸(8本)、下部外周9.5n寸(7本)、内面32n寸(8~9本)
S3	111	537	3号罐	F	埴輪	新規形埴輪	5	反	46.0			橙	外面9n寸~33n寸(8~9本)
S3	112	271	3号罐	G	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	
S3	113	28	3号罐	C	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	
S3	114	17~125	3号罐	H	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	外面23.5n寸(7~8本)
S3	115	534	3号罐	F	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	
S3	116	266	3号罐	G	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	
S3	117	728	3号罐	G	埴輪	新規形埴輪	5	反				橙	
S4	118	590~595~618~620	3号罐	E	埴輪	馬頭埴輪	40					橙	
S4	119	21~94	3号罐	F	埴輪	馬頭埴輪	5					橙	
S4	120	84	3号罐	F	埴輪	馬頭埴輪	5					橙	

出土遺物観察表 (3)

Fld	番号	加工番号	造形	地区・地点	埋蔵	断面	直徑率	厚起	側面	底面	口径	色調	備考
59	121	455	3号墳	F	埴輪	馬形埴輪	5				縦		
59	122	113	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5				縦		
59	123	461	3号墳	F	埴輪	馬形埴輪	5				縦	馬又は動物の尻尾	
59	124	451	3号墳	F	埴輪	馬形埴輪	5				縦		
59	125	437	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	4.0	2.9	2.4	縦	縦	
59	126	試256	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	3.3	2.6	1.9	直横	縦、試3号シテ	
59	127	試250	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.9	2.6	1.8	縦	縦、試3号シテ	
59	128	434	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.7	2.3	2.4	縦	縦	
59	129	121	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.4	2.5	2.0	縦	縦	
59	130	608	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.3	2.4	2.3	縦	縦	
59	131	377	3号墳	D	埴輪	馬形埴輪	5	2.4	2.3	2.0	縦	縦、刀子状工具	
59	132	433	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.3	2.3	2.1	縦	縦、刀子状工具	
59	133	89	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	2.0	2.2	1.9	縦	縦	
59	134	40	3号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	1.9	2.1	2.0	縦	縦、切り込みなし	
59	135	167	1号墳	E	埴輪	馬形埴輪	5	1.8	1.8	1.3	縦	縦、切り込みなし	
60	136	585-586-587	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	10				縦		
60	137	423	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦をかぶる人。頭	
60	138	試272-413	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦		
60	139	415	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	頭部	
60	140	365	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	巫女	
60	141	95	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5	6.0			縦	巫女の手に持つ盾破片	
60	142	423	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	巫女の足	
60	143	610	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	巫女の腰か	
60	144	71-121-457	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	人物の帯	
60	145	47	3号墳	C	埴輪	人形埴輪	5				縦	巫女の腰	
60	146	403	2号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
61	147	404	2号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
61	148	421	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
61	149	405-441	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦、試3号シテ	
61	150	試190-191-281	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦、試3号シテ	
61	151	426	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
61	152	101	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	高村氏	
61	153	82	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	肩か	
61	154	393	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	足か	
61	155	388-398	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	足	
61	156	4	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
63	157	410-415-423	3号墳	E	埴輪	人形埴輪	5				縦	縦	
64	158	697	3号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5	11.0	3.5		縦	圓木	
64	159	440	3号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5	10.6	2.8		縦	圓木	
64	160	439	2号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5				縦	にぶい夷縄	
64	161	44	3号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5				縦	大縄	
64	162	407-417	3号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
64	163	297	1号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
64	164	363	3号墳	D	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
64	165	398	2号墳	E	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
64	166	474	3号墳	F	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
64	167	476	2号墳	F	埴輪	宝形埴輪	5				縦		
65	168	366	3号墳	D	埴輪	不規形像	5				縦		
65	169	453	3号墳	F	埴輪	不規形像	5				縦		
65	170	712	3号墳	C	埴輪	不規形像	5				縦		
65	171	423	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	172	71	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	173	71	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	174	71	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	175	428	2号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	176	424	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
65	177	47	2号墳	C	埴輪	不規形像	5				縦		
65	178	415	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦	底径24.8	
65	179	431-522-587	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦	底径22.8	
65	180	415	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦	底径25.6	
65	181	408-415-423	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦	底径25.2	
65	182	417	3号墳	E	埴輪	不規形像	5				縦		
67	1	753	SK01	F	土師器	釜	5	反			縦		
67	2	687	SK01	F	土師器	高杯	10	反			縦	底径10.4	

図版
PLATE





1 郷ヶ平1号墳の旧状（1966年8月撮影、南東から）



2 郷ヶ平3号墳の旧状（1966年8月撮影、北西から）

PL.2



郷ヶ平1号墳 全景（北西から）



1 1号墳 完掘状況（南西から）



2 1号墳 周溝南側土層断面（南西から）



3 1号墳 周溝北側土層断面（東から）

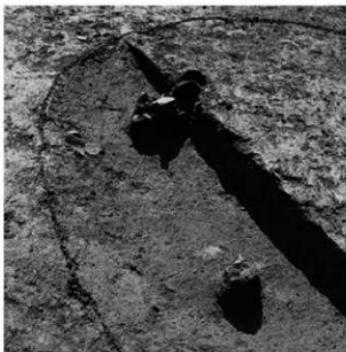
PL.4



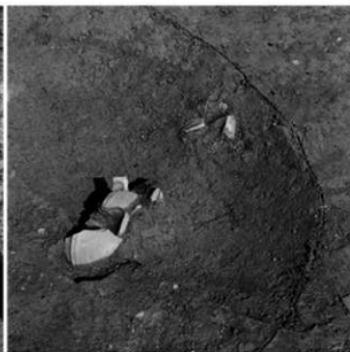
1 1号墳 西側周溝土層断面（北東から）



2 1号墳 北東側周溝土層断面（南西から）



3 1号墳 西側周溝 須恵器出土状態（北から）



4 1号墳 西側周溝 須恵器出土状態（南から）



3号墳 南側周溝埴輪出土状態（東から）

PL.6



1 3号墳 後内部南側周溝埴輪出土状態（東から）



2 3号墳 F地区埴輪出土状態（東から）



3 3号墳 F・G地区埴輪出土状態（東から）



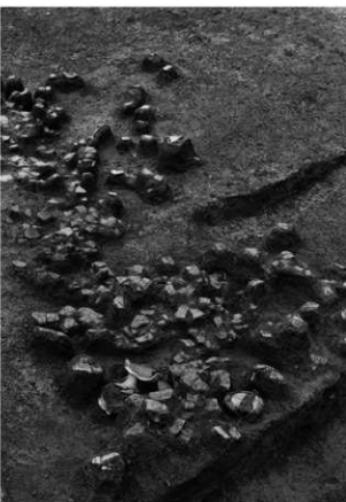
3号墳 前方部南側周溝埴輪出土状態（西から）



1 3号墳 前方部埴輪出土状態（南西から）



2 3号墳 E地区形象埴輪出土状態（東から）



3 3号墳 D地区・I地点遺物出土状態（南東から）



1 3号墳 馬形埴輪出土状態①（北西から）



2 3号墳 馬形埴輪出土状態②（東から）



3 3号墳 馬形埴輪出土状態③（西から）



1 3号墳 前方部北側周溝埴輪出土状態（北から）



2 3号墳 A地区下層埴輪出土状態（東から）



3 3号墳 C地区下層埴輪出土状態（北西から）



1 3号墳 I地点 須恵器出土状態（北西から）



2 3号墳 I地点 須恵器出土状態（北から）

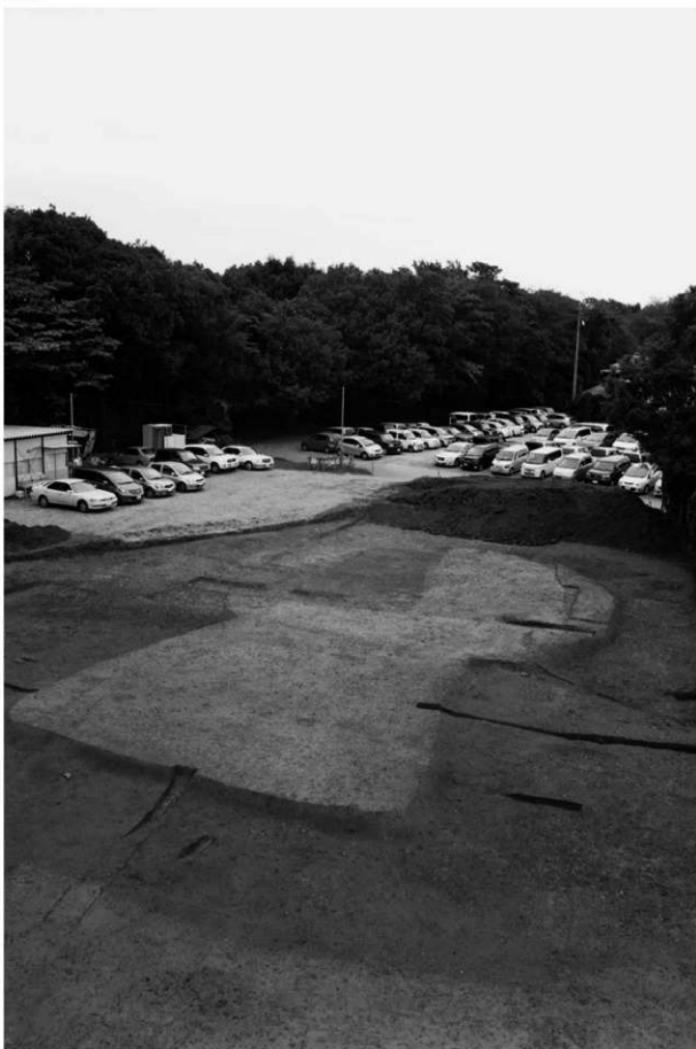


3 3号墳 V地点 須恵器出土状態（南から）



4 3号墳 I地点 須恵器出土状態（南西から）

PL.12



3号墳 完掘状況（西から）



3号墳 完掘状況（東から）



1 郷ヶ平3号墳 出土須恵器



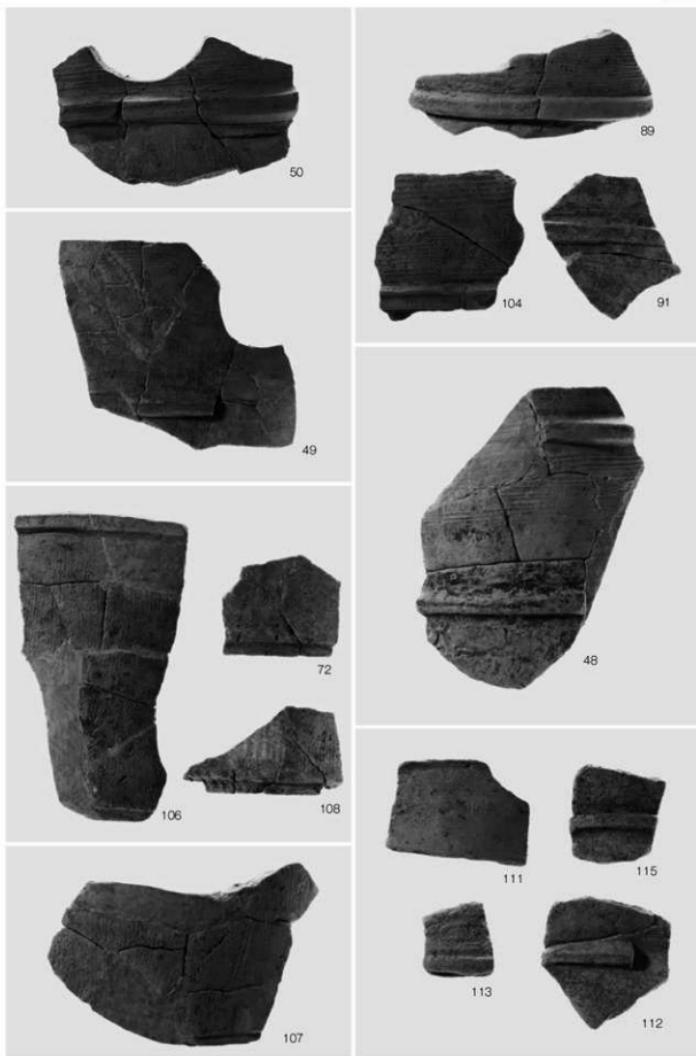
2 郷ヶ平古墳群 出土須恵器 (I)



郷ヶ平古墳群 出土須恵器 (2)



郷ヶ平3号墳 出土円筒埴輪(1)



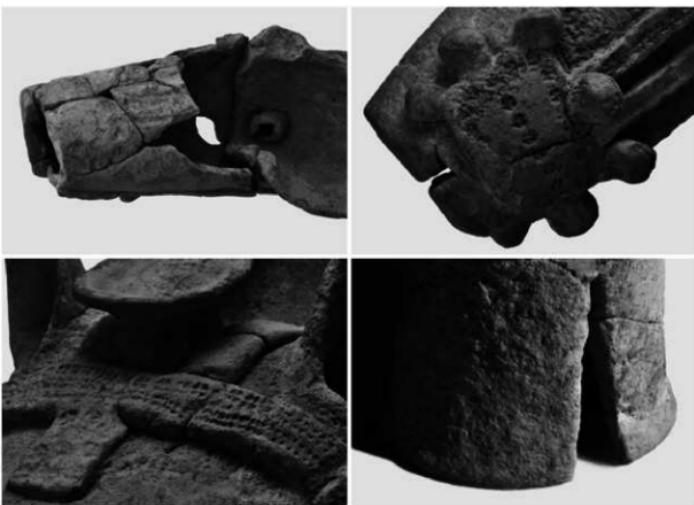
3号墳 出土円筒埴輪(2)



3号墳 出土馬形埴輪



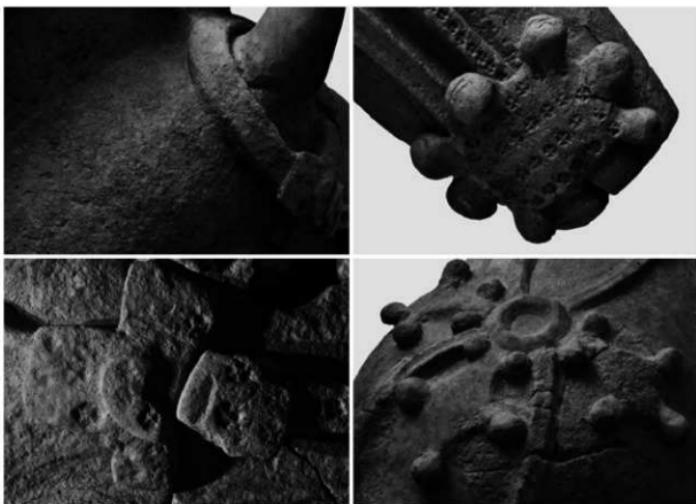
1 3号墳 出土馬形埴輪（左侧面）



2 3号墳 出土馬形埴輪 詳細（1）



1 3号墳 出土馬形埴輪（右側面）



2 3号墳 出土馬形埴輪 詳細（2）



3号填 出土形象埴輪 (1)

PL.22



3号填 出土形象埴輪(2)

報告書抄録

書名（ふりがな）	郷ヶ平古墳群（ごうがひらこふんぐん）							
編著者名	鈴木一有、開根章義、和田達也							
編集機関	浜松市教育委員会 〒 430-0917 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	財団法人 浜松市文化振興財団 〒 430-7790 浜松市中区板屋町 111-1							
発行年月日	2012年3月16日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
郷ヶ平古墳群	静岡県 浜松市 北区 都田町 字郷ヶ平 16-2	22202	5-01-62	34 度 48 分 24 秒	137 度 43 分 04 秒	2011年 9月1日 ～ 2011年 11月16日	834 m ²	老人ホーム建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
1号墳	古墳	古墳時代 (中期後葉)	円墳		須恵器、土師器	直径 13.6m の円墳		
3号墳	古墳	古墳時代 (中期後葉)	前方後円墳		円筒埴輪、形象埴輪、 須恵器、土師器	埴輪を持つ全長 22m の前方後円墳		
要約	郷ヶ平古墳群は、静岡県浜松市北区都田町にある初期群集墳で、前方後円墳2基と円墳5基で構成される。発掘調査した1号墳と3号墳は、5世紀後葉(TK23型式期)に築造されたもので、古墳群形成の契機となっている。1号墳は直径 13.6m の円墳、3号墳は全長 22.3m の前方後円墳であり、埴輪が樹立されている。採用された埴輪は底部に段をもつ淡輪技法で製作されており、豊富な形象埴輪が伴う。馬形埴輪は、完形に復元できる貴重例であり、彈琴人物埴輪は静岡県内で初めての出土例である。							

郷ヶ平古墳群

2012年3月16日発行

編 集 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
〒 430-0946 浜松市中区元城町103-2
発 行 財團法人 浜松市文化振興財團
印 刷 松本印刷 株式会社

Gougahira tumuli

The 3rd excavation report

A Report of Archaeological Investigations on 5th
Century Burial Mounds in Western Shizuoka, Japan



March, 2012

Hamamatsu Cultural Foundation